

韓国の昌徳宮後苑における「扁額」と「詩文」からみた
庭園空間の特徴に関する研究

2015年1月

千葉大学大学院園芸学研究科
環境園芸学専攻緑地環境学コース

成 光珉

(千葉大学学位申請論文)

韓国の昌徳宮後苑における「扁額」と「詩文」からみた
庭園空間の特徴に関する研究

2015年1月

千葉大学大学院園芸学研究科
環境園芸学専攻緑地環境学コース

咸 光珉

目次

第1章 序論	7
1. 研究背景と目的	8
2. 既往研究と本研究の位置づけ	10
2.1. 既往研究	10
2.2. 本研究の位置づけ	13
3. 調査方法と論文の構造	14
3.1. 調査方法	14
3.2. 論文の構造	15
引用および参考文献	16
第2章 昌徳宮後苑の沿革および社会的背景	19
1. 昌徳宮の概要	20
2. 後苑の沿革および社会的背景	23
2.1. 朝鮮時代の前期	23
2.2. 朝鮮時代の中期	26
2.3. 朝鮮時代の後期	27
引用および参考文献	30
第3章 扁額からみた昌徳宮後苑の空間特徴	32
1. 本章の背景と目的	33
2. 研究および分析方法	34
2.1. 研究対象	34
2.2. 調査および分析方法	34
3. 扁額の象徴的な意味の抽出及びグループ化	36
3.1. 扁額の象徴的な意味の抽出	36

3.2. 扁額のグループ化	39
4. 扁額からみた昌徳宮後苑の空間特徴	41
4.1. 宙合樓エリア(A)	43
4.2. 演慶堂エリア(B)	48
4.3. 尊徳亭エリア(C)	52
4.4. 玉流川エリア(D)	57
5. 小結	62
引用および参考文献	64
第4章 詩文「上林十景」から連想する昌徳宮後苑の風景イメージの特性	66
1. 本章の目的と構造	67
1.1. 本章の目的	67
1.2. 本章の構造	67
2. 研究および分析方法	68
2.1. 研究対象	68
2.2. 調査および分析方法	70
3. 風景イメージと詩文の関係	72
3.1. 風景イメージの構成要素と詩文の関係	72
3.2. 風景イメージのパターンと詩文の関係	74
4. 小結	77
引用および参考文献	78
第5章 扁額からみた中国・頤和園と韓国・昌徳宮後園空間の特徴と比較	79
1. 本章の背景と目的	80
1.1. 背景と目的	80
1.2. 比較の軸	80
2. 研究および分析方法	81

2.1. 対象地選定理由および概要	81
2.1.1. 対象地選定理由	81
2.1.2. 対象地概要	82
2.2. 調査および分析方法	83
2.3. 扁額の意味解釈および分類	84
3. 扁額の象徴的意味の抽出および割合	85
3.1. 扁額の象徴的意味の抽出	85
3.2. 扁額の象徴的意味の割合	91
4. 各建築における扁額の分布	93
5. 頤和園・昌徳宮後苑の空間特徴と比較	95
5.1. 殿・堂・閣における庭園空間	95
5.2. 齊・軒・門における庭園空間	99
5.3. 楼・亭における庭園空間	102
6. 小結	104
引用および参考文献	105
第6章 結論	106
1. 論文のまとめ	107
1.1. 「扁額」からみた昌徳宮後苑の空間特徴	107
1.2. 「詩文」からみた昌徳宮後苑の風景表象の特長	109
1.3. 「扁額」からみた中国の頤和園と韓国の昌徳宮後苑の比較分析	110
2. 結論	112
3. 今後の課題	113

表目次

〈表 1-1〉	象徴的な観点の研究目録	11
〈表 2-1〉	後苑の造営過程と空間活用	28
〈表 3-1〉	扁額の意味および分類	37
〈表 3-2〉	各グループのプロファール	40
〈表 3-3〉	エリア別グループのプロファール	42
〈表 4-1〉	詩文「上林十景」	69
〈表 4-2〉	風景イメージと構成要素	71
〈表 4-3〉	風景イメージの構成要素の集計	73
〈表 4-4〉	視点別の構成要素と風景イメージのパターン	75
〈表 5-1〉	比較の軸	80
〈表 5-2〉	扁額における象徴的意味の抽出方法の例	85
〈表 5-3〉	頤和園における扁額の象徴的意味と分類	86
〈表 5-4〉	昌徳宮後苑における扁額の象徴的意味と分類	90
〈表 5-5〉	扁額の象徴要素	91
〈表 5-6〉	カテゴリー別の扁額の分布	92
〈表 5-7〉	各建築における扁額の象徴的意味の頻度	94
〈表 5-8〉	両国における伝統建築の機能および特徴	97

図目次

〈図 1-1〉	論文の構造	15
〈図 2-1〉	宮闕利用の沿革図	20
〈図 2-2〉	5 大宮の位置	21
〈図 2-3〉	昌徳宮の平面図	22
〈図 2-4〉	東闕圖	24
〈図 2-5〉	東闕圖形	25
〈図 2-6〉	扁額「奎章閣」と「皆有窩」	29
〈図 3-1〉	第 3 章の構造	35
〈図 3-2〉	善香齋と氷玉池の全景	36
〈図 3-3〉	クラスターの樹系図	39
〈図 3-4〉	エリア別の分布図	41
〈図 3-5〉	宙合樓エリア (A) の平面図	44
〈図 3-6〉	宙合樓エリア (A) の断面図	44
〈図 3-7〉	芙蓉亭から宙合樓をみる (a)	45
〈図 3-8〉	宙合樓から芙蓉亭をみる (b)	45
〈図 3-9〉	喜雨亭の全景と扁額	45
〈図 3-10〉	芙蓉亭の全景	46
〈図 3-11〉	暎花堂の全景	46
〈図 3-12〉	宙合樓エリア (A) 東闕圖	46
〈図 3-13〉	演慶堂エリア (B) 平面図	48
〈図 3-14〉	演慶堂の俯瞰図 (a)	49
〈図 3-15〉	演慶堂の進入部と長楽門 (b)	49
〈図 3-16〉	寄傲軒の全景	50
〈図 3-17〉	不老門の全景	50
〈図 3-18〉	演慶堂エリア (B) 東闕圖	50

<図 3-19>	尊徳亭エリア(C)平面図	52
<図 3-20>	尊徳亭の分析図(a)	53
<図 3-21>	尊徳亭エリア(C)地形図	53
<図 3-22>	尊徳亭と清心亭	54
<図 3-23>	尊徳亭エリア(C)東闕圖	54
<図 3-24>	玉流川エリア(D)平面図	57
<図 3-25>	玉流川エリア(D)東闕圖	58
<図 3-26>	玉流川の全景	58
<図 3-27>	昌徳宮の地形図	59
<図 4-1>	本章の構造	67
<図 4-2>	「上林十景」視点場の分布図	68
<図 4-3>	風景イメージの構成要素	70
<図 5-1>	両宮園の造成時期の一覧図	81
<図 5-2>	中国、頤和園の位置及び平面図	82
<図 5-3>	第5章の構造	83
<図 5-4>	両園の比較項目	84
<図 5-5>	頤和園・佛香閣エリアの細部平面図	96
<図 5-6>	中韓の伝統建築の写真	98
<図 5-7>	諧趣園の平面図	99
<図 5-8>	諧趣園に通ずる知魚橋の全景(a)	100
<図 5-9>	緑に囲まれた諧趣園の全景(b)	100
<図 5-10>	昌徳宮後苑、宙合楼エリアの細部平面図	102
<図 5-11>	愛蓮亭と魚水門の全景	103
<図 6-1>	扁額と庭園空間の関係	108
<図 6-2>	詩文「上林十景」と庭園風景表象との関係	109
<図 6-3>	扁額による頤和園と昌徳宮後苑の比較	110

第 1 章

序論

1. 研究背景と目的

現代の我々は高度に発達した文化の中で生活しており、感情よりは理性が優先し、過去よりは未来が重要な人生を生きている。それにより伝統の方式で表現された神話的で夢想的な考え方を過小評価することになった¹⁾。文化は技術、様式、合理的な知識など、外部から分かりやすく、理解しやすい‘現れた文化、表現された文化(explicit culture)’と、抽象的な価値や微妙な感情など外部から把握しにくい‘隠された文化、内在化された文化(implicit culture)’に分けられる。外来文化の借用で、文化が変動する際‘表現された文化’が発展する一方、‘内在化された文化’は相対的に発展が遅くなり、‘文化遅滞現象(cultural crisis)’が発生する²⁾。

東アジアの伝統庭園の解釈は空間の構成と配置、構造、変化などの形態論的観点と、時代の思想や文化、自然観、造営意図などの象徴論的観点から解釈する方法に大きく分けられる。現在、我々が目でみて認識する庭園空間の客観的な実体は、時空間の制約を受けやすく、復元過程で変形しやすい特徴がある。そのような側面を含め、表現された文化より内在化された精神的文化に本質がある東アジアの伝統庭園における象徴論的観点からのアプローチは物理的な限界を補完し、庭園空間の奥深さが理解できる有用な観点といえる。

韓国は日本・中国とともに漢字文化圏に属し、文字が発達してきた。特に韓国の朝鮮時代(1392~1910)は、民の生活及び多くの事件を記録した「野談」を始め、王の業績と行為、国家の主要行事の内容を記録した「朝鮮王朝實錄」、「承政院日記」、「儀軌」、また、自然山水に対する鑑賞を書いた詩・紀文の文学作品など、文字で表現された記録物が多く伝わっている。その中で文学作品は先祖の芸術的情緒と精神世界が反映されている創作物で、韓国庭園文化の理解に役立つ重要な資料になる。

本研究では文字「扁額」と「詩文」に着目し、その意味から昌徳宮後苑を解釈する。文字は、ある現象の内容を伝える意(meaning)的機能と形像を伝える像(image)的機能がある。

扁額は庭園内に建てられている建築に名称を与え、各々の建築の区別を可能とする役割がある。また、扁額に書かれている文字は、庭園の構成要素である花や樹木、小川、池、岩などを表す意味が多く、庭園空間と関係をもち、またよく調和している。よって、扁額の分析は文字の意(meaning)的側面からアプローチし、空間との関係を分析するのに適している。

詩文はある風景イメージを文字で表現したものといえる。しかし、詩文に表現されている風景イメージが当時の風景をすべて表現したとはいえない。詩文に表現されているものの、作者の感覚と感情により仮想的に作った風景である可能性もある。一方、詩文には表現されていないものの、より広い風景の認識がイメージにあり、文字化が省略されている

可能性もある。以上から、詩文においては、風景の物理的な要素との関係よりは、詩文から風景の象徴的表象を解明することが、内在化された庭園の意味を理解するために有用であると考えられる。よって、詩文の分析では、詩文から風景イメージを再現する文字の像(image)的側面からアプローチし、その空間イメージと詩文の関係を分析する。

本研究はこの両側面から昌徳宮後苑を解釈する。文字の意味からみた昌徳宮後苑の空間特徴を総合的に考察するため、分析は、扁額に込められている象徴的意味と空間の関係からの観点、詩文を理解した読者の視覚からの観点、扁額による中国「頤和園」との比較観点、3つの方向から分析するものである。

具体的な研究の目的は以下の通りである。

①扁額の意味から「思想」と「景観」の要素を抽出し、両要素の関係を把握した上で、昌徳宮後苑の空間特徴を明らかにする。

②宮の風景を描写した詩文を取り上げ、被験者が連想する風景イメージを分析することで、詩文の意味と、描かれたイメージ要素、視点、演出技法との相互関係を総合的に考察する。

③中国の宮「頤和園」を取り上げ、扁額が掛けられている建築および周辺空間の特性、扁額の意味を比較分析し、両庭園の共通点と相違点から昌徳宮後苑の特徴をより明らかにする。

2. 既往研究と本研究の位置づけ

2.1. 既往研究

韓国の伝統庭園に関する研究は形態論的研究と象徴論的研究に分けられる。形態論的研究は庭園空間の構成と配置、立地的特性、景観要素の変化、植栽技法などに関する研究であり、Chung(1978)³⁾、安(1990)⁴⁾、Lee(1995)⁵⁾、曹(1997)⁶⁾などの研究がある。象徴論的研究は思想、自然観、美学など内面の世界を扱った研究であり、沈(1987)⁷⁾、全(1990)⁸⁾、閔(1992)⁹⁾、金(2002)¹⁰⁾などの研究がある。

伝統庭園に関する研究は様式論的研究が主流である中に、最近では朝鮮時代に書かれた詩書絵などの史的資料から庭園を解釈する研究が多く見られる。表 1-1 は「韓国伝統造景学会」の開設から現在(1982~2014.6)までに掲載された論文 885 編(英文誌は除く)の中で、詩書絵の作品を分析資料として研究を行った 66 編を整理した表である。

尹(1993)は詩文と山水画に現れる松(*Pinus densiflora*)を取り上げ、松の象徴的意味を確立し、公園樹、庭園樹、街路樹など、松の利用目的による配置特性を解明し¹¹⁾、Jeon(2004)は朝鮮時代の庭園を一つの芸術作品と認識し、山水画に描かれている山の形態と、庭園に存在する怪石の形態及び配置との関連性を古文献と図版資料を基に考察した¹²⁾。Rho et al.(2010)は芭蕉(*Musa basjoo*)が描かれた山水画 77 点から芭蕉の植栽パターン(単植・混植)と、植栽されている場所(前庭・側庭・後庭)を分類し、その頻度数から芭蕉の植栽様相を分析し¹³⁾、So(2011)は詩文「瀟灑園詩選」と「瀟灑園 30 詠」の解釈本から景観要素を抽出し、瀟灑園の借景構造を分析した¹⁴⁾。また、孫・咸(2011)は昌徳宮後苑の風景を描写した詩文から景物、情景、意境要素を抽出し、意境の概念確立と景観特性を明らかにし¹⁵⁾、Kim・Lee(2014)は記文「林園經濟志」から造園領域を建築、植栽、水の 3 領域に分け、空間要素を抽出した上で、伝統造園技法の特性を考察した¹⁶⁾。これらの研究は図版資料を分析し、植物の現状と植栽手法・様相の特徴を分析した研究であり、詩・記文の訳本を収集・分析し、景観要素の抽出、立地特性、空間要素、場所確認など、景観の特性を解明した研究である。

2000 年を境に、その以前には樹木名の由来や象徴性に関する研究がみられ、以後には詩文と記文、絵などの文学作品から意味、自然観、景観要素、象徴性の把握とともに景観を解釈する研究がみられる。特に、2010 年以後に詩文・記文のテキスト分析を行い、景観の特性と象徴性を結び付ける研究が多くみられる。

〈表 1-1〉 象徴的な観点の研究目録

No	名前	年度	題 目	研究内容	分析資料
1	Min, K.H	1988	地名に現れた岩の名称の類型考察および庭園文化に及ぼした影響	意味解釈	地名・岩名
2	Hwang, J.L., et al.	1992	韓国樹木名の由来に関する研究	意味解釈	植物名
3	Yoon, Y.W	1993	伝統造園樹木としての松の象徴性と配植および利用	象徴性	記文・絵画
4	Rho, J.H	2000	歌詞文学「賞春曲」で展開される風流と景観解釈	景観解釈	歌詞文学
5	Kim, H.W., et al.	2000	「朝鮮王朝實録」分析からみた景福宮と昌徳宮後苑の空間利用行為に関する研究	享受様相	記文
6	Kim, D.G	2000	風水地理的観点からみた俛仰亭の立地に関する研究 - 「俛仰亭歌」内容分析を中心に -	立地特性	歌詞文学
7	Kim, D.C., et al.	2001	風水地理観点から解釈した「歸來亭」の立地に関する研究 - 歸來亭記を中心に -	立地特性	記文
8	Jang, D.S., et al.	2001	「藝溪九曲」の景観意味 - 京畿道楊平郡西宗面蘆門理水入理 -	景観解釈	詩文
9	Kim, H.W., et al.	2002	「朝鮮王朝實録」に現れた漢陽の裨補風水に関する研究	立地特性	記文
10	Moon, Y.S	2002	「俛仰集」分析からみた俛仰亭景観に関する研究	場所確認	記文
11	Rho, J.H., et al.	2002	江湖歌詞文学に現れた先人たちの風流景観象	自然観	歌詞文学
12	Kim, Y.M	2003	詩作りと園林造営方法に関する研究 - 「瀟灑園四十八詠」からみた瀟灑園の造営方法を中心に -	園林造営	詩文
13	Ryu, H.Y., et al.	2004	「謙菴玉淵二精舎十六景記」に現れた河回 16 景の景観特性	景観特性	記文
14	Jeon, Y.O	2004	朝鮮時代の怪石の特性と山水画との関連性に関する研究	景観要素	怪石・絵画
15	Kim, S.J	2005	「高山九曲」に現れた李珣の景観観	自然観	歌詞・絵画
16	Kang, M.S., et al.	2005	ナラティブ形式を適応した昌徳宮解説計画；昌徳宮後苑「上林十景」をテーマにして	景観解説	詩文
17	Lee, S.P., et al.	2005	図上資料に現れた韓国伝統苑池の形態的特性に関する研究 - 古墳壁画および絵図を中心に -	景観要素	絵画
18	Hong, S.H., et al.	2006	「許筠」の著作からみた象徴的空間	景観解釈	記文
19	Yoon, H.Y	2006	「清平寺」園林の景處と景観分析に関する研究-古文献を中心に-	景観解釈	詩・記文
20	Lee, H.Y	2006	「韓山八詠」に現れた文化景観の特性	景観解釈	詩文
21	Paek, C.C., et al.	2007	水原華城の緑地体系に現れた正祖の植木観と植木政策-1910～1960年代写真とユン・ハンフムの絵図を中心に-	自然観	絵画
22	Kim, H.W	2007	「朝鮮王朝實録」に現れた昌徳宮の空間利用行為に関する研究	享受様相	記文
23	Sim, W.K	2007	「古墳壁画」に表現された理想郷が庭園文化に及んだ影響	理論的考察	壁画
24	Rho, J.H., et al.	2007	「瀛洲十景」の形式構造と意味内容からみた済州の景勝観	景観特性	詩文
25	Kim, C.H., et al.	2007	風俗画からみた公共空間の形態特性に関する研究	景観特性	絵画
26	Kim, H.G., et al.	2007	朝鮮時代の仁王山の岩刻文字の特性に関する研究	理論的考察	岩刻文字
27	Kim, H.J., et al.	2007	「東闕圖」に現れた植栽現況および特徴分析	植栽現況	絵画
28	Kim, J.S., et al.	2008	「七狂圖」に表現された景観分析に関する研究	景観特性	絵画
29	Rho, J.H., et al.	2008	「茶山圖」に表現された茶山草堂の原型景観の探索	景観解釈	絵画
30	Shin, S.S., et al.	2009	鎮安の睡仙樓からみた道家的自然観と風流文化	景観特性 自然観	詩・記文 古地図
31	Lee, H.J., et al.	2009	園林の洞天の景観特性	意味解釈 景観特性	文献調査 実測調査
32	Rho, J.H., et al.	2009	「匪懈堂四十八詠」の植物が朝鮮時代の園芸関連書籍に及んだ影響	理論的考察	詩文
33	Kang, S.Y., et al.	2009	「林居十五詠」からみた獨樂堂一帯の景観解釈	景観解釈	詩文

34	Lee, H.W., et al.	2010	樓亭扁額に反映された自然認識と叙情 - 16 世紀潭陽詩家文化圏の樓亭を中心に -	自然観	扁額
35	Hong, H.S., et al.	2010	絵図の植物要素からみた「讀書餘暇圖」の意味	意味解釈	絵画
36	Rho, J.H., et al.	2010	園芸植物ハシヨウの植栽様相とその意味 - 朝鮮時代絵図分析を中心に -	植栽様相 意味解釈	絵図
37	Rho, J.H.	2010	通度八景の景観象徴性と叙事構造	象徴性	記文
38	Sim, W.K., et al.	2010	廣寒樓苑に内在された想像環境要素の考察	象徴性	扁額
39	Ahn, D.S.	2011	廣寒樓扁額詩に現れた景観要素分析	景観要素	扁額
40	Kim, M.H., et al.	2011	古典詩文と絵画からみた蓮華の活用と愛好形態	象徴性	絵画・詩文
41	Rho, J.H., et al.	2011	記文から考察した臨對亭園林の立地および造営特性	立地特性	記文
42	So, H.S.	2011	借景からみた「瀟灑園」園林の構造 - 「瀟灑園詩選」と「瀟灑園三十詠」を中心に -	景観構造	詩文
43	Son, Y.H., et al.	2011	昌徳宮後苑の詩文分析による意境と景観特性	概念定立 景観特性	詩文
44	Rho, J.H., et al.	2011	「神仙」を地名素とする岩名の類型と立地特性	意味解釈 立地特性	岩名
45	Hong, H.S.	2011	古典詩文からみたバシヨウ(Musa basjoo)の植栽意味と設計用途	象徴性	詩文
46	Rho, J.H., et al.	2011	「樓亭題詠詩」と古地図に投影された清心樓と驪州八景の景観構造	景観構造	詩文 古地図
47	Gil, G.S., et al.	2011	韓国俗畫(民畫)に表現された植物の象徴性に関する研究	象徴性	絵図
48	Rho, J.H.	2011	八景詩と古地図に投影された驪州八景の伝承様相	場所確認	詩文 古地図
49	Lee, C.H.	2012	古文獻からみた「英陵」の原型空間と施工方法に関する考察	景観構造	記文
50	Rho, J.H., et al.	2012	岩刻文字からみた扶安「官衙」と「上蘇山」一帯の場所性	場所確認	岩刻文字
51	Rho, J.H., et al.	2012	「象頭山」岩刻文字の特徴と景観の意味	意味解釈	岩刻文字
52	Choi, M.Y., et al.	2012	朝鮮時代における「茶画」に現れる景観要素	景観要素	絵図
53	Shin, S.S., et al.	2012	別業「何去園」園林に投影された造営思想の研究	自然観	詩・記文
54	Rho, J.H., et al.	2012	「醉石亭園林」に含まれた造形言語の意味論的解釈・「醉石」と「七星巖」に込められたアレゴリーと擬態を中心に-	意味解釈 景観特性	記文 実測調査
55	Yoon, Y.J., et al.	2012	朝鮮初期の「成任」の築山に現れた象徴性と形態的具現	象徴性 景観構造	記文
56	Jung, W.J., et al.	2013	朝鮮後期における絵画作品に現れた翠屏の特性	景観要素	絵図
57	So, H.S., et al.	2013	「梅花詩題」からみた梅花の「玩賞」の対象と景観特性	景観体系 景観特性	詩文
58	Hong, K.P., et al.	2013	「観音現相記」からみた朝鮮初期の「上院寺」の景観研究	景観構造	記文
59	Jang, Y.I., et al.	2013	「瀟灑園四十八詠」意味景観構成における陰陽五行論的意味	景観構成 意味解釈	詩文
60	Rho, J.H., et al.	2013	「河回十六景」と「河外洛江上下一帯圖」からみた河回十六景の景観象	景観構造	詩文・絵図
61	Jung, W.J., et al.	2013	豹菴の「扈駕遊禁苑記」からみた昌徳宮後苑の原型景観の探索	景観構造	記文
62	Hong, H.S.	2014	豹菴の「扈駕遊禁苑記」に現れた宮苑遊覧行事の内容と意味	享受様相	記文
63	Jung, W.J., et al.	2014	「東闕圖」からみる怪石の配置特性に関する研究	景観要素	絵図
64	Aha, G.B.	2014	詩文分析を通じた「嶺南樓」の景観特徴に関する研究	景観特性	詩文
65	Rho, J.H., et al.	2014	詩文と岩刻文字からみた咸陽「大孤臺」の景観享有者と場所覇権	景観解釈	詩文 岩刻文字
66	Kim, K.S., et al.	2014	「林園經濟志」からみた庭園造営研究-「怡雲志」と「相宅志」を中心に	造営技法	記文

資料：韓国伝統造景学会(<http://www.kitla.or.kr>)

2. 2. 本研究の位置づけ

本研究は文字表象である「扁額」と「詩文」から昌徳宮の後苑を解釈する研究である。「扁額」と「詩文」の史的資料を扱った既往研究には、楼閣と亭に掛けられている扁額の意味から自然観と美意識を考察した Lee, et al. (2010)の研究¹⁷⁾、「広寒楼」の扁額に現れる景観要素の特徴を分析した Ahn(2011)の研究¹⁸⁾などがある。また、扁額ではないが、岩石に刻まれた文字を着目した研究もある。Rho, et al. (2012)^{19),20)}は「象頭山」一帯に存在する岩石34箇所の現況を調査し、そこに刻まれている文字の意味と書体分析から「象頭山」の象徴性を考察した。このような既往研究は、文字の意味から自然観や反映されている景観要素を把握したことで、場所の特性を包括的に解釈したことに意義がある一方、文字と空間の実証的な関係が行なわれなかった側面がある。

本研究は文字の意味に込められている象徴要素と庭園空間の関係を把握し、アンケート調査を通して風景表象を抽出するなど、昌徳宮後苑に対して意味解釈、空間解釈、風景イメージを総合的に分析し、庭園空間を捉え直すことを新たに目指している。

3. 調査方法と論文の構造

3.1. 調査方法

本研究では文献調査、ウェブサイト調査、現地調査、アンケート調査を実施し、分析を行った。文献調査を通して扁額と詩文の意味、古地図(東闕圖)、当時代の社会・政治的な背景を確認し、古典翻訳ウェブサイト「韓国古典総合 DB」²¹⁾と「奎章閣韓国学研究院」²²⁾を参照し、詩文の原文(漢字)と訳文(ハングル)を収集した。現地調査は2011.4～2013.8にかけて数回を行い、昌徳宮後苑の空間構成・構造、植栽、立地的特徴などを確認した。また、風景表象を抽出するために、風景イメージを描いてもらうアンケート調査を実施した。

3.2. 論文の構造

本論では「扁額」と「詩文」の文字に着眼し、その意味と視点場、風景イメージの関係から昌徳宮後苑の空間特徴を捉え直すために、①扁額に込められている象徴的意味と空間の関係からの観点、②詩文に接した読者の視覚からの観点、③扁額による中国「頤和園」との比較観点、以上の3つの観点からアプローチし、文字の意味からみた昌徳宮後苑の空間特徴を総合的に考察する。各章の構成と研究方法は以下の通りである(図1-1参照)。

第1章は序論として、研究背景と目的、調査と研究方法、論文の構造、既往研究と本論文の位置づけについて述べる。

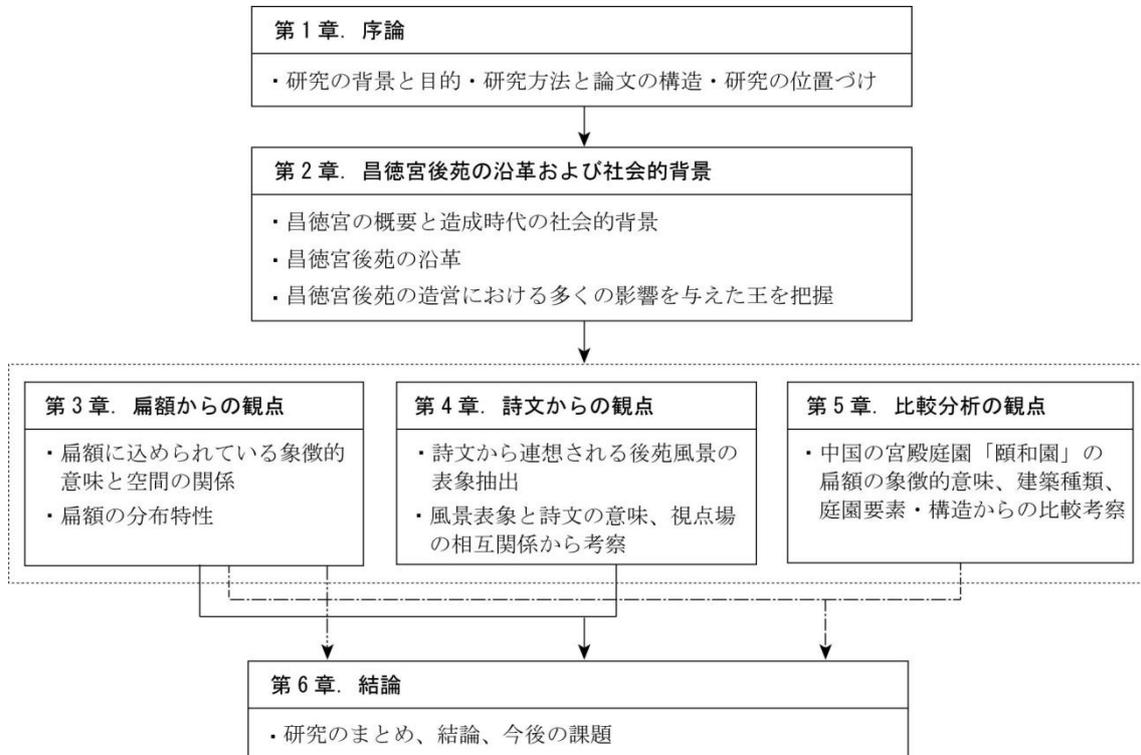
第2章は、昌徳宮が造成された時代(1392～1910)の社会・政治的背景と昌徳宮後苑の造営に比較的多くの影響を与えた王を対象に後苑の沿革を述べる。

第3章は扁額からの観点として、扁額の意味に反映されている「思想」と「景観」の要素を抽出し、扁額が位置する実空間との関係を分析する。また、社会的脈絡と宮園全体の扁額分布から空間特徴を明らかにする。

第4章は詩文の読者の観点として、後苑の風景を描写した詩文を取り上げる。被験者に読ませ、連想される庭園風景の印象をアンケートし、詩文の意味と、描かれた庭園イメージに現れる構成要素、視点、演出技法との相互関係を考察する。

第5章は中国の宮園「頤和園」との比較分析を行う。扁額が掛けられている建築および周辺空間の特性、扁額の意味解釈を比較分析し、両園の共通点と相違点から昌徳宮後苑の空間特徴をより明らかにする。

第6章は各章の結論をまとめた上、本論の結論および今後の課題について述べる。



〈図1-1〉 論文の構造

補注及び引用・参考文献

- 1) Dissanayake, Ellen · 김한영 역(2009) 미학적 인간, 예담, p.351
【Dissanayake, Ellen · Kim, Han-Young 訳(2009) 美学的人間, イェダン, p.351】
- 2) 황기원(2011) 경관의 해석, 서울대학출판문화원, pp.206~210
【黃琪源(2011) 景觀の解釈, ソウル大学出版文化院, pp.206~210】
- 3) 정동오(1978) 韓國庭園의 池塘形態 및 構成에 對하여, 한국조경학회지, Vol.11, pp.1~16
【Chung, Dong-Oh(1978) 韓國庭園の池塘形態及び構成について, 韓國造景学会, Vol.11, pp.1~16】
- 4) 안계복(1990) 樓閣 및 亭子樣式을 통한 韓國 傳統庭園의 特性에 關한 研究, 서울대학교대학원박사논문
【安啓福(1990) 樓閣及び亭子樣式からみた韓國傳統庭園の特性に関する研究, ソウル大学大学院博士論文】
- 5) 이상윤(1995) 朝鮮時代 書院의 立地와 空間構成特性 및 變化過程에 關한 研究, 성균관대학교대학원박사논문
【Lee, Sang-Yun(1995) 朝鮮時代における書院の立地と空間構成特性及び變化過程に関する研究, 成均館大学大学院博士論文】
- 6) 조재모(1997) 昌德宮의 成長過程과 配置特性에 關한 研究, 서울대학대학원석사논문
【曹在模(1997) 昌德宮の成長過程と配置特性に関する研究, ソウル大学大学院修士論文】
- 7) 심우경(1987) 造景에서 生態學과 風水思想의 關聯性, 한국전통조경학회지, Vol.2(6), pp.149~160
【沈愚京(1987) 造景における生態學と風水思想の關連性, 韓國傳統造景学会誌, Vol.2(6), pp.149~160】
- 8) 전인순(1990) 朝鮮時代 宮苑의 造景要素에 關한 宗教的 思想的 背景에 關한 연구 : 昌德宮을 중심으로, 서울대학교대학원박사논문
【全仁順(1990) 朝鮮時代の宮苑における造景要素の宗教及び思想的背景に関する研究:昌德宮を中心に, ソウル大学大学院修士論文】
- 9) 민경현(1992) 오감을 통해 본 한국정원의 아름다움과 내면세계, 한국전통조경학회지, Vol.10(2), pp.5~18
【閔庚玟(1992) 五感からみた韓國庭園の美しさと内面世界, 韓國傳統造景学会誌, Vol.10(2), pp.5~18】
- 10) 김영현, 진상철(2002) 神仙思想에 영향 받은 傳統造景文化의 展開樣相에 關한

- 연구 : 古代時代の 造景文化를 중심으로, 한국전통조경학회지, Vol.20(3), pp.78~91
【金永模 · Chin, Sang-Chul(2002) 神仙思想から影響を受けた傳統造景文化の展開様相に関する研究: 古代時代の造景文化を中心に, 韓国伝統造景学会誌, Vol.20(3), pp.78~91】
- 11) 윤영활(1993).전통조경수로서의 소나무의 상징성과 배식 및 이용, 한국전통조경학회지, Vol.11(2), pp.33~40
【尹英活(1993) 傳統造園樹木としての松の象徴性と配植および利用, 韓国伝統造景学会誌, Vol.11(2), pp.33~40】
- 12) 전영옥(2004) 조선시대 괴석의 특성과 산수화와의 관련성에 관한 연구, 한국전통조경학회지, Vol.22(2), pp.1~12
【Jeon, Young-Ok(2004) 朝鮮時代の怪石の特性と山水画との関連性に関する研究, 韓国伝統造景学会誌, Vol.22(2), pp.1~12】
- 13) 노재현·김영숙·고여빈(2010) 조경식물 파초(Musa basjoo) 식재 양상과 그 의미 : 조선시대 옛 그림 분석을 중심으로, 한국전통조경학회지, Vol.28(2), pp.23~36
【Rho, Jae-Hyun · Kim, Young-Suk · Goh, Yeo-Bin(2010) 園芸植物ハシヨウの植栽様相とその意味: 朝鮮時代絵図分析を中心に, 韓国伝統造景学会誌, Vol.28(2), pp.23~36】
- 14) 소현수(2011) 차경(借景)을 통해 본 소쇄원 원림의 구조 : 「소쇄원시선(瀟灑園詩選)」과 「소쇄원 30 영」을 중심으로, 한국전통조경학회지, Vol.29(4), pp.59~69
【So, Hyun-Su(2011) 借景からみた「瀟灑園」園林の構造: 「瀟灑園詩選」と「瀟灑園三十詠」を中心に, 韓国伝統造景学会誌, Vol.29(4), pp.59~69】
- 15) 손용훈·함광민(2011) 창덕궁 후원의 시문분석에 의한 의경(意境)과 경관 특성, 한국전통조경학회지, Vol.29(3), pp.124~133
【孫鏞勳·咸光珉(2011) 昌德宮後苑の詩文分析による意境と景観特性, 韓国伝統造景学会誌, Vol.29(3), pp.124~133】
- 16) 김규섭·이재근(2014) 「임원경제지(林園經濟志)」에 나타난 정원조영 연구 : 「이운지(怡雲志)」와 「상택지(相宅志)」를 중심으로, 한국전통조경학회지, Vol.32(1), pp.22~30
【Kim, Kyu-Seob · Lee, Jae-Keun(2014) 「林園經濟志」からみた庭園造営研究: 「怡雲志」と「相宅志」を中心に, 韓国伝統造景学会誌, Vol.32(1), pp.22~30】
- 17) 이현우·김재식(2010) 누정편액(樓亭扁額)에 반영된 자연인식과 서정 : 16 세기 담양 시가문화권의 누정을 중심으로, 한국전통조경학회지, Vol.28(3), pp.1~13
【Lee, Hyun-Woo · Kim, Jai-Sik(2010) 樓亭の扁額に反映された自然認識と叙情: 16世紀における潭陽の詩歌文化圏の樓亭を中心に, 韓国伝統造景学会誌, Vol.28(3), pp.1~13】

- 18) 안득수(2011) 광한루 편액시에 나타난 경관요소 분석, 한국전통조경학회지, Vol.29(4), pp.198~206
【Ahn, Deug-Soo(2011) 廣寒樓の扁額に現れた景觀要素の分析, 韓国伝統造景学会誌, Vol.29(4), pp.198~206】
- 19) 노재현·이정한·허준·김정문(2012) 象頭山 바위글씨의 특징과 경관의미, 한국전통조경학회지, Vol.30(2), pp.1~13
【Rho, Jae-Hyun·Lee, Jung-Han·Huh, Joon·Kim, Jeong-Moon(2012) 象頭山の岩に刻まれている文字の特徴と景觀意味, 韓国伝統造景学会誌, Vol.30(2), pp.1~13】
- 20) 노재현·김정문·이현우·이정한·김대수(2012) 바위글씨로 본 부안 관아와 상소산 일대의 장소정체성, 한국전통조경학회지, Vol.30(2), pp.142~154
【Rho, Jae-Hyun · Kim, Jeong-Moon · Lee, Hyun-Woo · Lee, Jung-Han · Kim, Dae-Soo(2012) 岩に刻まれている文字からみた扶安官衙と上蘇山エリアの場所性について, 韓国伝統造景学会誌, Vol.30(2), pp.142~154】
- 21) 韓国古典総合 DB, <<http://db.itkc.or.kr>>, 2012. 2. 1 参照
- 22) 奎章閣韓国額研究院, <<http://e-kyujanggak.sun.ac.kr>>, 2012. 2. 5 参照

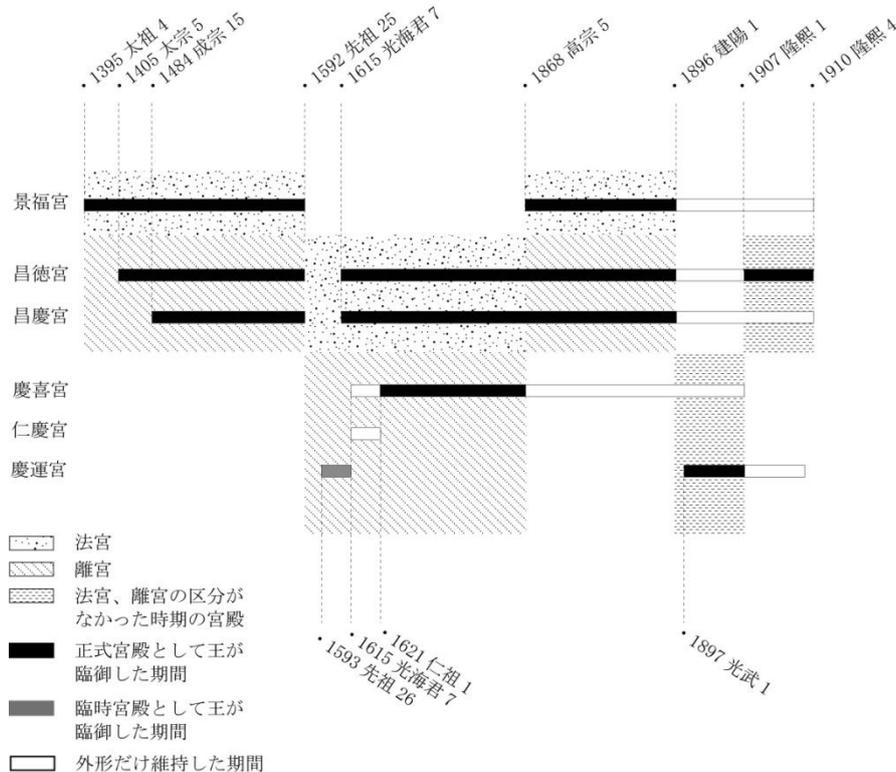
第 2 章

昌徳宮後苑の沿革および社会的背景

1. 昌徳宮の概要

昌徳宮は太宗(1367～1422、在位 1400～1418)5年(1405)に建てられた離宮である。太宗は朝鮮時代の法宮「景福宮」で自分の弟を含め、朝鮮建国に主導的な役割を果たした官僚を殺害し、朝鮮の3代王になる。土地の気運がよくないという風水的な理由と、家族を殺した場所である景福宮を忌避した理由で、昌徳宮を建てるようになる¹⁾。

朝鮮の多くの王たちは宮の重大な行事や外国の使臣への対応などの国家的な行事に景福宮を利用し、日常的な生活は昌徳宮を利用した。朝鮮の5大宮殿の中で(景福宮、昌徳宮、昌慶宮、慶喜宮、慶運宮；現、徳寿宮)、昌徳宮は離宮にもかかわらず、法宮として利用された時期がもっとも長く、朝鮮の歴史と文化がよく保存されている宮殿である(図2-1参照)。当時は、昌徳宮と昌慶宮に境界の区分がなく、一つの宮殿であったので「東闕」と呼ばれたが、現在は分離され、独立された宮として存在する(図2-2参照)。昌徳宮の空間構成は王と官僚が政治を行う「治朝空間」、官僚たちが勤務する「外朝空間」、王と家族たちが生活する「燕朝空間」、宮の庭園である「後苑空間」に分かれている(図2-3参照)。



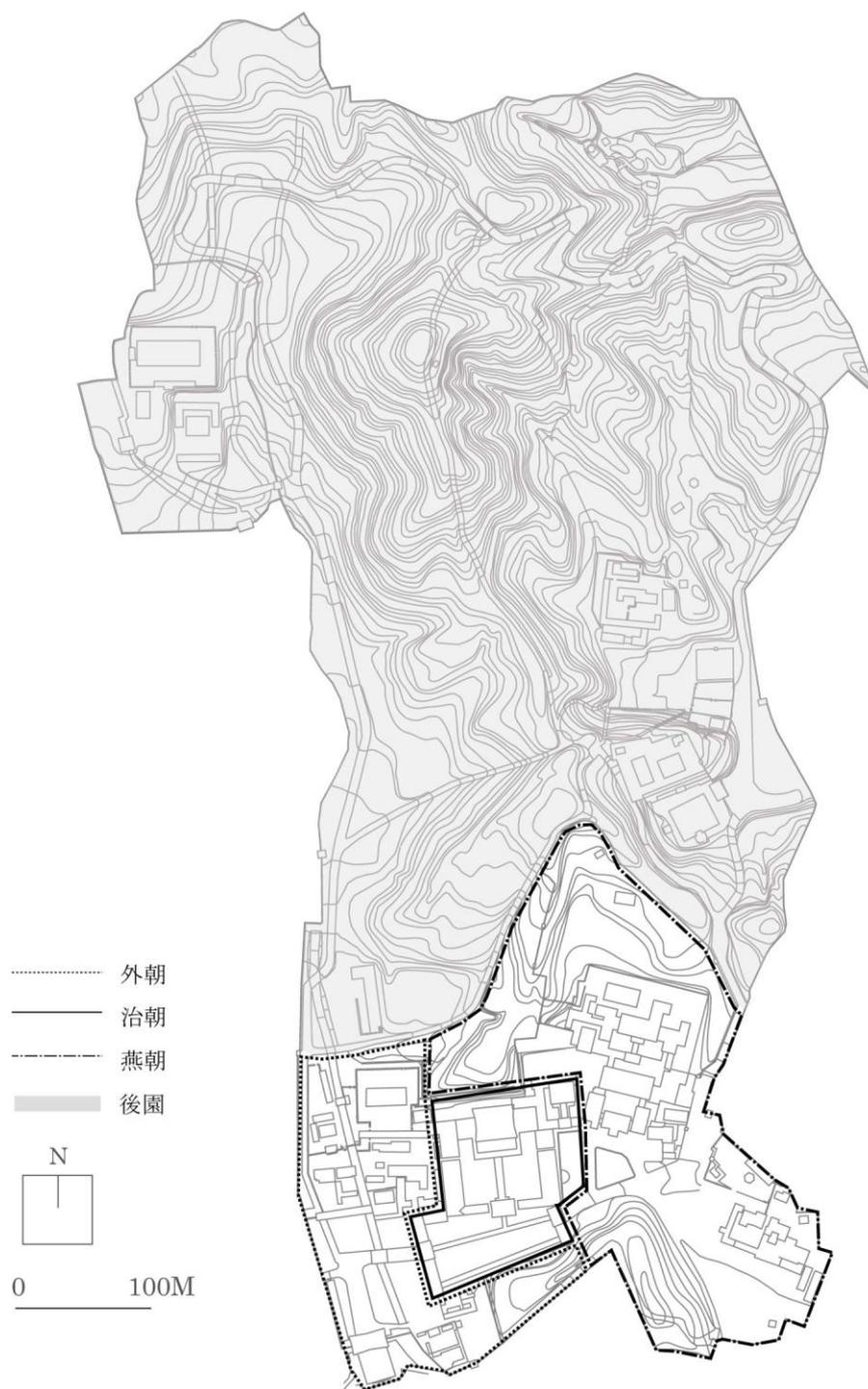
資料：洪(1999), p.57 の変遷図を修正²⁾

〈図2-1〉 宮闕利用の沿革図



資料：『首善全圖（1824-1834）』を基に作成

〈図 2-2〉 5 大宮の位置



資料：文化財廳(2002),『昌德宮・宗廟園圍調査報告書』, p.155

韓(2006)を参照し³⁾、空間の境界線を筆者が作成

〈図 2-3〉 昌德宮平面図

2. 後苑の沿革および社会的背景

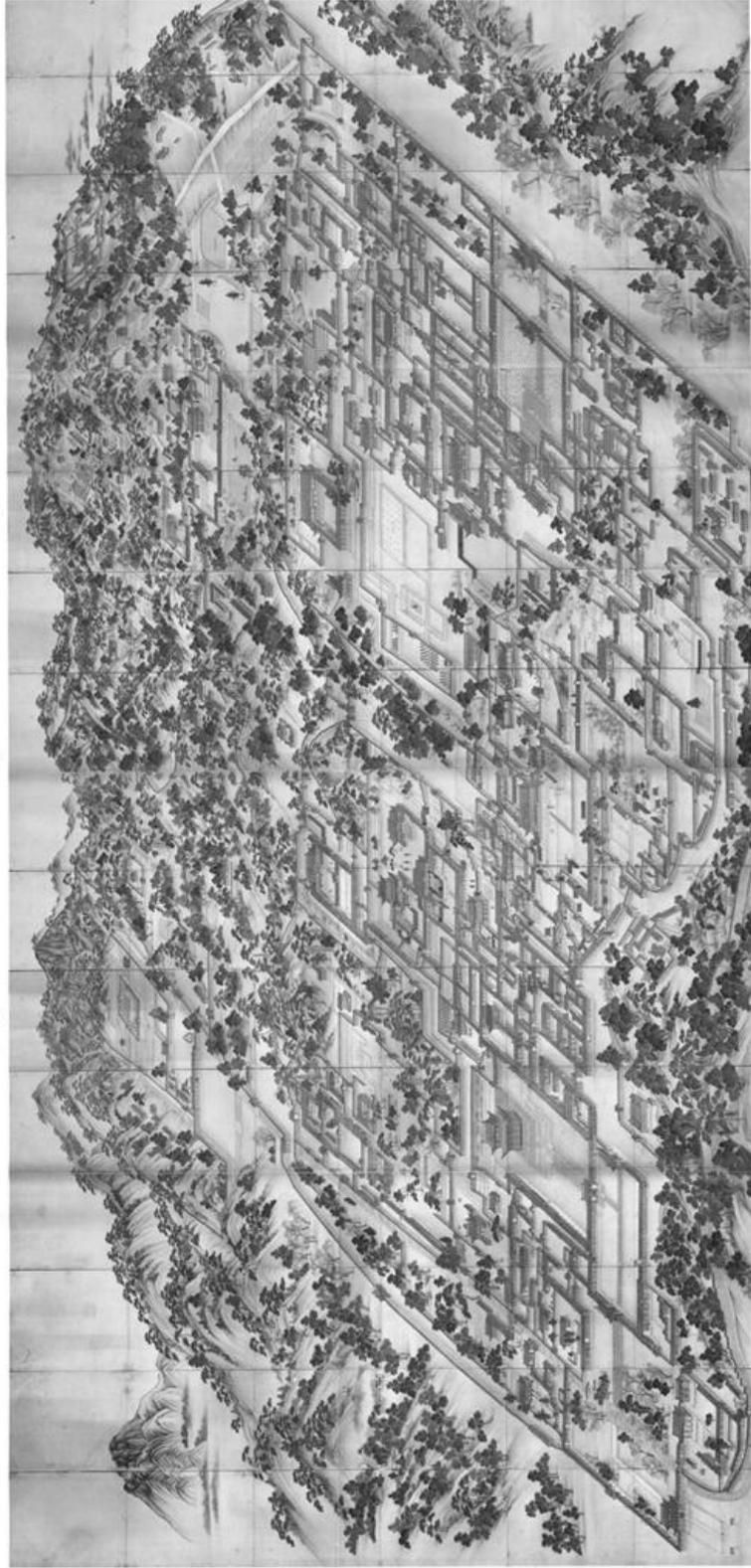
庭園は静態空間ではなく、いつも変化する動態空間といえる。このような意味で、正しい庭園文化を理解するために時間の流れを把握する必要がある、庭園が造成された当時代の社会・文化的な背景を理解することは重要である。昌徳宮後苑は、朝鮮時代の多くの王たち(27代)により造成・復元・拡張されてきた。したがって、昌徳宮後苑が造営された朝鮮時代を、前期、中期、後期に分け、庭園空間の造営に比較的多くの影響を及ぼした王を中心に、当時の社会・文化的背景を調べた。

朝鮮時代の時期区分は学界により多様な時期区分論(2・3・6分法など)が提示されている。本研究については庭園の発展が、当時の政治・経済的安定と深い関連があると判断したため、社会構造の変化と官僚たちの勢力変化に注目し、3時期に区分した朴(1991)の研究⁴⁾とGo(1995)の研究⁵⁾を参照し、朝鮮時代の社会・政治的背景を把握した。後苑の沿革においては、韓(2003)⁶⁾と、王の業績と行為を記録した「朝鮮王朝實録」、「宮闕志」、朝鮮時代後期に描かれた図上資料「東闕圖」、「東闕圖形」を参照した。「朝鮮王朝實録」は古典翻訳ウェブサイト「韓国古典総合DB」⁷⁾を通じて訳文を確認した。「東闕圖」は1827~1830に作成されたものであり、昌徳宮と昌慶宮の全景を鳥瞰図の形式で描いた絵(576cm×273cm)である。山林の尾根、樹木、池、建築などが精密に描かれ、昌徳宮後苑の自然地形と空間の構成要素の把握が可能である(図2-4参照)。「東闕圖形」は、「東闕圖」を平面図の形式で描いた図面であり、1900年代に作られたものと推定されている。建築内部の細部構造や、規模、柱の数値などが詳しく記録され、昌徳宮後苑の空間構造を把握するうえで有用である(図2-5参照)。

2.1. 朝鮮時代の前期 (1392~1567)

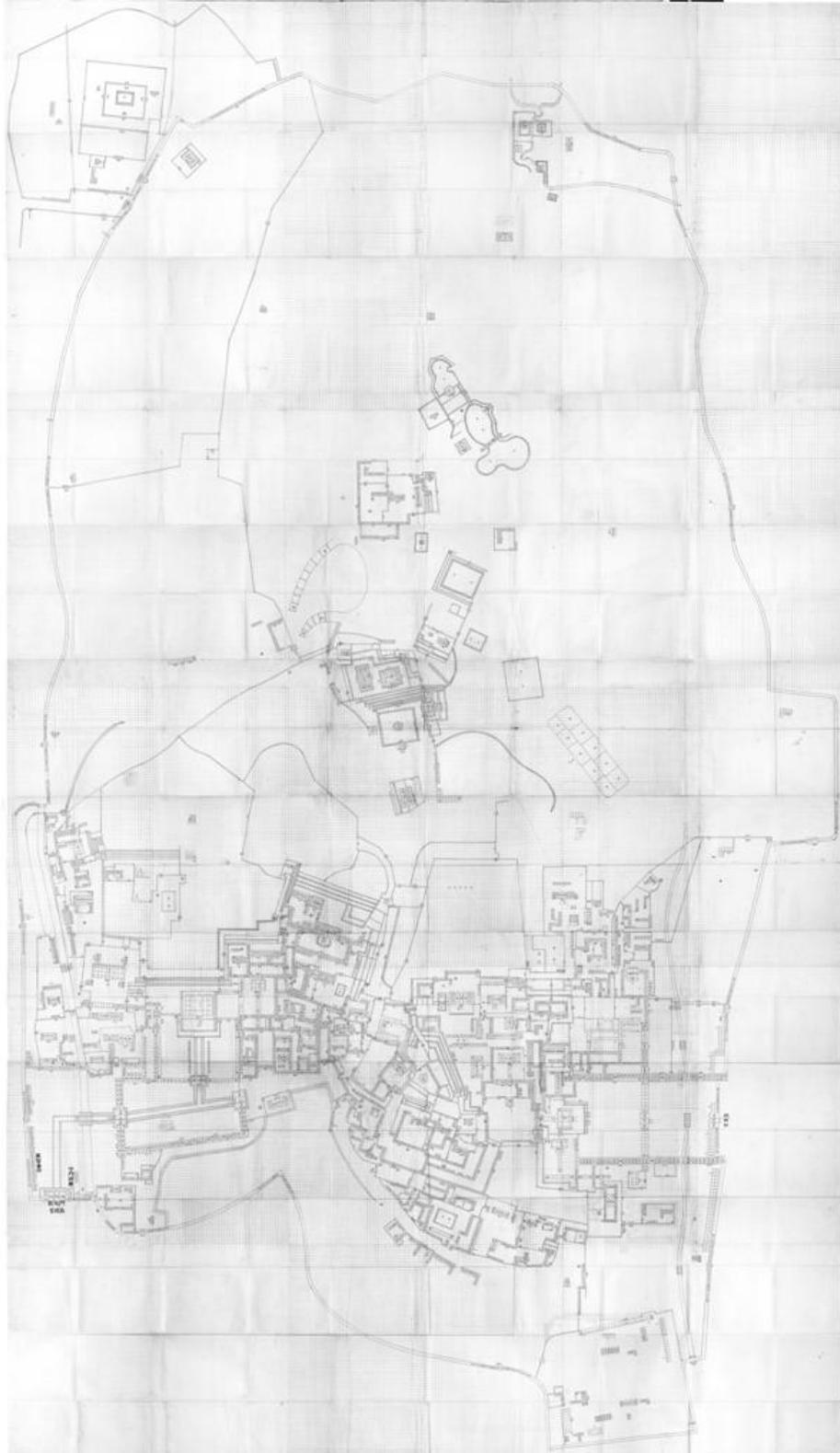
朝鮮を建国した政治勢力は儒教哲学を踏まえた性理学⁸⁾を思想的基盤としている。もちろん、時期によって性理学の割合はやや差があるものの、朝鮮時代の全時期にわたって支配思想として用いられた。朝鮮の初期には高麗時代(918~1392)の社会・政治制度の限界を乗り越えるために中央集権体制を強化し、制度整備と富国強兵を追求した。性理学の内でも哲学と義理の名分的な側面よりは、実践倫理や儀礼的な側面が重視された。政治的には『議政府署事制』⁹⁾と『六曹直啓制』¹⁰⁾を中心に政治が運営され、官署、官職、官員の行政体系を一元化し、合理的に管理するなど、官僚的な性格が強かった時期である。

東關圖



資料：文化財廳, 『東關圖』

〈図 2-4〉 東關圖



資料：文化財廳, 『東關圖形』

〈図 2-5〉 東關圖形

後苑の沿革をみると(表 2-1 参照)、太宗(1367~1422、在位 1400~1418)は昌徳宮を建立し、その翌年(1406)、昌徳宮の後苑に「解温亭」を造成し¹¹⁾、宴会、弓道、新式兵器「火車」の発射試験を行うなど、多目的空間として利用した。この亭は太宗 14 年(1414)に「愼獨亭」と改名され、現在は昌慶宮の春塘池の北側に位置する¹²⁾。

世祖(1417~1468、在位 1455~1468)は景福宮を政治空間で利用し、昌徳宮を拡張・整備し、学問と休息の空間として利用した。また、名称がなかった昌徳宮の各建築に名称を与えた。日常的で使用する便殿「朝啓廳」を「宣政廳」、後東別室を「昭徳堂」、後西別室を「寶慶堂」、正殿を「兩儀殿」、東寢室を「麗日殿」、西寢室を「淨月殿」、樓を「澄光樓」、東別室を「凝福亭」、西別室を「玉華堂」、樓下を「光世殿」・「廣延殿」、別室を「求賢殿」など、多くの宮建築を名付けた。1462 年には民家 73 軒を撤去し、「閔武亭」と「無逸殿」を建立するなど、後苑の領域を拡張、造営した¹³⁾。

成宗(1457~1494、在位 1470~1494)は 1472 年に暎花堂の東側に「観徳亭」を建立した。1475 年には文人の大家である徐居正(1420~1488)に景福宮と昌徳宮に存在する多くの門を名づけることを命じた¹⁴⁾。

燕山君(1476~1506、在位 1494~1506)は昌徳宮の後苑を遊び場で広げるために宮殿の東側と西側の民家を大挙撤去した¹⁵⁾。1505 年には(現)暎花堂の東側で遊戯空間を造成するために高い石垣と亭(瑞蔥臺)を造成した。また、池「春塘池」を造成し、漢江から船が入れるようにした¹⁶⁾

朝鮮の初期には高麗時代(918~1392)の制度的限界を乗り越えるために制度整備と富国強兵を追求し、官僚たちの権勢が強かった時期で、当時後苑の空間的範囲は現在の昌慶宮の春塘池地域を含むなど、現在とは多少差がある。後苑は太宗・世祖・成宗・燕山君により急速に拡張が試みられたが、大きな発展は叶わなかった。

2.2. 朝鮮時代の中期 (1567~1720)

朝鮮中期には多くの外敵襲来をきっかけに、性理学の哲学的な面よりは、義理・名分的な面と社会経済的な面に関心が高まった。また、王室の典禮問題と北伐論¹⁷⁾、號牌法¹⁸⁾、五家作統制¹⁹⁾、戸布法²⁰⁾、良役變通論²¹⁾などの社会経済政策をめぐって政治勢力の間に激しい論争と対立が行われた。思想的違いによる政治的対立が頂点に達した時期である。

後苑の沿革をみると(表 2-1 参照)、中宗(1488-1544、在位 1506-1544)は、燕山君が遊戯目的に作った瑞蔥臺を撤去し、文武の行事場所で利用するなど後苑の再整備を行った。

先祖(1552~1608、在位 1567~1608)は、他国の侵略によって、すべての宮殿が失われた後、昌徳宮と昌慶宮の再建を着手する。

光海君(1575~1641、在位 1608~1623)は、先祖が着手した昌徳宮と昌慶宮の改築を完了した(1608)。また、後苑に「暎花堂」を建て、1617年には慶徳宮(現、慶熙宮)、仁慶宮、慈壽宮の新築工事を実施した。

仁祖(1595~1649、在位 1623~1649)は後苑に流れている川の周辺に「逍遙亭」、「清漪亭」、「太極亭」を建て、大岩に溝を掘り水を流し、小さな滝を作った(1636)。また、その岩には「玉流川」と文字を刻み入れた。同年12月、清国の侵攻により昌徳宮が焼失したが、国政が安定した後に聚奎亭(1640)、觀徳亭(1642)、深秋亭(1643)、尊徳亭(1644)、酔香亭(1645)、清燕閣(1646)、聚勝亭(1647)、觀豊閣(1647)など、多数の亭を建てた。特に觀豊閣の近くに稲を栽培して農業を直接体験し、詩を作りながら、庭園を享受した²²⁾。

肅宗(1661~1720、在位 1674~1720)は、齊政閣(1687)を建て、天体の運行を観測する「璿璣」と「玉衡」の器具を設置した。また、「砭愚獅」の北側に清心亭(1688)、氷玉池(1688)、喜雨亭(1690)、四つの井戸を見つけたことを記念する四井記碑(1690)、凌虚亭(1691)、愛蓮亭(1692)、愛蓮池(1692)、翠寒亭、澤水齋(1707)などを建てた。また、肅宗は五言絶句の詩「逍遙流觸」を作成して逍遙亭の前にある岩に刻み入れた。

朝鮮中期には他国の侵略が多く、社会経済が不安定となり、政治的対立が頂点に達した時期で、多くの自然物と人工物をもとに、庭園の再整備が行われた。特に、仁祖は清国の侵攻によって自分が作り上げた庭園空間で多くの時間を過ごせなかったが、多くの亭を造営・整備するなど、昌徳宮の後苑空間の物理的基盤を構築した王である。また、肅宗は後苑に多くの亭と空間を造営し、後苑で多くの時間を過ごしながらか、後苑の名勝10景に対して詩文「上林十景」を作るなど、後苑を積極的に享受した。

2.3. 朝鮮時代の後期 (1720~1897)

朝鮮後期には王が中心になって政局を主導し、朋党の極端な対立を解決し、社会体制を安定させようとする政治運営方式(蕩平政治)が行われた。英祖(1694~1776、在位 1724~1776)は『調劑蕩平』を施行し、朋党政治の主勢であった「士林」の政治参加を排除し、位階秩序を強化した。一方、正祖(1752~1800、在位 1776~1800)は『義理蕩平』を施行し、宰相権を強化し、備辺司²³⁾の権限を制限した。また、「奎章閣」を建てられ、閣臣の役割を強化し、『右文政治』²⁴⁾を追求し、国王が政局を主導する政治が行われた。

〈表 2-1〉 後苑の造営過程と空間活用

時期	王代	造成	内容
前期	太宗	解温亭(1406)*	後苑に解温亭を造成し、宴会や弓術行事に使用。 解温亭は以後に「慎獨亭」(1414)で改名。
	世祖	閼武亭(1461)**、無逸殿(1468)**	1462年に民家73世帯を撤去し、後苑を確張。 昌徳宮の各建築に名称を付ける。
	成宗	觀徳亭(1472)*	昌徳宮に存在する多くの門において、当時代の文臣「徐居正」(1420~1488)に名付けられることを指示する。
	燕山君	瑞葱臺(1505)** 春塘池(1506)*	後苑を遊戯空間で拡張するために東西の民家を撤去し、高い石塀と亭(瑞葱臺)を造成
中期	中宗	-	瑞葱臺を撤去し、科擧試験と行事場所で活用。
	宣祖	-	外勢の侵略により朝鮮のすべての宮殿が損失。昌徳宮と昌慶宮の再建を着手(1607)。
	光海君	暎花堂(1611)	昌徳宮、昌慶宮の再建完了(1608)。 宮殿の新築に関心があり、慶徳宮(現、慶熙宮)、仁慶宮、慈壽宮の新築工事を実施(1617)。 仁祖反正が発生し、昌徳宮が消失(1623)。
	仁祖	觀豊閣(1633)*、逍遙亭(1636) 清漪亭(1636)、太極亭(1636) 玉流川(1636)、聚奎亭(1640) 觀徳亭(1642)*、深秋亭(1643)** 尊徳亭(1644)、酔香亭(1645)** 清燕閣(1646)**、聚勝亭(1647)**	昌徳宮を改築し、後苑に多数の亭を造成。 川の周辺にある大きな岩に溝を掘って、水を流れるようにし、小さな滝を造成。その岩に「玉流川」という文字を刻する。 觀豊閣の近所に稲を栽培し、農業を体験。
	肅宗	齊政閣(1687)、清心亭(1688) 氷玉池(1688)、喜雨亭(1690) 四井記碑(1690)、凌虚亭(1691) 愛蓮亭(1692)、愛蓮池(1692) 暎花堂再建(1692)、翠寒亭 深秋亭改築(1692)、太液 澤水齋(1707)	齊政閣(1687)を造成し、天体の運行を観測する「璿璣」と「玉衡」の器具を設置 後苑内に多くの亭と庭園空間を造成し、休息空間で利用。 仁祖が建設した酔香亭(1645)の屋根を瓦に変え、「喜雨亭」で改名。
後期	正祖	宙合楼(1776)、書香閣(1776) 閼古館(1776)**、皆有窩(1776)** 親蠶勸民(1777)、芙蓉亭(1792) 魚水門、砭愚榭	奎章閣と宙合楼など、学術的空間を造成 芙蓉池で臣下たちと釣りと詩文作成を楽しむ。
	純祖	寄傲軒(1827)、超然臺、秋聲臺 演慶堂(1827~1828)、清水精舍 善香齋、濃繡亭	大きい火事で一部の建築が消失(1833)。

資料：韓(2003)、韓国古典総合DB(<http://db.itkc.or.kr>)の太宗実録、世祖実録、燕山君日記、肅宗実録、正祖実録を参照し、作成

*現在、昌慶宮に位置、**復元されていない建築



「奎章閣」



「皆有窩」

資料：韓(2003), p.63

〈図 2-6〉 扁額「奎章閣」と「皆有窩」

後苑の沿革をみると(表 2-1 参照)、正祖(1752~1800、在位 1776~1800)は肅宗が作った「澤水齋」を改築し、「芙蓉亭」と改名した。芙蓉池の北側に学術・政策機関である 2 層の楼閣(1776)を建立し、1 階には「奎章閣」、2 階には「宙合楼」という扁額を掛けた。また、奎章閣の学士の本を保管する皆有窩(1776)、閔古館(1776)、書香閣(1776)を建て(図 2-6 参照)、芙蓉亭(1792)を造営し、官僚と舟遊びや釣り、吟詩など風流を楽しんだ。

純祖(1790~1834、在位 1800~1834)は暎花堂の北側に寄傲軒(1827)と演慶堂(1827~1828)などを造営した。

朝鮮後期には朋党の極端な対立を解決し、位階秩序を強化するなど王の権力が強化された時期で、肅宗は後苑を遊戯空間だけではなく、文学作品の対象で利用するなど、庭園と多くの交流を行い、正祖は学問政治を実施するために宙合楼の領域を積極的に活用した。

補注及び引用・参考文献

- 1) 한영우(2003) 昌徳宮과 昌慶宮, 서울, 효형
【韓永愚(2003) 昌徳宮と昌慶宮, ソウル, ヒョヒョン】
- 2) 홍순민(1999) 우리 궁궐 이야기, 파주, 청년사, p.57
【洪淳民(1999) 我々の宮闕の話, 坡州, 青年社, p.57】
- 3) 한영우(2006) 조선의 집 동궐에 들다, 서울, 열화당·효형
【韓永愚(2006) 朝鮮の宮闕「東闕」に入る, ソウル, 悅話堂・ヒョヒョン】
- 4) 박광용(1991) 조선후기 정치사의 시기구분 문제 : 16~19 세기 중엽까지의 정치형태를 중심으로 한 분류, 성심여자대학논문집, Vol.23, pp.81~100
【朴光用(1991) 朝鮮後期における政治史の時期区分の問題, 16~19 世紀の中葉までの政治形態を中心に, 聖心女子大学論文集, Vol.23, pp.81~100】
- 5) 고영진(1995) 조선사회의 정치·사상적 변화와 시기구분, 한국역사연구회, Vol.18, pp.84~110
【Go, Young-Jin(1995) 朝鮮社会の政治・思想的変化と時期区分, 韓国歴史研究会, Vol.18, pp.84~110】
- 6) 韓永愚(2003), 前掲書
- 7) 韓国古典総合 DB, <<http://db.itkc.or.kr>>, 2014. 6. 5 参照
- 8) 中国, 宋代に興った新儒教の名。道学, 理学, 程朱学などともいう。周敦頤, 程顥らによって始められ, 朱子により完成された。万有の根本原理の「理」と人間の本質の「性」とを主要問題としている。
- 9) 朝鮮初期に国家統治体制の一つで、六曹(機能により国事を分担し、執行する六つの中央官庁)業務を議政府(行政府の最高機関)を経て、国王に報告する制度
- 10) 朝鮮時代の六曹の判書が国事を王に直接報告するようにした制度
- 11) 韓国古典総合 DB, 太宗実録, 冊 11, 太宗 6 年 4 月 1 日, <<http://db.itkc.or.kr>>, 2014. 6. 5 参照
- 12) 韓国古典総合 DB, 太宗実録, 冊 11, 太宗 14 年 6 月 17 日, <<http://db.itkc.or.kr>>, 2014. 6. 5 参照
- 13) 韓国古典総合 DB, 世祖実録, 冊 26, 世祖 7 年 12 月 19 日, <<http://db.itkc.or.kr>>, 2014. 6. 5 参照
- 14) 韓国古典総合 DB, 成宗実録, 冊 58, 成宗 6 年 8 月 23 日, <<http://db.itkc.or.kr>>, 2014. 6. 5 参照

- 15) 韓永愚(2003), 前掲書, p.39
- 16) 韓国古典総合 DB, 燕山君日記, 冊 61, 燕山君 12 年 1 月 21 日, <<http://db.itkc.or.kr>>, 2014. 6. 5 参照
- 17) 孝宗(1619-1659、在位 1649-1659)の時代に、中国の清を攻撃し、明に恩を返すという政策
- 18) 朝鮮時代に 16 歳以上の男性に現代の身分証のような『號牌』をはめようにした制度
- 19) 住民を統制するために五軒を一つに集団で作って管理する自治組織
- 20) 身分に関係なく、両班も軍布を支払う税金制度
- 21) 朝鮮後期に良役の弊害を改善しようとする議論として、進歩的な文人により提起された。
- 22) 韓永愚(2003), 前掲書, p.52
- 23) 李朝時代に軍事と国政をつかさどった最高の議決機関
- 24) 壯勇營を建てられ、軍権を掌握し、奎章閣を中心に学術・文化的機能を拡大する政治形態である。

第 3 章

扁額からみた昌徳宮後苑の空間特徴

1. 背景と目的

本章では文字「扁額」に着目し、その意味から宮園を解釈する。扁額は「扁」と「額」の合成語であり、「扁」は‘書く’の意味であり、「額」は‘建築の正面の高い所’を意味する¹⁾。扁額は建築や門の上部に掛けられている名称板で、当代の文芸の大家や王が命名したもので、文字や絵で構成されている。朝鮮時代の宮殿における建築の名称は、非常に重視され、建築及び空間の特性に影響を与えたことが以下の文を通じて確認ができる。

鄭道傳(1342~1398)が作った景福宮の『文』には“宮殿は王が政治を行うところであり、すべての国民が仰いで出入りするため、その制度を雄大にして尊厳をみせ、美しい名称を付けられ、目と心で感じなければならない。”(Chin, 1998, 再引用)²⁾

また、肅宗(1661~1720、在位 1674~1720)の『肅宗実録』と『愛蓮亭記』には以下のことが言及されている。

『肅宗実録』“昔の人は嬉しいことがあれば、それが小さな事でも必ず物に名づけた。これは、その内容を記録し、忘れないということである。そうであるなら、大きな事はどうか。今年の春に世子のフワンフ(患候)が健康を回復したことは非常に大きな祝い事だから、この嬉しいことを記録しなければならない... (中略)この堂の名称を「緝敬堂」で改名し、これはすべての祝いがこの堂に集まっていることを意味する。”(An, 2006, 再引用)³⁾

『愛蓮亭記』“蓮華は、汚れたところにながらも変わらず、志操が強健し、清み、君子の徳を持っている。その理由から私は蓮華を愛し、新しい亭を「愛蓮亭」と命名する。”(Choe, 2006, 再引用)⁴⁾

このように、朝鮮時代の宮殿建築の名称には、当時代の社会的様相とともに建築及び空間の特性が反映されていることが分かる。扁額に関する既往研究は建築・工芸的な観点からアプローチした研究が主流であり、空間と結び付ける造園的観点からの研究は不備な実情である。したがって、本章では朝鮮時代の代表的な宮殿庭園(離宮)である昌徳宮後苑を対象とし、扁額を解釈した上で、実空間と実証的關係を把握し、後苑の空間特徴を明らかにすることを目的とする。

2. 研究および分析方法

2.1. 研究対象

本章の対象地は朝鮮時代に作られた昌徳宮(離宮)に属している後苑である。‘神聖な徳’を意味する昌徳宮は北嶽の梅峰裾に位置し、全体的に北西へ行くほど高くなる地形である。このために比較的平坦な南側に殿閣が多く分布し、地形が高い北側に庭園が配置される。庭園は宮殿の裏に配置されたことから、‘後苑’と呼ばれ、その保存価値が認められて 2007 年に「世界文化遺産」に指定された。庭園の面積は 33ha で、宮全体面積の約 60%を占める。

研究対象である扁額は朝鮮時代に作られた物で、現在にすべての扁額(36 点)が復元されている。さらに、岩や石に刻まれた刻字 6 点を含め、総 42 点とする。刻字は厳密な意味では扁額ではないが、後苑空間を構成する要素であり、その意味には当代の思想と文化が反映されている側面では扁額と類似していると判断し、研究対象に含めた。また、新璿源殿エリアに存在する 6 点の扁額は朝鮮時代以後に設けられたことから本研究の対象から除いた。

2.2. 調査および分析方法

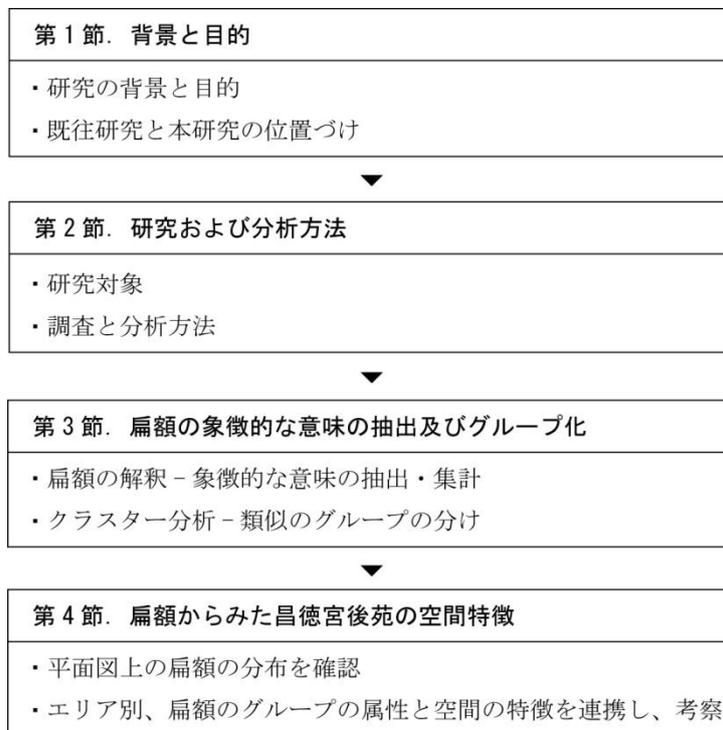
本章では文献調査と現地調査、ウェブサイト調査を通し、分析を行った。扁額の解釈は原典と意味が具体的に説明されている「宮闕の懸板と柱連 2」⁵⁾を主資料とし、昔の経典や各種古典資料が見られるウェブサイト「奎章閣韓国学研究院」⁶⁾と「韓国古典総合 DB」⁷⁾を参照した。現地調査は 2011 年 4 月～2013 年 8 月にわたって数回行い、庭園構成要素および構造、地形、建築の意匠および構造的特性などを確認した。

扁額からみた昌徳宮後苑の空間特徴は、以下の手順で行う。

第一に、扁額の意味は Chin(1998)⁸⁾の研究を参照し、「景観」と「思想」の 2 つのカテゴリーに分類する。さらに景観(L)は自然物(L1)、自然現象(L2)、動・植物(L3)、季節(L4)、眺望(L5)の 5 つ、思想(P)は徳・仁・孝(P1)、天人合一(P2)、神仙(P3)の 3 つ、合わせて 8 つのサブカテゴリーに分類する。

第二に、分類された扁額の意味から類似するグループを得るためにクラスター分析を行う。

第三に、扁額のグループ別に現れる特性を把握し、それぞれの扁額の位置を平面図に落とし、分布を確認した上、エリア別に庭園空間の特徴を考察する。



〈図 3-1〉 第3章の構造

3. 扁額の象徴的な意味の抽出およびグループ化

3.1. 扁額の象徴的な意味の抽出

後苑に存在する 42 点の扁額を〈表-1〉のように建立年度、扁額名、意味、場所、景観、思想で整理した。扁額の制作時期が明確でない場合は、扁額が存在する空間の造営時期や掛けられている建築の建立時期を調査した。その理由は朝鮮時代は名称を重視した時代であるため、空間および建築造営と共に名付けたと考えられるためである。

象徴的な意味の抽出例を挙げると、扁額「善香齋、No.32」は‘良い香りがある家’を意味する(図 3-2 参照)。この建築は「演慶堂」(1827 年)の東方に位置し、本を読む書斎である。扁額が意味する‘良い香り’は‘本の香り’と考えられる。‘本を読んで多くの徳を積み、知恵を育てよう’と解釈ができ、徳・仁・孝(P1)が反映されていると丸印をつけた。また、「氷玉池、No.9」は肅宗(1661~1720、在位 1674~1720)14 年に建立された「清心亭」の前の小さな池を作り、カメの形の彫刻に刻まれている文字である(図 3-2 参照)。文字は氷と玉を意味し、気高くて清い人柄を比喩する。池に書かれていることと、反映されている意味から自然物(L1)と徳・仁・孝(P1)のカテゴリーに丸印をつけた。以上のような分類方法で後苑に存在する 42 点の扁額について象徴的な意味の抽出を行った(表 3-1 参照)。



〈図 3-2〉 善香齋と氷玉池の全景

<表 3-1> 扁額の意味および分類

No.	建立年度	扁額名	意味	場所	景観 (L)					思想 (P)		
					L1	L2	L3	L4	L5	P1	P2	P3
1	光海君*	咲花堂	花と調和される, 周辺に花がたくさん咲いて景色が美しいという意味, 上林十景中の一つ: 咲花試土	堂			○		○			
2	仁祖 14(1636)	玉流川	玉のように清く流れる小川, 岩に溝を掘って水を流れるようにした後, 下に落とされた小さな瀧	石	○					○		
3	仁祖 14(1636)	逍遙亭	自由にゆっくり遊ぶ, 上林十景中の一つ: 逍遙流觴 (水にさかずきを浮かべ飲みながら詩を作る楽しさを示す)	亭	○							○
4	仁祖 14(1636)	太極亭	太初の混沌とした元気	亭							○	
5	仁祖 14(1636)	清漪亭	清い波 (水が清い), 四角形態の基壇と丸い屋根をしている亭の姿は天圓地方の思想に根拠	亭	○						○	
6	仁祖 18(1640)	聚奎亭	星が奎星で集まって来る (星が集まって来るということは人才が集まって来て穏やかになるということを意味)	亭		○					○	
7	仁祖 22(1644)	尊徳亭	徳を高める	亭						○		
8	肅宗 14(1688)	清心亭	心をきれいにする。煩雑なことが嫌でたおやかなことを求める朝鮮士の心が表現されている	亭						○		
9	肅宗 14(1688)	氷玉池	氷と玉, 清くてきれいだという意味, 気高くて清い人柄を比喻	石	○					○		
10	肅宗 16(1690)	喜雨亭	干ばつが終わって甘雨が降って喜ぶ	亭		○		○				
11	肅宗 16(1690)	四井記碑	四つの泉を記念するための碑石 (摩尼井, 玻璃井, 琉璃井, 玉井)	石	○							
12	肅宗 17(1691)	凌虚亭	虚空に上がる, 精神世界が世俗を超越するという意味, 上林十景中の一つ: 凌虚慕雪 (日の暮れの雪が降る風景)	亭					○			○
13	肅宗 18(1692)	愛蓮亭	蓮華を愛する, 蓮華は汚い所にありながらも変わることなく, 清くてきれいな君子の徳を持つ	亭			○			○		
14	肅宗 *	翠寒亭	青くて冷ややかだ (青い森に囲まれて冷ややかだ), 松が多くて夏にも寒さを感じるほどであった	亭			○					○
15	肅宗 *	太液	大きい水	石	○					○		
16	正祖 1(1776)	宙合樓	天地が一つになって自然の理により, 政治をする, 「宙合」は「六合」, 上下と四方を示し, 天地を意味する	樓	○						○	
17	正祖 1(1776)	書香閣	本の香りがある家 (本を乾かした所で, 本から出る特有のにおいを香りで美化)	閣						○		
18	正祖 2(1777)	親蠶勸民	王妃が直接蚕を飼って民たちに勸奨する	閣						○		
19	正祖 16(1792)	芙蓉亭	蓮華, 亭の前に「連池」という池があり, 蓮華が茂ったため名前を変えた (澤水齋, 1707 → 芙蓉亭, 1792)	亭			○					○
20	正祖 *	魚水門	王様と臣下が水と魚のように心が一つになる, 王と臣下の関係を水と魚に比喻し, 親しい間を現わしている	門	○		○				○	
21	正祖 *	砭愚榭	愚かさを正す徳を高めなさい, 「砭」は「鍼」を意味し, 鍼を打って病気を治療するという意味を含んでいる	亭						○		
22	純祖 27(1827)	寄傲軒	寛大な心を施す	軒						○		
23	純祖 27(1827)	演慶堂	喜び事が大きく広がる (祝いを行う家)	堂						○		○
24	純祖 *	超然臺	世俗を超越した模様	石								○

25	純祖 *	秋聲臺	秋に聞ける自然の音で、風の音、落ち葉が散る音、虫の音などを示す	石		○		○					
26	純祖 *	金馬門	鉄で作った馬（中国の漢時代の宮門の名前。また、国家で本を管理した所の名前である）	門			○			○			
27	純祖 *	不老門	老けない（この門を通過する人が老けなく、長い間暮しなさいという念願が盛られている）	門									○
28	純祖 *	長楽門	長い間楽しむ（王様が賢明な政治をして長い間幸せを享受しなさいという念願が盛られている）	門							○		○
29	純祖 *	長陽門	長い間日が入る（男性の空間と繋がる門で、「陽」は男性、空など陽気を意味する）	門									○
30	純祖 *	修仁門	仁を磨く（女性の空間と繋がる門で、女性は輶軒に乗らないので、門の高さが長楽門に比べて小さい）	門							○		
31	純祖 *	清水精舎	清い水が曲がっているところで精神を修養する。「精舎」は学問を研究する家、精神を修養する家を意味する	閣	○						○		
32	純祖 *	善香齋	良い香りがある家、本を保管する所だったため、良い香りは本の香りを示す	齋							○		
33	純祖 *	佑申門	天が国を継続して助ける	門									○
34	純祖 *	通碧門	青い所で通じる、「壁」の意味は青い山や神仙が住む城を示す	門			○						○
35	純祖 *	太一門	「太一」は道家的用語として宇宙万物の本源を意味し、悟ることの境地に至って万物が一つになることを言う	門									○
36	純祖 *	正秋門	盛んに熟した秋	門			○	○					
37	純祖 *	韶陽門	明るくて美しい春光	門				○					
38	純祖 *	兌正門	心が正直で正しい、方位では西の方を現わして‘兌’は秋を表現している	門				○			○		
39	純祖 *	紹休門	聖人の立派な業績を受け継ぐ	門							○		
40	純祖 *	濃繡亭	美しい景色を成す	亭			○		○				
41	**	霽月光風觀	雨晴れた後の明るい月明りと清い風、明快できれいな人柄を比喻し、世の中がよく穏やかになった状態を比喻	亭		○							○
42	**	建武門	武を崇める、「武」は五行で北の玄武を示すので北門の名前に用いた	門									○

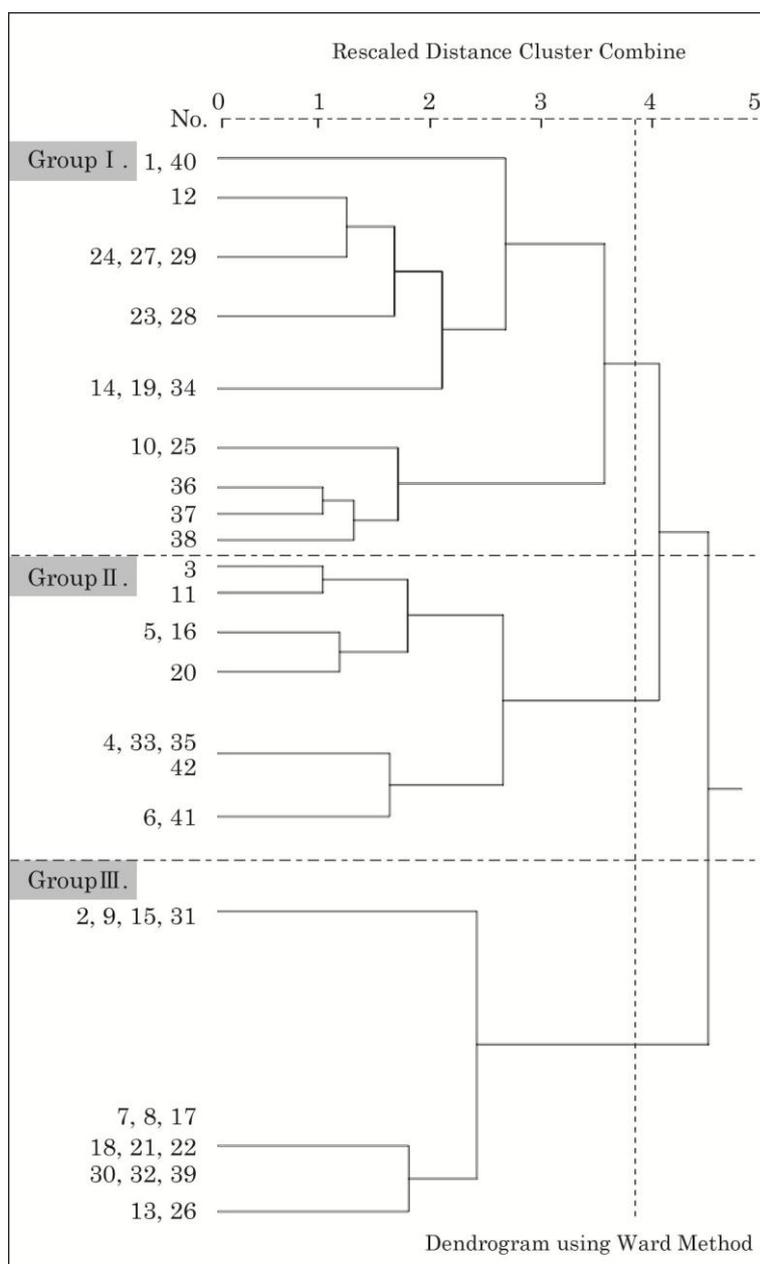
注：1) L 景観：L1 自然物，L2 自然現象，L3 動・植物，L4 季節的要素，L5 眺望、P 思想：P1 徳・仁・孝、

P2 天人合一，P3 神仙

2) *造成年度推定 **造成年度不明確

3.2. 扁額のグループ化

扁額の象徴的意味は8つのカテゴリで分けられ、一つの扁額に2~4つの象徴的意味が反映されている。扁額と空間の関係を細分化し、正確に行うためには類似するグループ分けが必要である。その上で、多数の象徴的意味が反映されている扁額における単純集計によるグループ分けは限界があるため、通用されているワード法によるクラスター分析を行い、類似性がみえるグループを得ることにした。



〈図 3-3〉 クラスターの樹系図

＜表 3-2＞ 各グループのプロフィール

区分	サブカテゴリー	グループ I	グループ II	グループ III
L1	自然物(小川・水・石)	0	55.6% (5)	44.4% (4)
L2	自然現象(雨・音・風・月)	50% (2)	50% (2)	0%
L3	動・植物(蓮華・花)	66.7% (6)	11.1% (1)	22.2% (2)
L4	季節的要素(春・秋)	100% (5)	0%	0%
L5	眺望	100% (3)	0%	0%
P1	徳・仁・孝	0%	0%	100% (15)
P2	天人合一	0%	100% (9)	0%
P3	神仙	90% (9)	10% (1)	0%

注：1) L：景観、P：思想

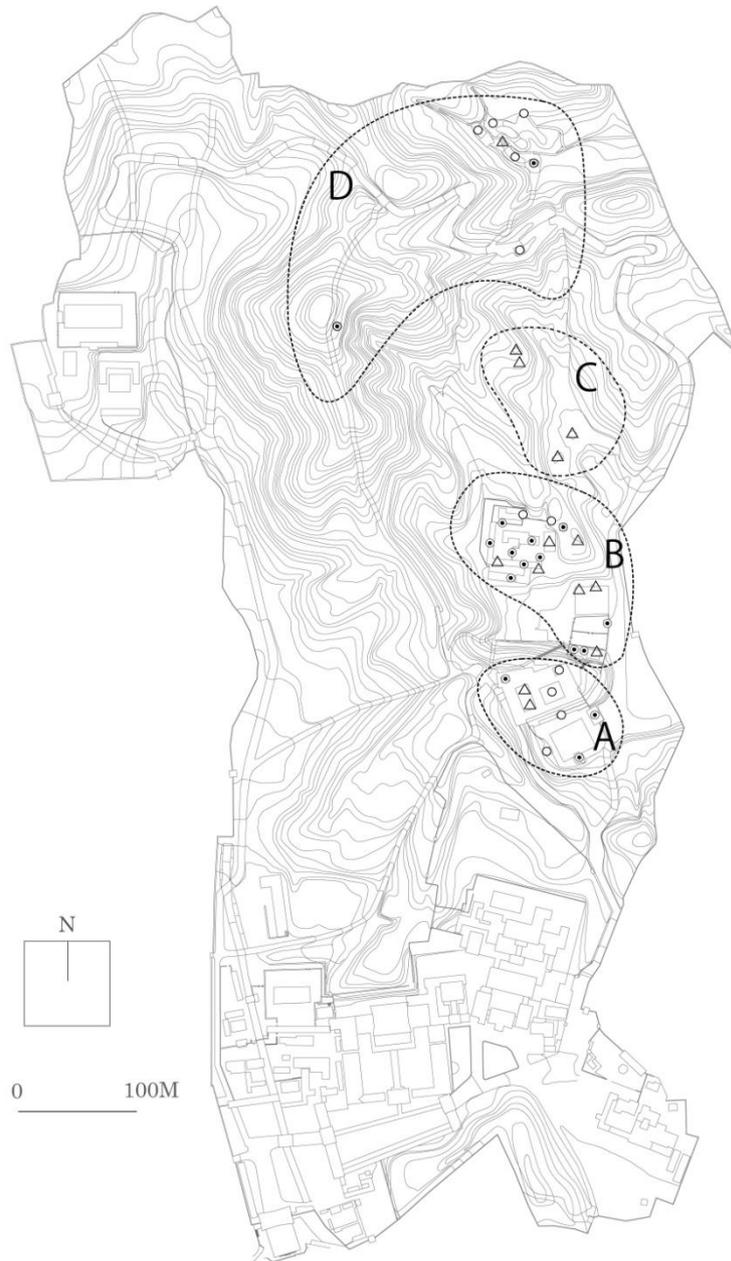
2) サブカテゴリーの比率が 5 割以上の部分に色を付ける。

グループ数を決める基準はクラスターの距離が大きい部分とクラスター数が少ない部分を切断する 2 つの方法がある。まず、クラスターの距離によると、 d_{jk} の範囲 $2.7 < d_{jk} < 3.7$ の階級を切断し、4 つのグループが得られ、クラスター数によると d_{jk} の範囲 $3.7 < d_{jk} < 4.2$ の階級を切断し、3 つのグループが得られる。グループ数を 4 つにした場合、グループ I = 11、グループ II = 5、グループ III = 11、グループ IV = 12 であり、グループ II の分布が非常に少なく現れた上で、各グループの特性がよくみられなかった。一方、グループ数を 3 つにした場合、グループ I = 16、グループ II = 11、グループ III = 15 であり、グループの分布が一定に現れた上で、各グループの特性がよく現れ、グループ数として適合であると判断できる (図 3-3 参照)。

各グループの特性をみると、グループ I は季節的要素(L4)、眺望(L5)、神仙思想(P3)、動・植物(L3)、自然現象(L2)の比率が高く現れる。扁額の意味が景観を構成する景物(landscape element)より、情景的雰囲気に影響を与える景観要素と神仙思想がグループの主要因として現れる。グループ II は天人合一(P2)、自然物(L1)、自然現象(L2) の比率が高く現れ、政治思想と自然物がグループの主要因として現れる。グループ III は儒教思想が目指す徳・仁・孝(P1)がグループの主要因として現れる(表 3-2 参照)。

4. 扁額からみた昌徳宮後苑の空間特徴

すべての扁額を平面図に落とし、扁額の位置及びグループの分布を確認した。その結果、類似するグループの出現が多く現れる 4 つのエリアが得られ、本章ではエリアごとに考察を行う(図 3-4 参照)。



- 注：1) ● グループⅠ ○ グループⅡ △ グループⅢ
2) L 景観：L1 自然物, L2 自然現象, L3 動・植物, L4 季節的要素, L5 眺望
P 思想：P1 徳・仁・孝, P2 天人合一, P3 神仙

〈図 3-4〉 エリア別の分布図

〈表 3-3〉 エリア別グループのプロフィール

エリア	グループ I		グループ II		グループ III	
宙合樓エリア(A) (No.1.10.11.16~20.41)	33.3% [3]	L2 (1)	44.4% [4]	L1 (3)	22.2% [2]	P1 (2)
		L3 (2)		L2 (1)		
		L4 (1)		L3 (1)		
		L5 (1)		P2 (3)		
		P3 (1)				
演慶堂エリア(B) (No.13.15.22~40)	52.4% [11]	L2 (1)	9.5% [2]	P2 (2)	38.1% [8]	L1 (2)
		L3 (3)				L3 (2)
		L4 (4)				P1 (8)
		L5 (1)				
		P1 (3)				
		P3 (6)				
尊徳亭エリア(C) (No.7.8.9.21)	0%		0%		100% [4]	L1 (1) P1 (4)
玉流川エリア(D) (No.2~6.12.14.42)	37.5% [2]	L3 (1)	37.5% [5]	L1 (2)	25% [1]	L1 (1)
		L5 (1)		L2 (1)		P1 (1)
		P3 (2)		P2 (4)		
				P3 (1)		

注：1) L 景観：L1 自然物、L2 自然現象、L3 動・植物、L4 季節的要素、L5 眺望

P 思想：P1 徳・仁・孝、P2 天人合一、P3 神仙

2) []はエリア内のグループの扁額数、()はグループ内のサブカテゴリー数である。

4.1. 宙合樓エリア(A)の空間的特徴

宙合樓エリア(A)は後苑で比較的平地であり、池、泉、花階⁹⁾、建築(堂・楼・亭)などの庭園要素で構成されている。扁額は映花堂(No.1)、喜雨亭(No.10)、宙合樓(No.16)、芙蓉亭(No.19)、魚水門(No.20)、霽月光風觀(No.41)など、建築(7点)と門(1点)、石に刻まれている(1点)ことを含めて9点が分布する。このエリアの扁額にはグループⅡの構成比がより一層高く、自然物(L1)と天人合一(P2)が反映されている扁額が多く現われる(表 3-3 参照)。

「宙合樓 No.16」は正祖(1752~1800、在位 1776~1800)が即位した年に建てられた建築であり、2階で構成され、1階は王が書いた詩・書・画などを保管し、2階は図書を読む閲覧室や学問を研究する所で使われた。扁額「宙合樓」は‘天地が一つになって自然の理により、政治をする’を意味する。『管子』の「宙合」編をみると、下記のように「宙合」の由来が確認できる。

上は空まで通じ、下は土地まで到達し、外は四海の外まで進んでおり、天地を包括して一つになり、散らばって暇がないところまでに至る。

“天地、万物之橐也。宙合、有橐天地。天地苞万物、故曰万物之橐。宙合之意、上通於天之上、下泉於地之下、外出於四海之外、合絡天地以爲一裹、散之於无間。”

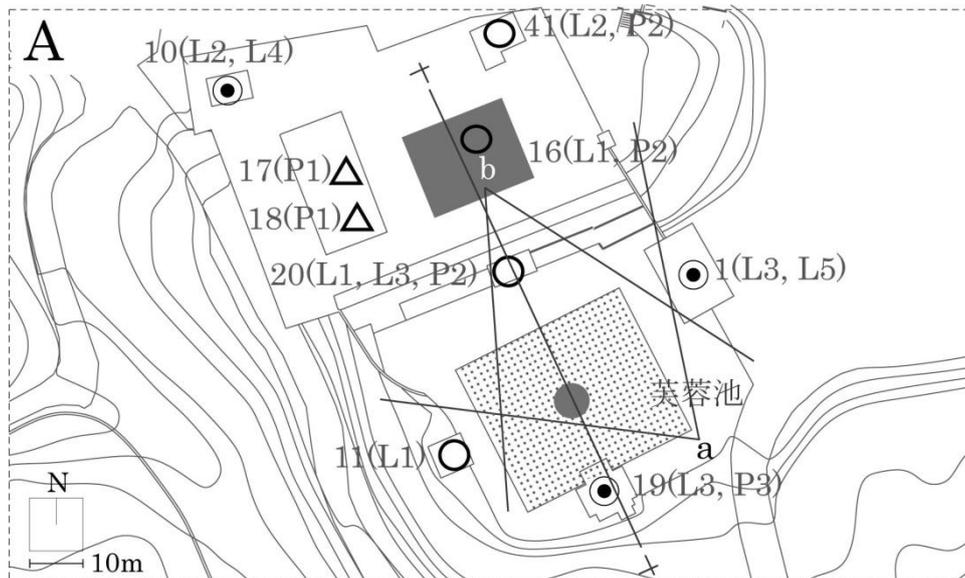
資料：文化祭庁(2006)、再引用¹⁰⁾

つまり、扁額「宙合」は天地調和、天人合一(P2)の思想が反映されていると考えられる。

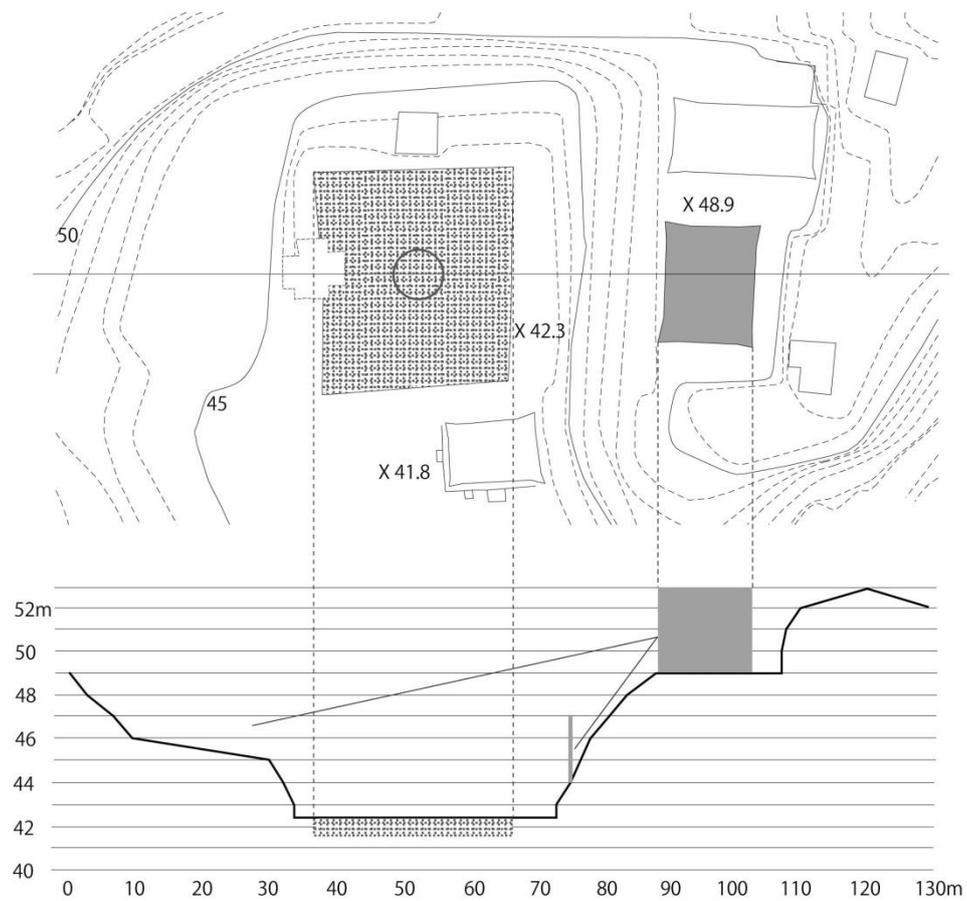
宙合樓の立地的特徴をみると、政治空間である「治朝」に近接して位置し、地上から約7m上に建てられ、後苑で最大の建築規模である。殿に上って下を眺めると、四角い形態の池‘芙蓉池’とその中に丸い形態の島が見られる(図 3-5 参照)。これは‘丸は天、四角は地’を象徴し、扁額の意味と符合することが分かる。即ち、池と島という自然物(L1)と当時の政治的理想が扁額「宙合樓」の意味に反映されていることが分かる。

「魚水門 No.20」は正祖時代(1752~1800、在位 1776~1800)に建てられた宙合樓の南側の門であり、王が利用する大きい門と左右に臣下が利用する小さな門で構成されている(図 3-8 参照)。扁額は‘王と臣下が水と魚のように心がお互いに合う’を意味する。宙合樓に上がるためには王と臣下を水と魚で比喻した魚水門を通過しなければならない。魚水門は王と臣下が会う象徴的な門で、芙蓉池の魚が賢明な水と出会って竜になる人材登用の門になる。これは宙合樓に上がる前、王と臣下が一つになって正しい政治を広げるという正祖の政治的理念が扁額の意味に反映されたと考えられる。

「芙蓉亭 No.19」は芙蓉池の南側に位置し、肅宗(1661~1720、在位 1674~1720)³³



〈図 3-5〉 宙合樓エリア (A) の平面図



〈図 3-6〉 宙合樓エリア (A) の断面図



〈図 3-7〉 芙蓉亭から宙合樓をみる(a)



〈図 3-8〉 宙合樓から芙蓉亭をみる(b)



資料：文化財廳(2006), p.161¹¹⁾

〈図 3-9〉 喜雨亭の全景と扁額

年に建てられた「澤水齋」を正祖(1752～1800、在位 1776～1800)が改築し、「芙蓉亭」と改名した。扁額は「蓮華」を意味し、亭に接している池の名称(芙蓉池)に相応しい(図 3-10 参照)。正祖は亭の中で、外に見える池とその上に咲いている蓮華を鑑賞しながら風流を楽しんだと伝えられている。さらに、蓮華の花言葉は「汚いところにながら汚染されずにいつも清くよい香りがある花で咲いて世の中を浄化する。」を意味し、正しい政治実現に対する正祖の意志が扁額の意味に反映されたと考えられる。

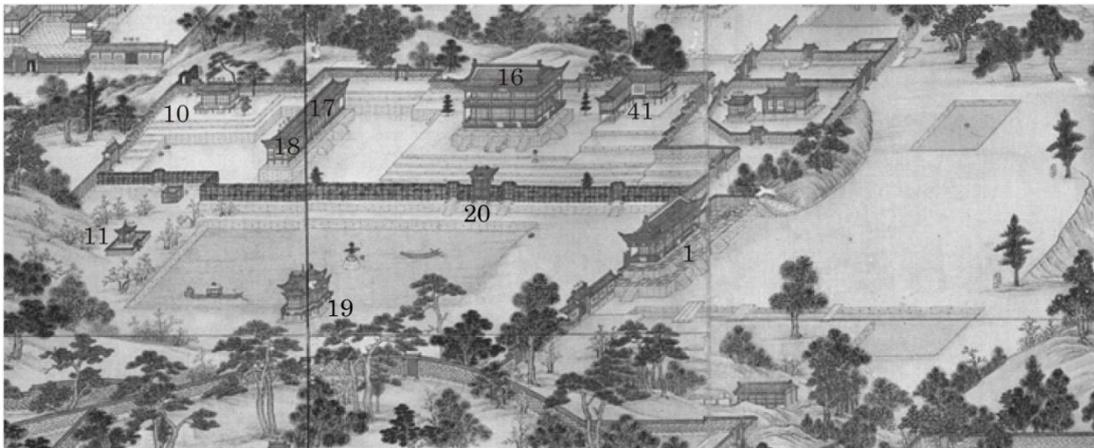
「暎花堂 No.10」は芙蓉池の東側に位置する建築であり、光海君(1575～1641、在位 1608～1623)時代に建てられたと推定される。現在の建築は 1692(肅宗 18)年に再建されたもので、扁額は 1754(英祖 30)年に作られ、「花と調和する」を意味する。扁額が造営された時



〈図 3-10〉 芙蓉亭の全景



〈図 3-11〉 映花堂の全景



注：1) 現在、建築が復元され、扁額の位置が明確に現れることを番号で表示

2) 明記されている番号は、表3-1の扁額番号と一致

- | | | |
|-------------------------|----------------------|-------------------------------|
| 3) 1. 映花堂(Yeonghwadang) | 10. 喜雨亭(Huiujeong) | 11. 四井記碑(Sajeonggibi) |
| 16. 宙合樓(Juhapru) | 17. 書香閣(Seohyanggak) | 18. 親蠶勸民(Chinjamwonmin) |
| 19. 芙蓉亭(Aeryeonjeong) | 20. 魚水門(Ousumun) | 41. 霽月光風觀(Jaewolgwangpungwan) |

〈図 3-12〉 宙合樓エリア (A) 東関圖

期には周辺に花が多く咲き、その景色が意味に反映されたと伝えられている。建築の前には「春塘臺」という広いオープンスペースが広がっており、人材を選抜する科挙試験の場所として利用された(図 3-11 参照)。正祖(1752~1800、在位 1776~1800)は映花堂の前で試験を受ける士の姿を以下のように詩文で表現した。

『映花試士』 めでたい日、春臺に法駕が着いたら
 王の下に多くの士たちが集まった
 誰が分かるのか士の筆の
 上り下りするに私的ではなく、一心にする

瑞日春臺法駕臨
 仙人仗下簇青衿
 誰知試院諸公筆
 升降無私一乃心

資料：韓国古典総合 DB(<http://db.itkc.or.kr>)、弘齋全書、第 1 卷(春邸録)

王の前に伏せて試験を受ける士が花と比喻され、将来に有能な人材となり、王自身と力を合わせて社会の安定と繁栄を果たそうとする正祖の政治的意志が分かる。

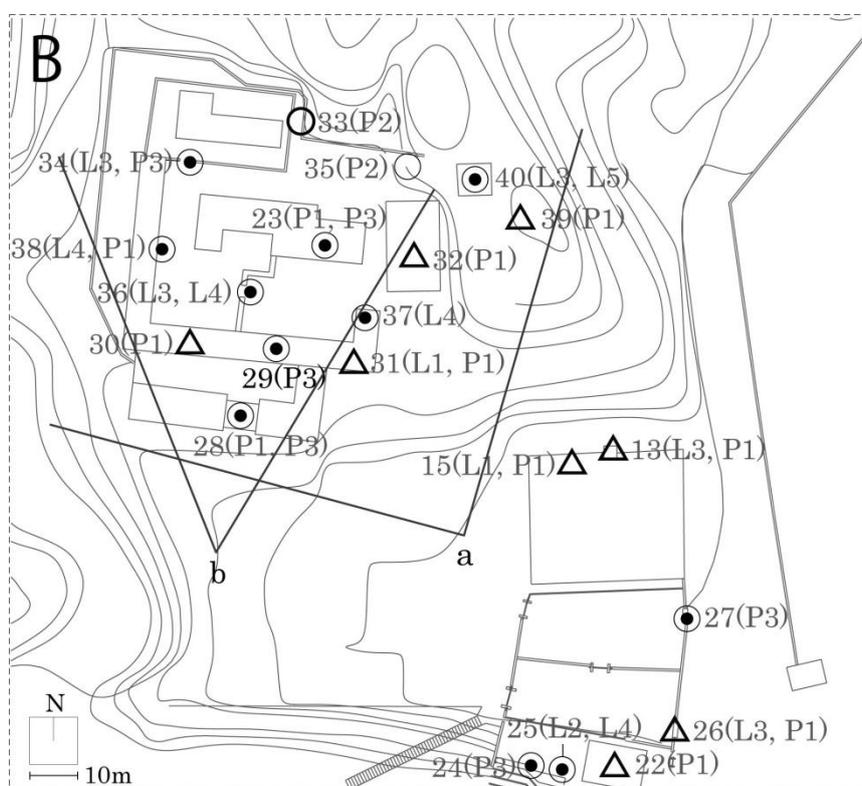
「喜雨亭 No.10」は宙合樓の西側に位置し、肅宗(1661～1720、在位 1674～1720)16年に建てられた亭である(図 3-9 参照)。仁祖(1595～1649、在位 1623～1649)23年に建立され、当時は「醉香亭」と名づけられたが、夏に長期間の日照りに見舞われたためこの場所で雨ごいの祭を行い、それ以後雨が降り、肅宗が亭の屋根を変えて「喜雨亭」と改名した¹²⁾。扁額は「嬉しい雨が降った」を意味し、雨の自然現象(L2)と日照りの季節的要素(L4)が扁額の意味と関連付けられ、当時に日照りの被害を受ける農民と国を心配する王の心が扁額を通じて伝わる。

「宙合樓エリア」は、グループⅡの扁額がもっとも多く現れ、自然物(景観)と天圓地方(思想)が扁額の意味に多く反映されている。中央の方池を中心に規模の大きい建築と花階、島、オープンスペースなど人工的な要素が多く分布する。建築、門、方池を貫く強い軸線と地形の高低による空間構造が扁額の意味とよく呼応し、政治的イメージの強い空間的特徴がみられる。

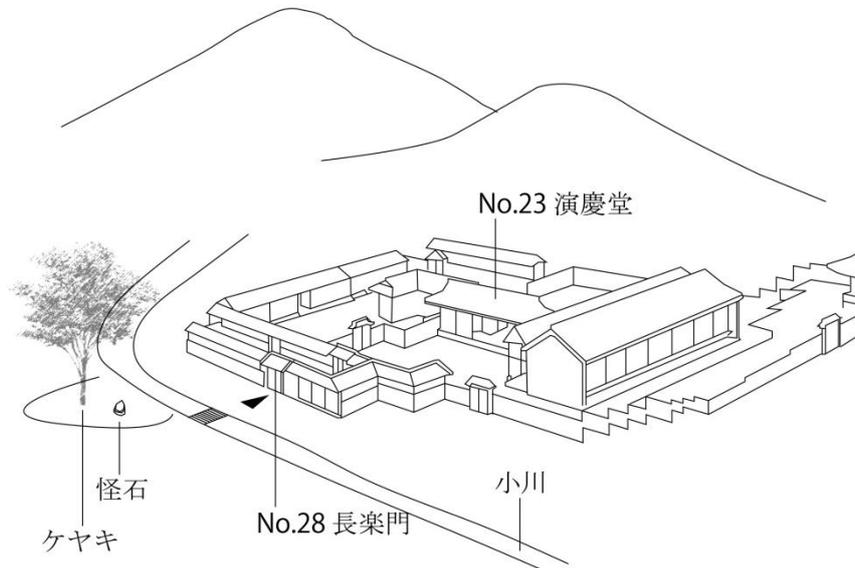
4.2. 演慶堂エリア(B)の空間的特徴

演慶堂エリア(B)は宙合樓の北側に当たる所で、泉、池、橋、建築で構成されている。扁額は愛蓮亭(No.13)、寄傲軒(No.22)、演慶堂(No.23)、不老門(No.27)、長楽門(No.28)など、建築(6点)と門(12点)に掛けられている18点と、石に刻まれている3点を含めて21点が分布する。このエリアはグループIの構成比がより一層高い所で、その中に動・植物(L3)と季節的要素(L4)、徳・仁・孝(P1)、神仙(P3)が反映された扁額が多く現れる(表3-3参照)。

「演慶堂 No.23」は純祖(1790-1834、在位 1800~1834)27年に士大夫の生活を理解し、祝い事を祝うために立てた民家形式の家で、扁額は「祝い事が広がる」を意味する。演慶堂は前に水が流れて後方には山が存在する朝鮮時代の明堂の条件を取り揃えており、一般的に99間の部屋で構成されている民家より規模が大きい120間の部屋で構成されている(図3-14参照)。演慶堂の前園は広く空けられ、後苑の行事の場として使われた空間でもある。明堂で神仙を楽しむ行為が扁額の意味とよくつながる。また、この建築が造営された当時は寵臣たちの強い権勢で王の権勢が弱体化された時期である。扁額の意味にいう「祝い事」は王の権力回復と考えられ、徳と知恵を発揮し、権勢を取り戻しようとする念願が扁額の意味に反映されたと考えられる。



〈図3-13〉 演慶堂エリア(B)平面図



資料：文化財庁(2006)を基に作成¹³⁾

〈図 3-14〉 演慶堂の俯瞰図(a)



〈図 3-15〉 演慶堂の進入部と長楽門(b)



〈図 3-16〉 寄傲軒の全景

〈図 3-17〉 不老門の全景



注：1) 現在、建築が復元され、扁額の位置が明確に現れることを番号で表示

2) 明記されている番号は、表3-1の扁額番号と一致

3) 13. 愛蓮亭(Aeryeonjeong)

22. 寄傲軒(Kioheon)

23. 演慶堂(Yeongyeongdang)

26. 金馬門(Kummamun)

27. 不老門(Bulromun)

*. 漁水堂(Ousudang)未復元

** . 漁水池(Ousuji)未復元

〈図 3-18〉 演慶堂エリア (A) 東闕圖

「長楽門 No.28」は演慶堂の正門であり、小川の上にある小さい橋を渡って進入する。扁額は「長い間遊楽を楽しむ」を意味する。長楽門の進入部には悪い気をなくしてくれるという意味合いで1本のケヤキが植えられており、「神仙が住む所」を象徴する怪石が置かれている(図 3-14・15 参照)。神仙が長く持続するようにと願う望みが周辺の自然物と係わって扁額の意味に反映されたと考えられる。長楽門を入ると左右に位置する2つの門「修仁門 No.30」と「長陽門 No.29」が見える。修仁門は女性が生活する「内室」に通じる門であり、長楽門の西側に位置する。長陽門は男性が生活する「廊室」に通じる門であり、長楽門の東側に位置する。修仁門の高さは両脇にある建築の屋根と同じ高さである一方、長陽門は両脇にある屋根より門柱を高くした形態をしている。扁額はそれぞれ「仁を修める」と「長い間に日が入る」を意味し、儒教思想の徳目と長寿を願う神仙思想が反映されている。さらに男女の生活空間の区分が明確で、男尊女卑を強調した儒教社会の風習が扁額の意味と門の構造を通して分かる。

「寄傲軒 No.22」は純祖(1790～1834、在位 1800～1834)27年に純祖の息子翼宗(1809～1830)が読書を楽しんだ所で(図 3-16 参照)、暎花堂の北側に建てられている。扁額は「広くて寛大な心を恵む」を意味する。寄傲軒は派手に飾った宮殿の建築と異なり、小さくて素朴な形態であり、北向で光が入って来にくい構造である。当時代は寵臣の勢力により左右された勢道政治のため国政が不安定だった時期で、俗世から脱して贅沢がないつましい所で学問を研いて心身を修めたと考えられる。即ち、徳を積んで勝ち抜くという意志が扁額の意味に反映されたと考えられる。

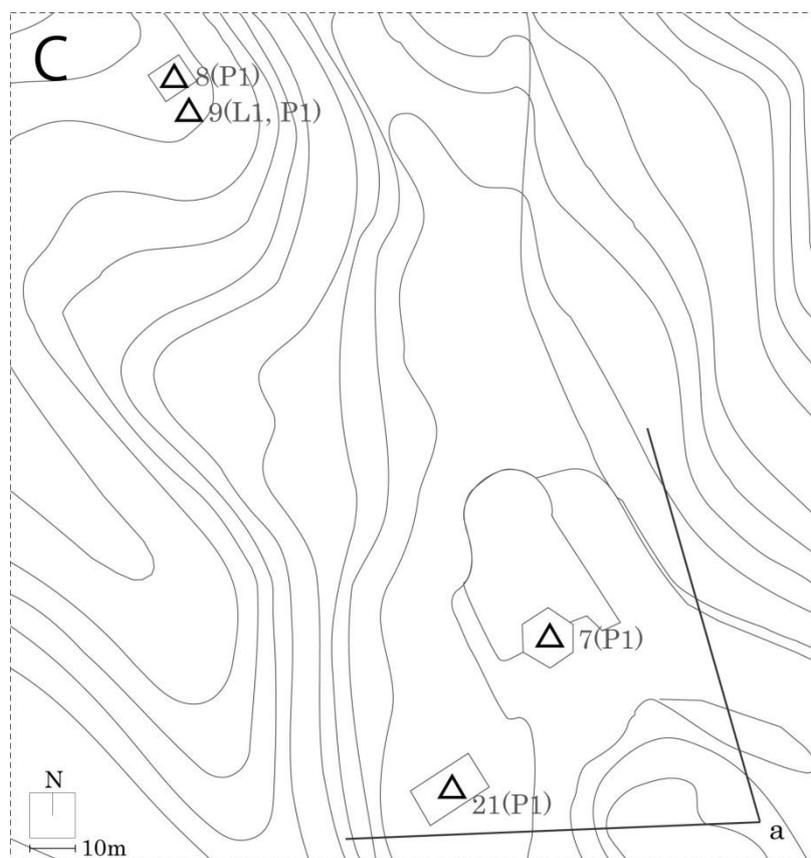
「不老門 No.27」は純祖時代(1790-1834、在位 1800～1834)に建てられた門であり、寄傲軒の南側に位置し、扁額は「老いない」を意味する。門の構造はアーチ形の石で作られ、東を向き、上部に不老門の字が刻まれている(図 3-17 参照)。経年変化のより少ない恒久性に優れた石を利用し、不老不死を祈る神仙思想が扁額の意味に反映されたと考えられる。

「演慶堂エリア」は、グループ I と III の扁額がもっとも現れ、動・植物と季節変化の景観的要素と、徳・仁・孝と神仙の思想的要素が扁額の意味に多く反映されている。後苑で比較的平地に位置し、意匠が少ない素朴な民家形式の建築と門が多く分布する。石や樹木などの自然物に込められている神仙思想と、仁と徳を強調した儒教的理念が扁額の意味と周辺の庭園要素と組み合わせられ、思想的イメージが強い空間の特徴がみられる。

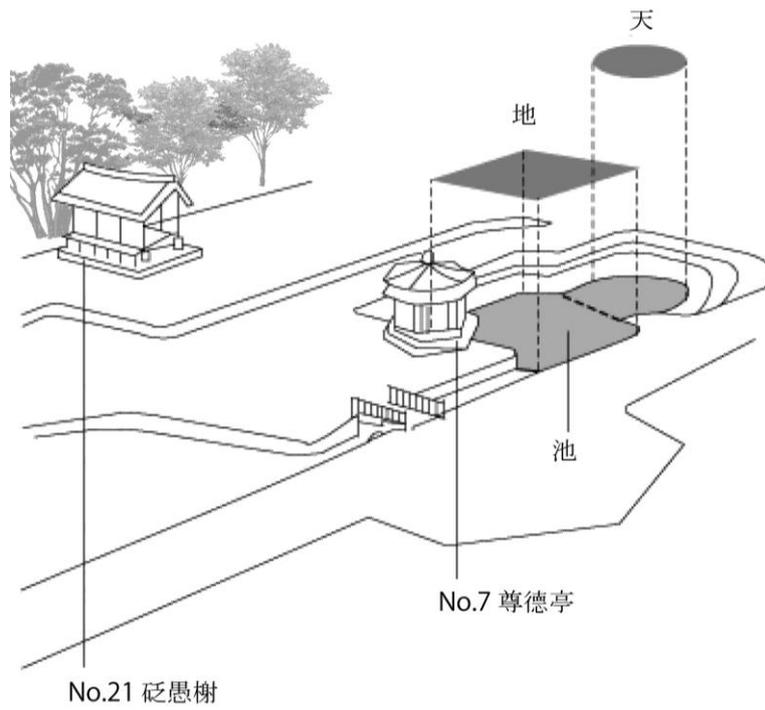
4.3. 尊徳亭エリア(C)の空間的特徴

尊徳亭エリア(C)は東西に形成されている二つの尾根間に谷が存在し、谷に沿って亭が位置している。扁額は尊徳亭(No.7)と清心亭(No.8)、砭愚榭(No.21)の建築に掛けられている3点、石に刻まれている氷玉池(No.9)1点を含めて4点が分布する。このエリアはグループⅢに属する扁額のみで、扁額の意味には自然物(L1)と徳・仁・孝(P1)が反映されている(表 3-3 参照)。

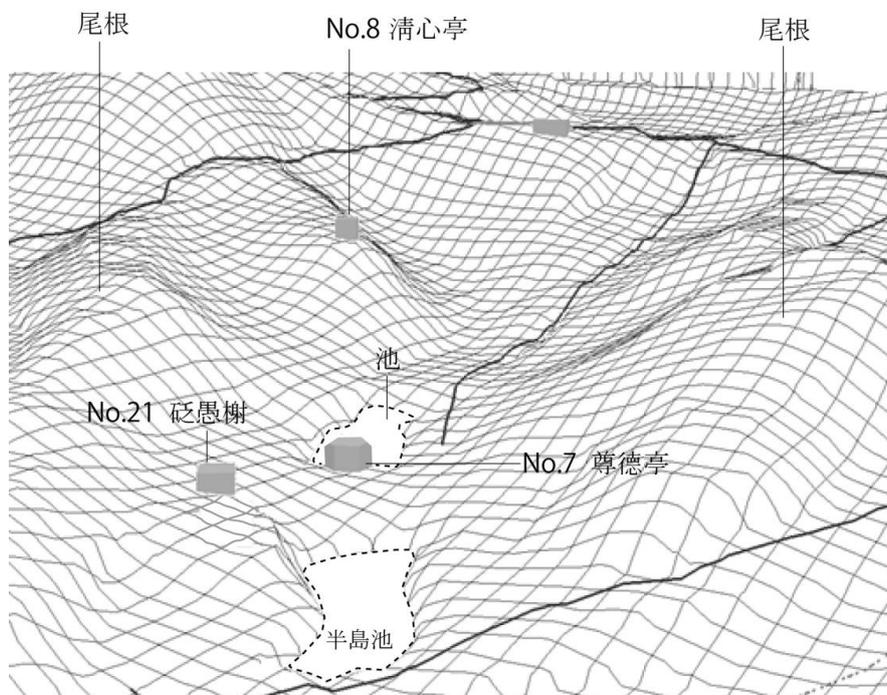
「尊徳亭 No.7」は仁祖(1595~1649、在位 1623~1649)22年に建てられた亭で、改名時期が明確ではないが、「六面亭」から「尊徳亭」に改名された¹⁴⁾。亭の屋根と柱が二重構造をとっており、内部の天井には青竜と黄竜が描かれ、格の高さがうかがえる(図 3-22 参照)。古地図「東闕圖」をみると、尊徳亭の北側には方池があり、その方池の北側には園路を挟んで半円形の池が作られている(図 3-23 参照)。現在、二つの池は一つになっており、1900年代初に作られた「東闕圖」の上でも現在の姿と同一のため、その以前に変形されたと考えられる(図 3-21 参照)。小宇宙を象徴する池をみながら徳を高めて理想的な国を志向する王の意志が扁額の意味と空間の構造を通して分かる。



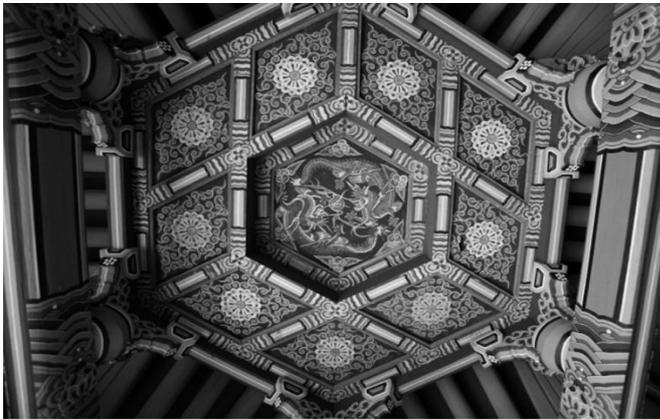
<図 3-19> 尊徳亭エリア(C)平面図



<图 3-20> 尊德亭の分析図(a)



<图 3-21> 尊德亭エリア(c)地形図



左上：尊徳亭と方池
 左下：尊徳亭の天井
 右：清心亭と氷玉池

〈図 3-22〉 尊徳亭と清心亭



注：1) 現在、建築が復元され、扁額の位置が明確に現れることを番号で表示
 2) 明記されている番号は、表3-1の扁額番号と一致
 3) 7. 尊徳亭(Jondeokjeong) 8. 清心亭(Cheongsimjeong)
 21. 砭愚榭(Pyeomusa)

9. 氷玉池(Bingokji)

〈図 3-23〉 尊徳亭エリア (C) 東闕圖

「砭愚榭 No.21」は正祖(1752~1800、在位 1776~1800)時代に建てられた建築で、尊徳亭の西側に位置する(図 3-20 参照)。扁額は「愚かな人に鍼を打つ」を意味する。亭の周辺には松、クヌギ、モミジ、ケヤキなどが多く植栽され、快適な環境を造営している。正祖が砭愚榭で四季の風景を詠んだ詩文「砭愚榭四詠—春花・夏日・秋月・冬雪」が伝えられている。その中に秋を背景にした詩「秋月」は下記のようなものである。

晴れた露が庭に降りており、
空の下のすべての土地が一面にきれいだ
世界中に暖気が回って、
遅い夜に本を読むことであって夜の空気が適切だ。

資料 : Kang(2005) 15)

月光が明るい夜に学問とともに精神修養を積む王の姿が連想される。構えのない自然を空間で「愚かな心を捨てて徳を高める」という扁額「尊徳亭」と「砭愚榭」の意味が周辺の風景とよく調和していることが分かる。

「清心亭 No.8」は肅宗(1661~1720、在位 1674~1720)14年に建てられた建築で、尊徳亭の北側に位置する(図 3-20 参照)。扁額は「清い心」を意味する。清心亭の規模は小さいものの、多くの王が詠んだ詩が伝えられている。

正祖の『清心霽月』

この心と夜の気運のうち何がもっとすっきりのか
東の森で晴れた月が出たことが分かる
部屋終りの暗い部分も全部屋のようだ
全世界が光によって明るくなってほしい

心將夜氣較誰清
時透香來好雨邊
千古濂翁惟解愛
欲編花史壽其傳

資料 : ソウル学研究所(1994), p.147 16)

純祖の『清心玩月』

水時計はぼけて露はやせていないのに
雲が晴れて空には、月の光が浮かび出る
私の心も今日の夜には月のように晴れ、
氷のようにきれいで明るい月を見ることに気が抜けて、欄干に頼るのを忘れる

仙漏沈沈露未晞
雲開玉宇月生輝
吾心此夜同清朗
仰看氷輪倚檻遲

資料 : ソウル学研究所(1994), p.147 17)

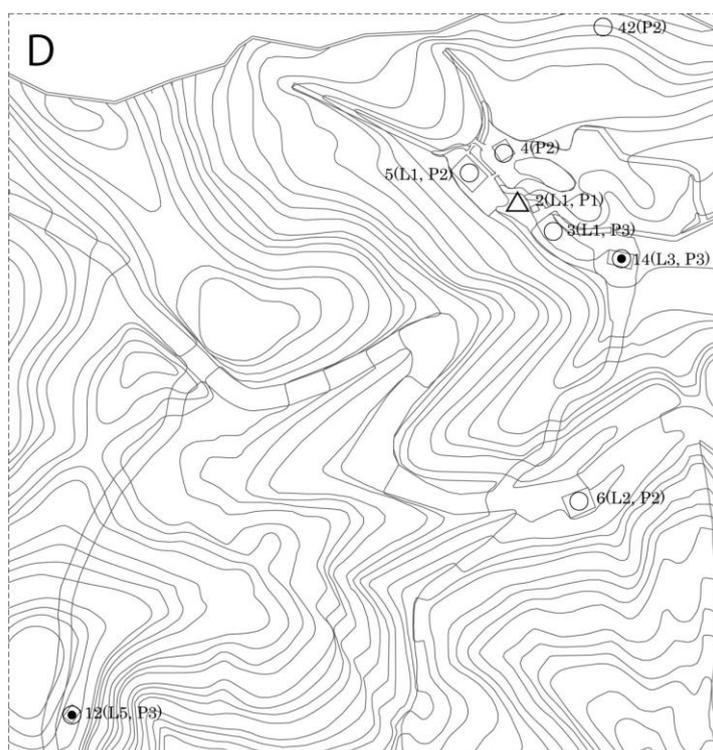
清心亭が視点場になり、清い月の風景が描写されている。清心亭の前には石で作った方形の小さい池があり、‘清く美しい’を意味する文字「氷玉池、No.9」が刻まれている(図 3-22 参照)。清心亭と氷玉池、また詩に込められている意味から、内面の精神世界を重視した社会的様相が分かる。

「尊徳亭エリア」は、グループⅢの扁額のみであり、徳・仁・孝(思想)が扁額の意味に多く反映されている。東西に形成された二つの尾根と谷がある所に位置し、樹林が豊かで静かな雰囲気が演出されている。扁額の意味は、周辺景観を直接的に表現するものより、当時の儒教精神と関わって徳を高め、思索し、心身の安定をはかる場所として、修養的イメージが強く表現するものとなっている。

4.4. 玉流川エリア(D)の空間的特徴

玉流川エリア(D)は後苑で一番北側のエリアであり、仁祖(1595~1649、在位 1623~1649)時代に造営された。「玉流川」を中心に5つの亭が位置し、滝、小川、橋、岩などで構成されている。扁額は逍遙亭(No.3)、太極亭(No.4)、清漪亭(No.5)、聚奎亭(No.6)、凌虚亭(No.12)、翠寒亭(No.14)の建築が6点、建武門(No.42)の門が1点、玉流川(No.2)の岩に刻まれている1点を含めて8点が分布する。このエリアはグループIとIIの構成比が高い所で、自然物(L1)と自然現象(P2)、神仙(P3)の内容を記した扁額が多く現れる(表3-3参照)。

「玉流川 No.2」は逍遙亭(No.3)前の岩に溝を掘って水が流れるようにした後、下に落とした小さな滝の名称で、仁祖14年(1636)に造営された(図3-22参照)。岩には「玉のように清く流れる小川」を意味する文字「玉流川」が刻まれている。清い精神を強調する意味で解釈できる。さらに、その文字の上部には玉流川の景色を歌った肅宗(1661~1720、在位 1674~1720)の詩文が刻まれている(図3-26参照)。



<図3-24> 玉流川エリア(D)平面図



注：1) 現在、建築が復元され、扁額の位置が明確に現れることを番号で表示

2) 明記されている番号は、表3-1の扁額番号と一致

- | | | |
|-----------------------|----------------------|-----------------------|
| 3) 2. 玉流川(Okryucheon) | 3. 逍遙亭(Soyojeong) | 4. 太極亭(Taegukjeong) |
| 5. 清漪亭(Cheonguijeong) | 6. 聚奎亭(Chwigyujeong) | 14. 翠寒亭(Chwihanjeong) |

<図 3-25> 玉流川エリア(D)東関圖

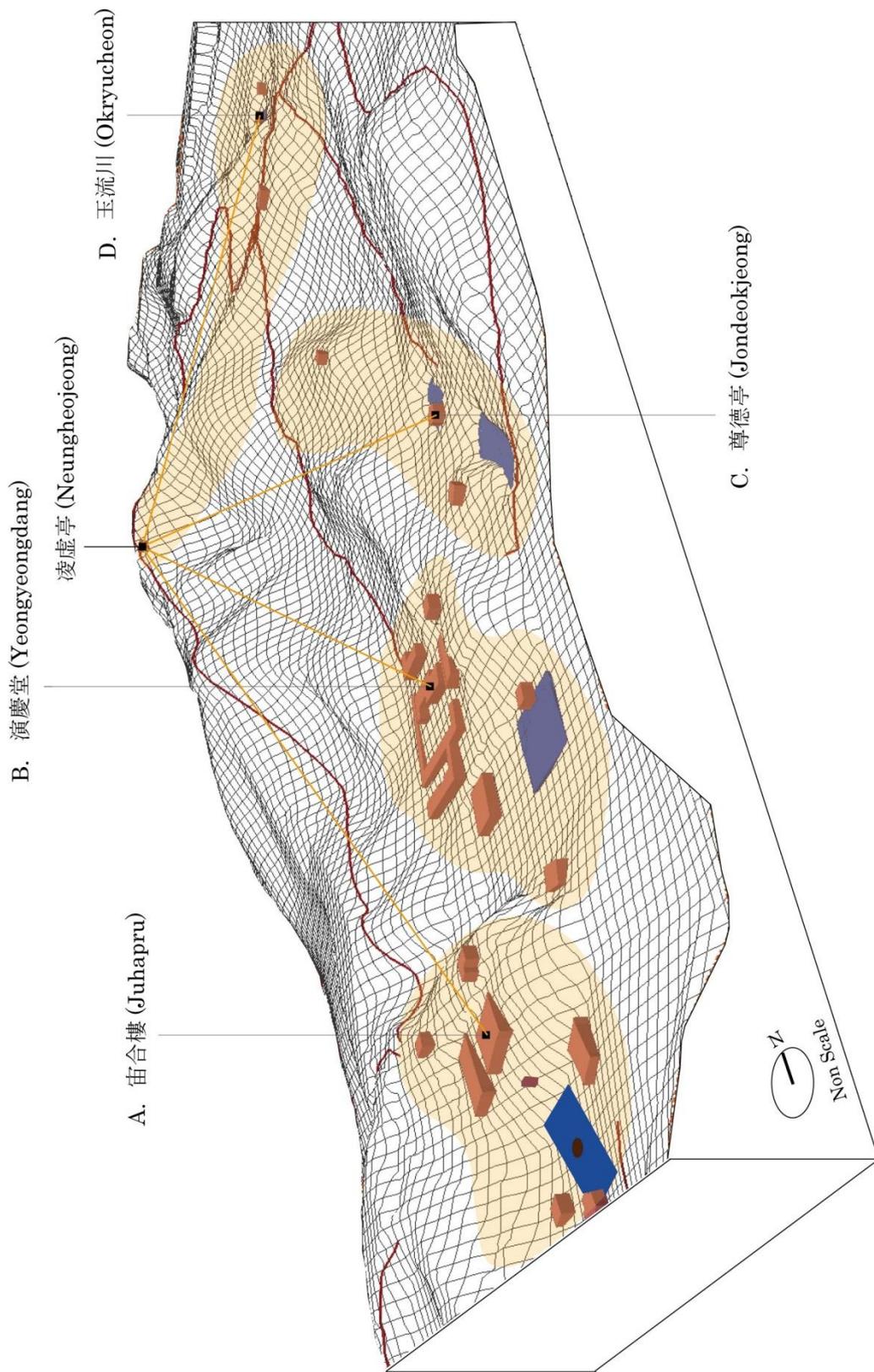
玉流川の滝三白尺、
あの遠い空から落ちる。
周りを見たら白い虹が掛かり、
谷間ごとに雷鳴が広がっていく。

飛流三百尺
遙落九天來
看是白虹起
翻成萬壑雷

資料：Choe (2006), p.197¹⁸



<図 3-26> 玉流川の全景



<图 3-27> 昌德宮の地形図

「逍遙亭 No. 3」は‘自由にゆっくり遊ぶ’を意味する。逍遙亭に座って玉流川を眺めながら仙境を楽しむ王の姿が連想され、玉流川と扁額の意味がよく調和される。

「凌虚亭 No.12」は肅宗(1674~1720)17年に建てられた亭で、後苑で一番高い所(標高90m)に位置する(図 3-27 参照)。扁額は‘空に上がる’を意味する。この亭で肅宗は詩文「題凌虚亭」を、正祖は詩文「凌虚亭暮雪」を作るなど、凌虚亭から昌徳宮の冬の風景を描写した詩文が多数伝わる。昌徳宮の全景の鑑賞が可能である凌虚亭の立地的特性が扁額の意味と関連付けられている。

「聚奎亭 No.6」は仁祖(1595~1649、在位 1623~1649)18年に建てられた亭で、玉流川の入口に位置する。後苑における凌虚亭に引き続き二番目に高い所に立地し、瓦屋根で構成され、壁がなく四方が開放されている。扁額は‘星が奎星に集まる’を意味する。「聚奎」は、宋の太祖 5(967)年に五つの星が学問を担当する「奎星」に集まった以後から天下が平穩になったという話に由来する¹⁹⁾。即ち、星がよく見られる地形的位置と社会安定を望む扁額の意味が関連付けられている。

肅宗の『題凌虚亭』

青くそびえたつ山は青い空に着いたが
藤を取って谷間によって派手な亭に上がったら
千種の青い木がびっしり矢をさしたように
一万輪の赤い花が屏風を広げておいたよう
高い山は霧によって黒く見えて
酪山に日の光が映って眩しく美しい
のんびり高い欄干によったら
空には時々鶴の泣き声が聞こえる。

聳翠巉巖接太清
攀蘿援壑上華亭
千條碧樹森如簇
萬朶紅花繞似屏
鎮岳霧收瞻黛色
酪山日照仰輝明
閑來無事危欄凭
天末時聞鶴唳聲

資料：ソウル学研究所(1994), p.158²⁰⁾

正祖の『凌虚亭暮雪』

日が積もって暮れる空に
静かに降る軽い雪がきれいだね。
ちょっと間に山河に降りてからこそ
玉のような木と花が満ちているね。

歲色崢嶸欲暮天
騷騷輕雪也堪憐
須臾遍灑山河去
瓊樹琪花擁後前

資料：ソウル学研究所(1994), p.159²¹⁾

「玉流川エリア」は、グループ I と II の扁額が多く現れ、自然物、季節変化、眺望の景観的要素と、天人合一の思想的要素が扁額の意味に多く反映されている。地理的には後苑でもっとも奥に位置し、大きい岩と滝、多数の亭、方形の田などの庭園要素で構成されて

いる。神仙世界に対する志向と清い精神を強調する扁額の意味が、小川と滝などの自然物とつながり、政治的な理想が込められている扁額の意味が、「天圓地方」思想を象徴する方形の田と可視距離が良い亭の立地的特徴と関連付けられる。私的には、国王の表面的な権力行為と休息空間の目的で利用された一方、公的には、社会の安定と繁栄を望む国王の意志が反映されたところで、二元的イメージが強い空間の特徴がみられた。

5. 小結

本章では昌徳宮後苑に存在するすべての扁額を取り上げ、その意味に反映されている「思想」と「景観」の要素を抽出し、扁額が位置する実空間との関係を分析した。また、宮園の全体における扁額の分布を確認し、昌徳宮後苑の空間的特徴を明らかにした。昌徳宮後苑に存在する扁額は、儒教的徳目や正しい政治実現に対する王の意志、仙境など、思想的特性と関連付けられ、扁額が存在する周辺空間の構成要素や自然現象、山水鑑賞など、景観的特性と関連付けられていることが分かった。さらに、扁額に込められている象徴的意味の属性から類似する領域が形成され、それぞれの特徴がみられた。

まず、「宙合樓エリア」は、党の対立が解決され、社会・政治が安定された朝鮮後期に造営されたエリアで、中央の方池を中心に規模の大きい建築と花階、島、オープンスペースなど人工的な要素が多く分布する。扁額の意味には自然物(景観)と天圓地方(思想)が多く反映されており、空間の構造は建築、門、方池、地形の高低による強い軸線が作られている。エリア造営に主導的役割をした正祖(22代)の学問政治に対する意志が、扁額の意味と空間の構造と組み合わせられる政治的イメージが強い空間の特徴がみられた。

次に「演慶堂エリア」は、朝鮮後期の中に党間の均衡が崩れ、少数の勢力家の権力が強く、王の権威が弱体化された時期に造営されたエリアである。後苑で比較的平地に位置し、意匠が少ない素朴な建築が分布する。扁額には、儒教思想が目指す「徳」、「仁」、「礼」と神仙思想が目指す「不老不死」が、樹木、怪石、日、光などに比喻された表現が多く、その扁額は建築の門に掛けられていることが多い。政権回復を願う王の強い意志が扁額の意味に込められ、庭園を構成する自然物や自然現象と組み合わせられる思想的イメージが強い空間の特徴がみられた。

「尊徳亭エリア」は、外敵の侵略や全面的な党派の交代及び政策変化など、国政が混乱した朝鮮中期に造営されたエリアで、東西に形成された二つの尾根と谷がある所に位置し、樹林が豊かで静かな雰囲気演出されている。扁額の意味には徳・仁・孝(思想)が多く反映されており、扁額の意味が周辺景観の直接的な関連よりは、当時の儒教精神と深く関わっている。国政が混乱された時期に徳を高め、思索し、心身の安定をはかる場所として利用する修養的イメージが強い空間の特徴がみられた。

「玉流川エリア」は、反乱を起こし、統治者になった仁祖(16代)により造営され、後苑でもっとも奥に位置する。時期的には、内乱と中国の清の侵略など、内外的な問題により国政が混乱した朝鮮中期に造営されたエリアである。神仙世界に対する志向と清い精神を強調する扁額の意味が、小川と滝などの自然物とつながり、政治的な理想が込められている扁額の意味が、「天圓地方」思想を象徴する方形の田と可視距離が良い亭の立地的特徴と

関連付けられる。国政が不安定な時期において、私的には、国王の表面的な権力行為と休息空間の目的で利用された一方、公的には、社会の安定と繁栄を望む国王の意志が反映されたところで、二元的イメージが強い空間の特徴がみられた。

補注及び引用・参考文献

- 1) 송동현(2005) 조선시대 궁궐건축의 현판구성과 상징성에 관한, 한양대학교대학원석사 논문
【Song, Dong-Hyun(2005) 朝鮮時代の宮闕建築の懸板構成と象徴性に関する研究, 漢陽大学大学院修士論文】
- 2) 진상철·이상준·김영모(1998) 朝鮮時代 宮闕 建築物의 命名特性, 동신대학교논문집 10, pp.511~528
【Chin, Sang-Chul · Lee, Sang-Joon · 金永模(1998) 朝鮮時代における宮闕建築物の命名特性, 東新大学論文集 10, pp.511~528】
- 3) 안장리(2006) 영조(英祖) 궁궐 인식의 특징, 정신문화연구, Vol.29(3), pp.33~68
【An, Jang-Li(2006) 英祖の宮闕認識の特徴, 精神文化研究, Vol.29(3), pp.33~68】
- 4) 최종덕(2006) 조선의 참 궁궐 창덕궁, 서울, 놀와, pp.177~178
【Choe, Jong-Deok(2006) 朝鮮の宮闕「昌徳宮」, ソウル, 訥窩, pp.177~178】
- 5) 문화재청(2006) 궁궐의 현판과 주련 2, 서울, 수류산방
【文化財廳(2006) 宮闕の懸板と柱聯 2, ソウル, 樹流山房】
- 6) 奎章閣韓國額研究院, <<http://e-kyujanggak.sun.ac.kr>>, 2012. 2. 5 参照
- 7) 韓國古典綜合 DB, <<http://db.itkc.or.kr>>, 2012. 2. 1 参照
- 8) Chin, Sang-Chul · Lee, Sang-Joon · 金永模, 前掲書
- 9) 花階は宮殿や寺院、書院などの庭に階段の形で段を作り、花を植えた庭園施設である。
特に、庭園の斜面に石垣を積み、造営した花階が多くみられ、土砂の流出防止と庭園の美しさを加える技法で、韓國庭園を構成する要素である。
- 10) 文化財廳, 前掲書, p.144
- 11) 文化財廳, 前掲書, p.161
- 12) Choe, Jong-Deok, 前掲書, p.161
- 13) 文化財廳, 前掲書, p.184
- 14) 한영우(2006) 조선의 집 동궐에 들다, 서울, 열화당 · 효형, p.244
【韓永愚(2006) 朝鮮の宮闕「東闕」に入る, ソウル, 悅話堂 · ヒョヒョン, p.244】
- 15) 강미송·안동만(2005) 내려티브 형식을 적용한 창덕궁 해설 계획 : 창덕궁 후원 “상림십경” 을 주제로 하여, 한국전통조경학회지, Vol.23(4), 43~56
【Kang, Mi-Song · Ahn, Tong-Mahn(2005) ストーリー形式を適用した昌徳宮の解説計画, 昌徳宮の後苑“上林十景”を主題にして, 韓國伝統造景学会誌, Vol.23(4), 43~56】

- 16) 서울학연구소(1994), 宮闕志 1, 景福宮・昌德宮, p.147
【ソウル学研究所(1994), 宮闕志 1, 景福宮・昌德宮, p.147】
- 17) ソウル学研究所(1994), 前掲書, p.147
- 18) Choe, Jong-Deok, 前掲書, p.197
- 19) Choe, Jong-Deok, 前掲書, p.208
- 20) ソウル学研究所(1994), 前掲書, p.158
- 21) ソウル学研究所(1994), 前掲書, p.159

第4章

詩文「上林十景」から連想する昌徳宮後苑の 風景イメージの特性

1. 本章の目的及び構造

1.1. 本章の目的

第3章では後苑に存在する「扁額」に着目し、その意味と空間の関係から庭園空間の特徴を考察した。本章では後苑空間を視対象とした「詩文」に着目し、詩文のテキスト(text)から風景イメージを抽出し、イメージ要素と視点、演出技法の相互関係を総合的に考察することを目的とする。

韓国の先祖は庭園を精神的享受の対象と認識し、文や画などに文学的感覚を込め、多く表現した。その中で詩文は、風景から感じた先祖自身の心象(image)に対して芸術的美学と教養を加味し、記号化された文字で表現したものといえる。詩文から風景イメージを抽出することは、庭園に関する先祖の心象を理解し、庭園の本質的価値を解明することに重要である。今までの詩文に関する研究は、テキスト(text)分析による景観の解釈及び特性を明らかにする研究であり¹⁾²⁾³⁾、本研究のような風景イメージの構造の相互関係から昌徳宮後苑の風景表象の仕方に関して知見を出した研究はない。

1.2. 本章の構造

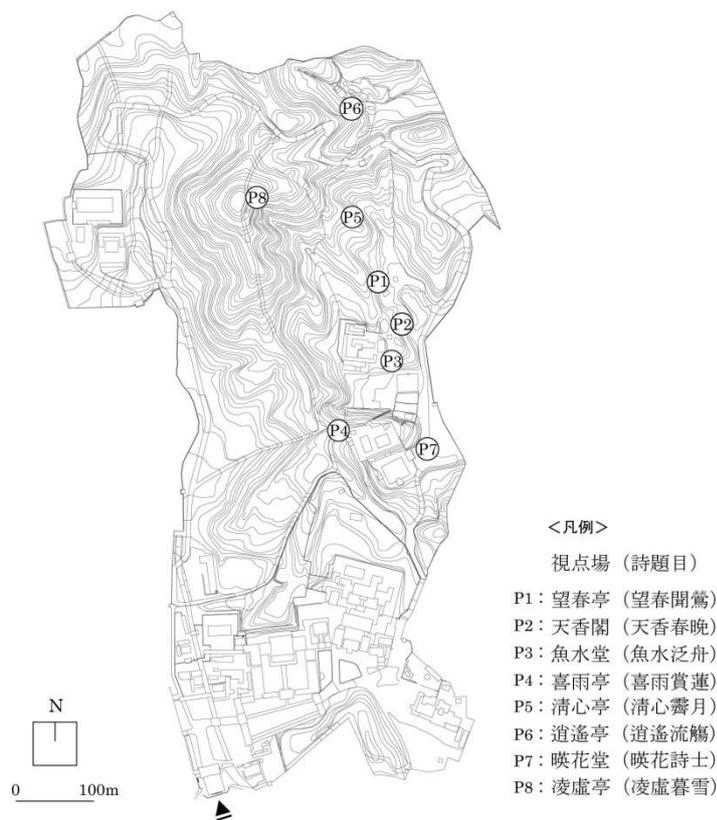


〈図 4-1〉 本章の構造

2. 研究および分析方法

2.1. 研究対象

本章の研究対象は昌徳宮後苑の美しい風景 10 景を描写した詩文「上林十景」である。「上林十景」は朝鮮の 22 代王の正祖(1752~1800、在位 1776~1800)が 1767 年に作った詩文で、観豊閣で王が田を打つ春の風景(観豊春景)、望春亭で聞くウグイスの声(望春聞鶯)、天香閣でみる晩春の風景(天香春晚)、魚水門の前にある芙蓉池で舟遊びをする風景(魚水泛舟)、逍遙亭で流觴曲水を楽しむ風景(逍遙流觴)、喜雨亭で蓮華をみる風景(喜雨賞蓮)、清心亭で月を眺める風景(清心霽月)、観徳亭で紅葉狩り(観徳風林)、暎花堂の前で科挙試験を受ける風景(暎花詩士)、凌虚亭で眺める雪の降る風景(凌虚暮雪)がある(表 4-1 参照)。各詩文の視点場 (view point) は図 4-2 のようであり、詩文「観豊春景」と「観徳風林」の視点場である「観豊閣」と「観徳亭」は、現在昌慶宮に位置しているため、本研究の対象から除いた。



注：②③の視点場は推定地である。

<図 4-2> 「上林十景」視点場の分布図

〈表 4-1〉 詩文「上林十景」

題目	内容	原文
1 望春聞鶯	白い蝶がのどかな春を戯れて 青い木の濃い陰でウグイスが一日中鳴く 季節によって自らで鳴く鳥も調和の一部だ 仁天位育 ⁴⁾ が聖人の心だ	游絲粉蝶弄春晴 碧樹陰濃盡日鶯 時鳥自鳴猶造化 仁天位育聖人情
2 天香春晚	春の池の辺にある鵜はあまりにも可愛らしい 草は花を振り撒いておいた場みたく、ヤナギは煙みたいだ 宮を過ぎる人々よ、早く集まりなさい 遅い春の空で新鮮な香りが下るでしょう	春塘鵜太生憐 草似芳茵柳似烟 杏子宮衫續挾路 仙香一陣豔陽天
3 魚水泛舟	水が暖かく、魚が隠れた水際の日ざしがあけしい 赤い錨をおさめなく、蓮華をつむ船が置いてある 米家の書畫 ⁵⁾ を山のように積んで通ったら 充分に春の風を当たりながら余裕に遊ぶ	水暖魚潛渚日悠 不收紅纜放蓮舟 米家書畫如山載 贏得春風汗漫遊
4 喜雨賞蓮	心の中にくっきりと憶えて構えないで天性をつくして 良い雨の中に香りが漂って来る 長い間、廉翁 ⁶⁾ だけが愛すると思った 花蛇に編んで長い間伝えたいね	不須雕飾乃全天 時透香來好雨邊 千古濂翁惟解愛 欲編花史壽其傳
5 清心霽月	清い夜の空気は比べることがない 東森で晴れた月が出る感じが感じられる 部屋終りの暗い部分も全部昼のようだ 全天下が光によって明るくなってほしい	心將夜氣較誰清 却會東林霽月生 堂奧蔽幽皆似晝 一天之下定同明
6 逍遙流觴	玉のように清く飛んで流れる水、くねくね長い 欄干のそばの山光、初秋の冷ややかさを送る 小川で魚を見る楽しさがある 蘭亭で、さかずきを回す風流 ⁷⁾ だけあるか	漱玉清流曲曲長 近欄山色納新涼 濠梁自有觀魚樂 可但蘭亭遞羽觴
7 映花試士	めでたい日、春臺に法駕 ¹⁾ が着いたら 王の下に多くの士たちが集まった 誰が分かるのか士の筆の 上り下りするに私的ではなく、一心にする	瑞日春臺法駕臨 仙人仗下簇青衿 誰知試院諸公筆 升降無私一乃心
8 凌虛暮雪	時間が経って暮れる空に 小さくて取るに足りなく下る軽い雪がかわいそうだ 束の間に山と川の全域に雪が降るから 玉のような木と花が先後にぎっしりだ	歲色崢嶸欲暮天 騷騷輕雪也堪憐 須臾遍灑山河去 瓊樹琪花擁後前

資料：韓国古典総合 DB(<http://db.itkc.or.kr>)、弘齋全書、第1巻(春邸録)

2.2. 調査および分析方法

本章では文献調査⁸⁾と韓国古典翻訳のウェブサイト⁹⁾を参照し、詩文「上林十景」の原本(Chinese)と解釈本(Korean)を収集した。

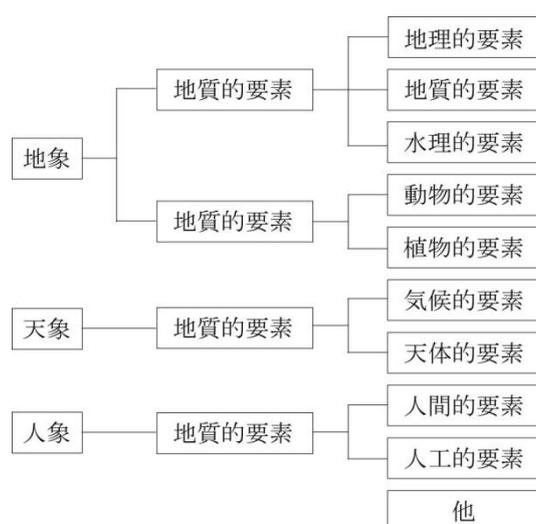
風景イメージを把握するために被験者を選定し、2013年6月12日～6月14日にかけてアンケート調査を実施した。被験者は「韓国国立江陵原州大学」の造景学科在学生56名を対象として行い、50名の有効回答を得た。調査は校内の講義室で行い、8編の詩文を記載した用紙を被験者に渡し、各々の詩文を読ませた後、思い浮かべる風景のイメージをA4サイズ用の紙にスケッチしてもらった。分析の手順は以下の通りである。

①被験者に描いてもらったスケッチ(8編×50人の400枚)から風景イメージの構成要素を抽出・分類し、集計を行う。

②集計されたデータに基づき、構成要素の出現数を確認し、詩文に表現されている語句との関係を分析する。

③風景イメージの構成要素を視点(近・中・遠景)別に分類・集計を行い、パターンを抽出し、詩文との関係を考察する。

風景イメージの構成要素の分類は高橋進(1982)の文献を参照し¹⁰⁾、地象、天象、人象の3つのカテゴリーに分類する。さらに、地象は地理的(地形・地理・水理)・生物的(動物・植物)要素の5つのサブカテゴリー、天象は気候的・天体的要素の2つのサブカテゴリー、人象は人間的・人工的要素の2つのサブカテゴリー、他を含めて10個のサブカテゴリーを設定し細分化する(図4-3参照)。



〈図 4-3〉 風景イメージの構成要素

〈表 4-2〉 風景イメージと構成要素

題目	詩文「上林十景」から連想された風景イメージ					
P1 望春聞鶯		Image1		Image2		Image3
		D		D: 山		D
		M		M		M
		C: 章本 木本 鳥蝶		C: 章本 木本 鳥		C: 木本 鳥蝶
P2 天香春晚		Image1		Image2		Image3
		D		D		D
		M		M		M
		C: 木本 池岩 人間		C: 木本 池岩 カモ		C: 章本 池カモ
P3 魚水泛舟		Image1		Image2		Image3
		D: 山		D: 山		D: 山
		M: 川		M: 川		M: 木本 池船
		C: 川 人間 船釣り		C: 章本 川 人間 船		C: 章本 池
P4 喜雨賞蓮		Image1		Image2		Image3
		D		D		D
		M		M		M
		C: 雨 人間 亭章本		C: 雨 章本 池 人間 亭		C: 雨 章本 池 人間 亭
P5 清心霽月		Image1		Image2		Image3
		D: 山 月		D: 月		D: 月
		M		M		M
		C: 雨 人間		C: 人間 亭 お膳		C: 章本 木本 家 垣
P6 逍遙流鶻		Image1		Image2		Image3
		D: 山		D: 山		D: 山
		M: 溪流		M: 溪流		M: 溪流
		C: 溪流 魚岩 亭		C: 溪流 章本 人間 亭		C: 溪流 人間 亭
P7 映花試士		Image1		Image2		Image3
		D		D		D: 太陽
		M		M		M: 人間 旗 テント
		C: 人間 椅子 階段		C: 人間 椅子 紙		C: 人間
P8 凌虚暮雪		Image1		Image2		Image3
		D: 山 日 雪		D: 山 日 雪		D: 山 日 雪
		M: 雪		M: 雪		M: 雪
		C: 雪 亭		C: 雪 章本 木本		C: 雪 章本 木本

注: 1) アンケートからもらった風景イメージの中、代表的なもの3つずつを例に挙げた。

2) D: 遠景の要素、M: 中景の要素、C: 近景の要素

3. 風景イメージと詩文の関係

3.1. 風景イメージの構成要素と詩文の関係

詩文「上林十景」から思い浮かべる風景イメージがどんな要素で構成され、どんな要因に影響されるかを把握するため、抽出された構成要素の出現数を集計した（表 4-3 参照）。

P1・2 は春の風景を描写した詩文であり、風景イメージには生物的要素(動物・植物)が多く現れる。具体的に、P1 では蝶(43 点)、鳥(41 点)、木本(47 点)の出現数が高く、P2 では草本(33 点)、鳥(21 点)の出現数が高く現れる。これは P1 に書かれている語句「蝶：1 行」、「木：2 行」、「ウグイス：2 行」と、P2 の「鳥：1 行」、「草：2 行」、「花：2 行」に直接的な影響を受けたと考えられる。一方、詩文に書かれていない語句にもかかわらず P1 と P2 の風景イメージに多く現れる草本(30 点)と水理(21 点)は P1 の語句「蝶：1 行」や「春：1 行」、P2 の語句「やなぎ：2 行」から影響を受け、連想されたと考えられる。

P3・6 は神仙思想が反映されている詩文であり、風景イメージには水理的・人工的要素が共通して多く現れる。また、全体の詩文の中で、構成要素の総出現数をもっとも多い(P3：224 点、P6：250 点)。まず、P3 では水理(50 点)と道具系(66 点)が高い頻度を占めており、被験者 50 名の全員が水理的要素をスケッチし、44 名が船をスケッチするなど似た風景イメージが現れている。詩の本文に語句「水：1 行」、「船：2 行」が表現されていることから、語句と被験者が連想する風景イメージの要素には深い関連性があると言える。また、比較的多い出現数を占める山(20 点)は詩文の 3 行「書画は山のように積もったから」で、書画が多く積もったということ「山」に比喻した表現が被験者の印象に影響を及ぼしたと考えられる。次に、P6 においては水理(50 点)、建築界(42 点)、地形(33 点)が高い出現数を占める。具体的に溪流や亭、山で構成されたイメージが多く現れており、詩文に表現されている語句「水：1 行」、「山：2 行」、「蘭亭：4 行」と関連があるといえる。

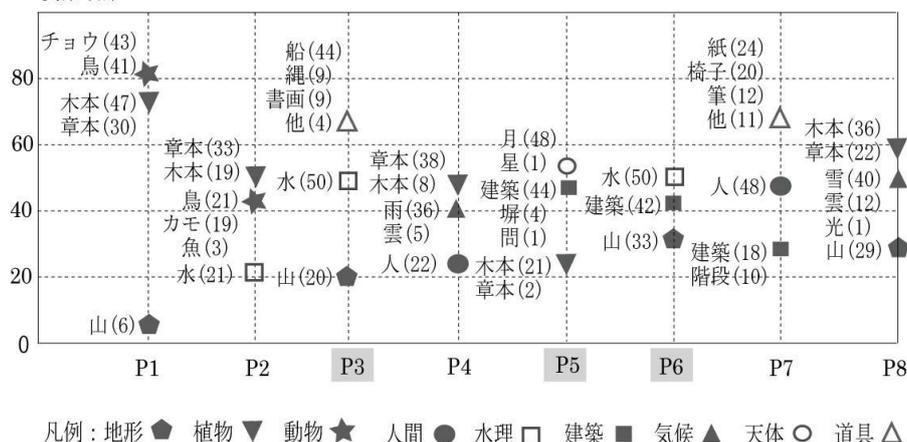
P4・5・8 はそれぞれ夏、秋、冬が季節的背景であり、雨、月、日という天象的要素が風景の印象に主要な役割を果たしている。風景イメージには生物的(植物)、天象的(気候・天体)要素が多く出現する。具体的に、P4 は草本(38 点)と雨(36 点)を主要素とした植物的(46 点)・気候的(41 点)要素の出現数が多い。また、P5 は月(48 点)と建築(44 点)を主要素とした天体(49 点)・人工(54 点)的要素が、P8 は木本(36 点)と雪(40 点)を主要素とした植物(58 点)・気候(53 点)的要素の出現数が多い。これは P4 に書かれている語句「雨：2 行」と「花：3 行」、P5 の「月：2 行」、P8 の「雪：2 行」と「木：4 行」が風景の印象に影響を与えたと考えられる。

P7 は王の前で科挙の試験を受ける儒生の姿を描写した詩文であり、風景イメージには人

〈表 4-3〉 風景イメージの構成要素の集計

詩題目	季節	地象					天象		人象			その他	合計	
		地理的			生物的		天象的		生活的					
		地形	地質	水理	動物	植物	気候	天体	人間	人工				
										建築界	道具界			
P1	望春聞鶯	春	6	2	0	84	77	4	2	4	0	0	2	181
P2	天香春晚	春	3	5	21	43	52	10	6	13	3	2	0	158
P3	魚水泛舟	春	20	8	50	16	21	7	14	17	3	66	2	224
P4	喜雨賞蓮	夏	2	3	16	3	46	41	0	22	19	7	1	160
P5	清心霽月	秋	20	5	7	3	23	19	49	15	49	4	6	200
P6	逍遙流觴	秋	33	13	50	31	25	3	12	21	42	19	1	250
P7	映花武士	春	4	1	0	0	2	1	2	48	28	67	0	153
P8	凌虚暮雪	冬	29	1	0	1	58	53	27	10	11	1	1	192

要素(点)



象的要素の出現がもっとも多い一方、要素の総出現は最も少ない。その中に、人間(48点)と紙や椅子などの道具系(67点)が多く現れ、地象・天象的要素はほとんど現れない。語句「王：2行」、「儒者：2行」、「公筆：3行」が表現され、人象的要素が多く出現したとみられる。また、壇上の椅子に座っている王のイメージが多く現れる。これは威厳と権力がある王の姿を演出するための道具として椅子(21点)が描かれたと考えられる。

以上のように、春の風景を描写した詩文では生物的要素が主要因として描かれた風景イメージが多かった。また、神仙思想がこめられている詩文の風景イメージには水理的要素を基盤にした要素の総出現数が多かった。天象的要素は植物と共に描かれて時間や季節の変化に順応する自然美が感じられた。一方、政治的行為が反映されている詩文では要素の出現が少なく、人象的要素の密集度が高く現れ、似たイメージがみられた。風景イメージは詩文の1・2行に書かれて、庭園の景物を表現する語句に直接的な影響を受ける傾向が強く、比喩的な表現や詩文に反映されている思想に間接的な影響を受けて連想されることが分かった。

3.2. 風景イメージのパターンと詩文との関係

風景イメージの構造的特性を把握するために抽出された構成要素を視点(近景・中景・遠景)別に分類・集計を行った(表 4-4 参照)。以後、それぞれの視点に当たる要素の特徴と視点間の関係を分析し、風景イメージのパターンを抽出した。視点の分類においては画面の近い部分に位置し、視対象の形態が比較的明確であり、細かい部分まで描かれたもの(鳥の足や魚の形態など)を「近景」、画面の遠い部分に位置し、スケール感が比較的小さいもの(スカイラインや天体など)を「遠景」、その間の部分を「中景」に分類した。

すべての詩文において、近景には水理(池)・動物(蝶、鳥)・植物・人間・人工(建築)的要素が複合的に分布し、中景には水理(川)・気候(雨、雪)的要素が、遠景には地形(山)・天体(日、月)的要素の出現が多く現れる。各視点に現われる要素を整理してみると、表 4-4 のパターン 1・2・3 のとおりである。

これらの視点別の要素に基づいて思い浮かべる風景イメージは、近景で構成される風景イメージ(表 4-4 のパターン 1)、近景と遠景で構成される風景イメージ(表 4-4 のパターン 4)、近景・中景・遠景で構成される風景イメージ(表 4-4 のパターン 5)の 3 つのパターンが抽出できる。

P1・2・4・7 は近景を中心に構成された風景イメージとして、画面全面に水理・動物・植物・人間・人工的要素が現れた。詩の内容をみると、春(P1.2)と夏(P4)の風景、人材を登用するために試験を行う姿(P7)が描写されている。

このような詩から思い浮かべた風景イメージは、樹木と鳥、池が春の季節感を表現しており、亭で雨が降る様子を鑑賞することが夏の風景として連想されている。また、椅子に座っている王と、その前に伏せて試験を受ける群衆の姿を通じて、緊張感が表現されている。春と夏の季節変化と政治的行為に関する風景は各々のイメージが似ている上、日常的な雰囲気を持っている。加えて、風景を構成する要素が同一の場合が多く、近景に密集して単調な風景イメージが現れる。

P5 は近景と遠景を中心に構成された風景イメージであり、地形・天体・植物・建築的要素が多く現れた。近景には建築が、遠景には山や月が描かれている。詩の内容をみると、月光によって暗い空間が明るくなっている風景が描写されている。

被験者に共通に認識された建築と山・月は、それぞれ現実と理想世界を比喩するもので、近景と遠景に配置され、各要素の特徴がより浮き彫りにされている。ここで理想世界は安定した社会と復興を享受する生活を意味し、作者(王)の政治的理想が象徴的に反映されたものといえる。つまり P5 に関する風景は、自然と人工の要素が遠景と近景に配置され、対比

〈表 4-4〉 視点別の構成要素と風景イメージのパターン

		構成要素	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	Pattern	
遠景		地形的要素	○	○	◎	○	◎	◐	○	◎	 1	
		地質的要素										
		水理的要素										
		動物的要素										
		植物的要素						○				
		気候的要素	○	○	○	○	○	○	○	◎		
		天体的要素	○	○	○		●	○	○	◎		
		人間的要素										
		人工的要素										
		他						○				
中景		地形的要素					○				 3	
		地質的要素					○	○				
		水理的要素		○	◎	○	○	◎		○		
		動物的要素	○									
		植物的要素	○	○	○	○	○	○		○		
		気候的要素				○		○		○		
		天体的要素										
		人間的要素		○	○	○		○				
	人工	建築系				○	○	○	○			○
		道具系			○			○				
	他											
近景		地形的要素						○			 5	
		地質的要素	○	○	○	○	○	○	○	○		
		水理的要素		◎	●	○	○	●		○		
		動物的要素	●	●	○	○	○	◐		○		
		植物的要素	●	●	○	●	◎	○	○	●		
		気候的要素		○	○	◐	○			◐		
		天体的要素										
		人間的要素	○	○	○	◎	○	○	●	○		
	人工	建築系		○	○	○	●	◐	◎	○		
		道具系		○	●	○	○	○	●	○		
	他			○		○						

< 凡例 >
要素の出現頻度数

Blank 0
○ 1~9
○ 10~19
◎ 20~29
◐ 30~39
● 40~

的構図を形成し、異質的で抽象的な雰囲気を表すものである。

P3・6・8は、近・中・遠景が複合的に構成された風景イメージであり、地形・気候・天体・水理・動物・植物・人間・人工的要素が現れている。近景には亭、船、人が、中景には川や溪流が、遠景には山と日が風景の構成要素として人々の印象に強く残っていることがわかる。詩の内容をみると、舟遊びをする行為(P3)、亭でお酒を飲みながら、滝を鑑賞する姿(P6)、地形が高い所で雪の降る風景を鑑賞する姿(P8)が描写されている。

詩を通じて自然が遊戯の対象だけでなく美的鑑賞の対象にされることが分かる。船の上で釣りをし、遠い山の姿を眺めるなど動のおよび静的なシーンが人々の頭の中で演出されている。具体的に、近景の人工的要素は風景の視点場になり、中景の水理的要素は近景と遠景をつなぎ、シーンの連続性を付与している。また、遠景の地理・天体的要素は画面の一番遠いところに位置し、安定感と遠近感を与えている。つまり、P3・6・8は自然美や神仙世界が感じられる詩として、風景を構成する要素の数が多く、多様であり、それぞれの要素は、近・中・遠景に組み合わせられ、総合美の特徴が現れている。

4. 小結

本章では昌徳宮後苑の美しい風景 10 景を描写した詩文「上林十景」を取り上げ、人々に思い浮かべる庭園風景のイメージを描いてもらい、詩文の意味と、風景イメージに現れる庭園要素、視点(近・中・遠景)、演出技法との相互関係から昌徳宮後苑の風景表象の特徴を考察した。その結果、以下の結論が得られた。

(1) 「上林十景」から連想された風景イメージは詩文に表現され、風景を描写する語句と、その中に反映されている象徴的な意味や思想に直接的・間接的な関係があることが分かった。

(2) 詩文に現れる自然美と象徴美は風景の構成要素、視点、演出技法と組み合わせて一つの風景イメージを作り出しており、その相互関係によって昌徳宮後園の風景パターンがみられた。

(3) 季節感が強く現れる詩文では単調で似たような風景イメージが演出され、社会の安定と繁栄が反映された詩文では対比構図による異質な雰囲気風景が演出されていることが分かった。また、神仙思想が反映された詩文は安定した構図に基づき、奥深い風景が演出されていた。

補注及び引用・参考文献

- 1) 노재현·박태희·신상섭·김현욱(2011) 기문(記文)을 중심으로 고찰한 임대정원림(臨對亭園林)의 입지 및 조영 특성, 한국전통조경학회지, Vol.29(4), pp.14~26
【Rho, JaeHyun · Park, TaeHee · Shin, SangSup · Kim, HyounWuk(2011) 記文から考察した臨對亭園林の立地および造営特性, 韓国伝統造景学会誌, Vol.29(4), pp.14~26】
- 2) 소현수(2011) 차경(借景)을 통해 본 소쇄원 원림의 구조 : 「소쇄원시선(瀟灑園詩選)」과 「소쇄원 30 영」을 중심으로, 한국전통조경학회지, Vol.29(4), pp.59~69
【So, Hyun-Su(2011) 借景からみた「瀟灑園」園林の構造 : 「瀟灑園詩選」と「瀟灑園三十詠」を中心に, 韓国伝統造景学会誌, Vol.29(4), pp.59~69】
- 3) 손용훈·함광민(2011) 창덕궁 후원의 시문분석에 의한 의경(意境)과 경관 특성, 한국전통조경학회지, Vol29(3), pp.124~133
【孫鏞勳·咸光珉(2011) 昌德宮後苑の詩文分析による意境と景観特性, 韓国伝統造景学会誌, Vol29(3), pp.124~133】
- 4) 仁天は《中庸章句》第 32 章の“肫肫其仁淵淵其淵浩浩其天”、『位育』は《中庸章句》第 1 章の“致中和 天地位焉 萬物育焉”に由来する。
- 5) 中国の宋時代に『米芾』がいつも船に書画をいっぱい詰めて『江湖』を遊覧し、後世に米芾の書画を『米家船』と言われたことで由来する。
- 6) 『廉翁』は中国の宋の時代の道学者であり、号が『濂溪』である『周敦頤』を指す。
- 7) 中国の秦時代に、『王羲之』と『謝安』など数十人の名士らが 3 月上巳日に『會稽』『山陰』の蘭亭に集まって流觴曲水の遊びをしながら詩を歌い、お酒を飲むなど、風流を楽しむことに由来する。
- 8) 한영우(2003) 昌德宮과 昌慶宮, 서울, 효형
【韓永愚(2003) 昌德宮と昌慶宮, ソウル, ヒョヒョン】
- 9) 韓国古典総合 DB, <<http://db.itkc.or.kr>>, 2013. 3. 12 参照
- 10) 高橋 進(1982) 風景美の創造と保護, 東京, 大明堂, p.37

第 5 章

扁額からみた中国・頤和園と韓国・昌徳宮後苑 空間の特徴と比較

1. 本章の背景と目的

1.1. 本章の背景と目的

扁額から庭園空間を解釈するためには、扁額の発源地であり、多くの研究がなされてきた中国の事例を調査する必要がある。また、韓国の扁額は中国の影響を受けているため、両国の扁額を取り上げ、相違点を考察し、比較する価値がある。したがって、本章では中国の頤和園と韓国の昌徳宮後苑を対象とし、扁額の意味と、扁額が掛けられている建築を結びつけ、両国宮殿庭園の特徴を比較することを目的とする。

中国では以前より扁額の研究が多くなされてきた。中国宮殿庭園扁額の意味解釈とともに漢字の語源を紹介した書籍に始まり(鈞成・成鋼、1985)¹⁾、頤和園扁額の意味を解釈した上で、空間にどのように反映されたのかを明らかにした章(1999)の研究²⁾、拙政園の扁額と柱連から意境を整理し、空間との関係性を考察した谷(2008)の研究³⁾などがある。一方、韓国では、3章で述べたように扁額に書かれている漢字の書体や刻法などに関する研究がなされている。このように中国では扁額の意味の研究や、扁額と空間を結びつけることで庭園を新たに解釈する等、意味・空間的な観点からの研究が主要である一方、韓国では扁額の意味の他には、や刻まれている文字の刻法、文様等、意味・工芸的な観点からの研究が主要である。これまでのところ、中韓両国の宮殿庭園を対象とし、扁額とともに庭園空間の特徴を比較分析した研究はみられない。

1.2. 比較の軸

比較軸は<表 5-1>のように大きく「扁額の意味」と「建築の特性」に区分する。「扁額の意味」に関しては、両園に存在する扁額の意味に反映されている思想・政治・景観の属性を把握・分析し、「建築の特性」に関しては、建築の機能と構造、規模を把握し、扁額との関係を考察する。

<表 5-1>比較の軸

比較軸	比較の内容
扁額の意味	扁額の意味に反映されている思想・政治・景観の頻度集計
建築の特性	建築の機能と構造、規模を把握

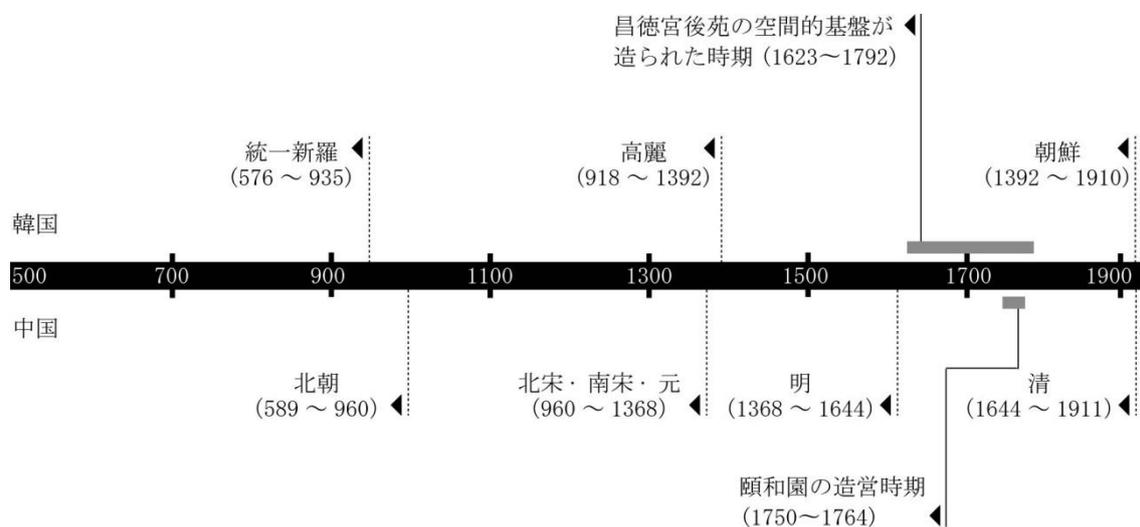
2. 研究および分析方法

2.1. 対象地選定理由および概要

2.1.1. 比較対象地の選定理由

本章では中国の頤和園と韓国の昌徳宮後苑を比較対象地とする。対象地の選定理由は以下の5点である。

- ①両国を代表する宮殿庭園であるため、当時代の水準の高い建築及び造園様式がみられる。
- ②宮苑の毀損があった際に、迅速な復元がなされたとともに保存状態が良いため、原風景の特性把握が可能である(両園：世界文化遺産に指定)。
- ③宮殿は王と王の家族、官僚、宮の管理人など、多様な身分の人が生活する所で、様々な社会文化的特徴がみられる。
- ④頤和園の修復および拡張された時期(乾隆帝：1750～1764)と昌徳宮後苑の修復および拡張された時期(仁祖、正祖：1623～1792)の差が大きくなり、比較対象として適切である(図5-1参照)。造られた造営
- ⑤両園に関する史的資料(詩・書・画)が多く保存され、資料収集が容易である。

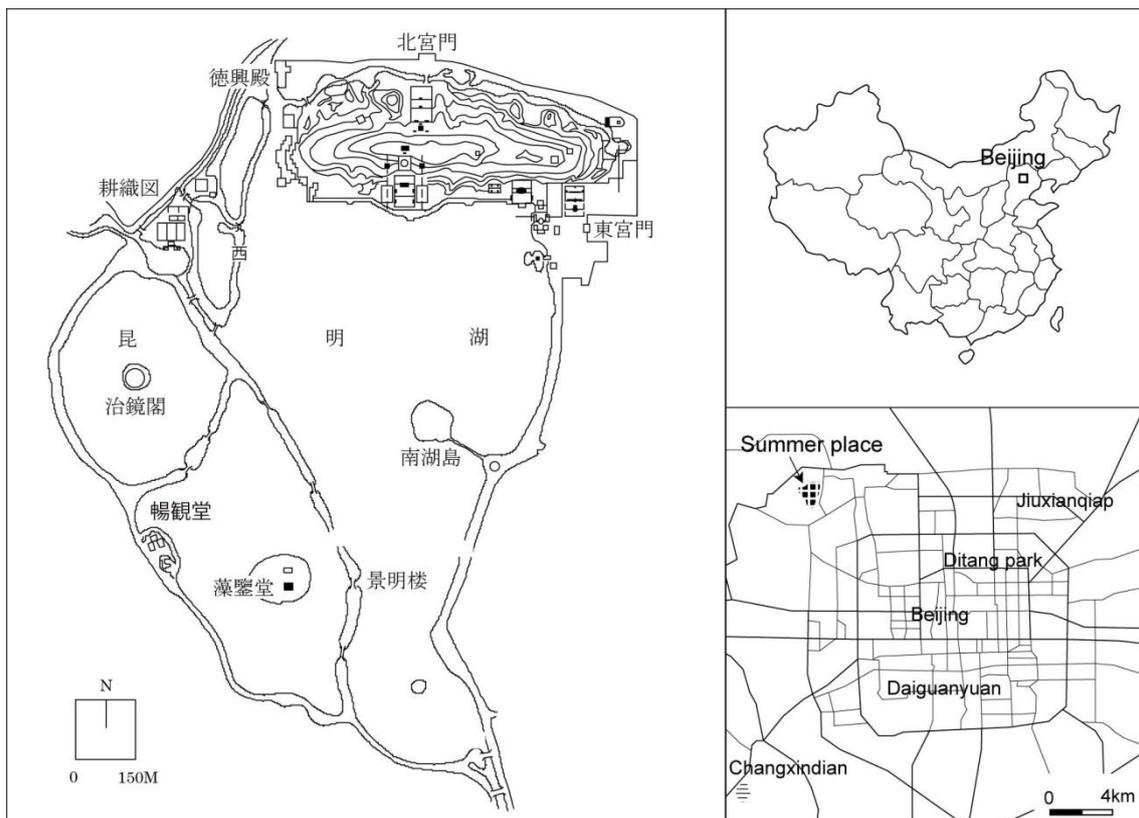


<図 5-1> 両宮園の造成時期の一覧図

2.1.2. 対象地概要

頤和園は乾隆帝(1711~1799、在位 1735~1795)15年(1750)に建設が開始され、乾隆 29年(1764)に完成された。乾隆帝は北京市北西郊海淀付近にある三つの山と五つの庭園「三山五園；萬壽山の清漪園、香山の靜宜園、玉泉山の靜明園、暢春園、圓明園」の一個所を夏の離宮に指定したが、その中にある「萬壽山の清漪園」が現在の頤和園であり、当時は「清漪園」と称された。咸豊 10年(1860)、英仏の連合軍により破壊されすべてが焼失し、現在の建築は光緒帝(1871~1908、在位 1875~1908)24年(1898)西太后により修復され、頤和園と改名された⁴⁾。

頤和園は北京市の中心部から北西約 15km 地点に位置し、風水がよい場所に位置する「三山五園」の一つである。中国皇室の夏離宮で、宮全体が庭園となっており、面積は約 290ha に達する。園内は万寿山と昆明湖を中心とし、水面は約 220ha であり、宮全体の約 75% を占めている(図 5-2 参照)。



〈図 5-2〉 中国、頤和園の位置及び平面図

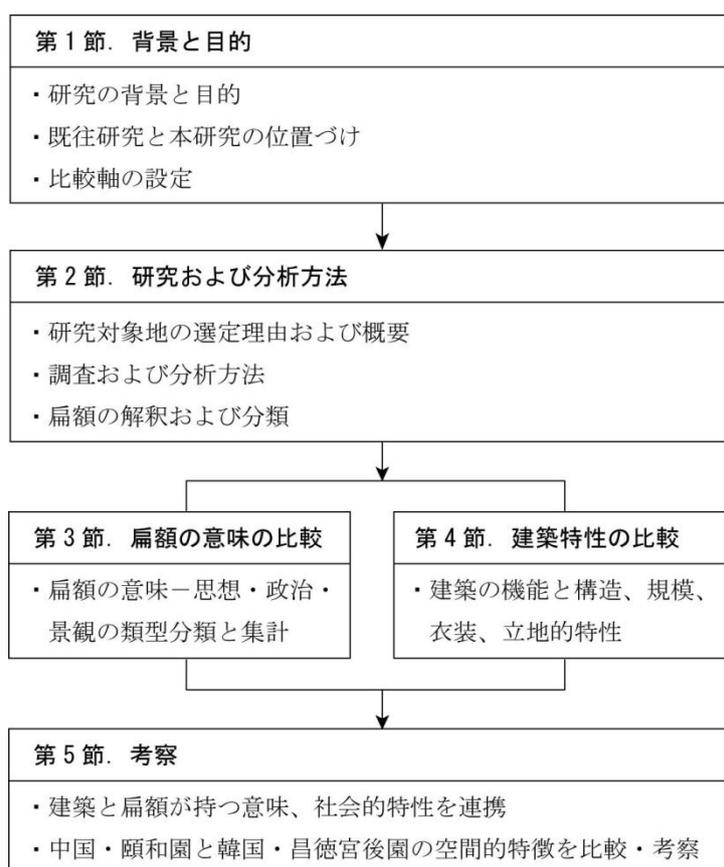
2.2. 調査および分析方法

本章は、1999年に実施した頤和園扁額のデータ⁵⁾と、筆者らが2012年に実施した昌徳宮後苑扁額のデータ⁶⁾を用い、集計・分析を行い、両宮殿庭園の空間的特徴を比較する。分析の手順としては以下の通りである(図5-3参照)。

第一に、頤和園と昌徳宮後苑の扁額に反映されている象徴的意味を分類・集計し、特性を分析する。

第二に、扁額が掛けられている建築の種類を調査・分類し、各建築に現れる扁額の象徴的意味を集計する。

第三に、扁額が掛けられている建築と扁額が持つ意味を結び付け、両園の空間的特徴を比較・考察する。

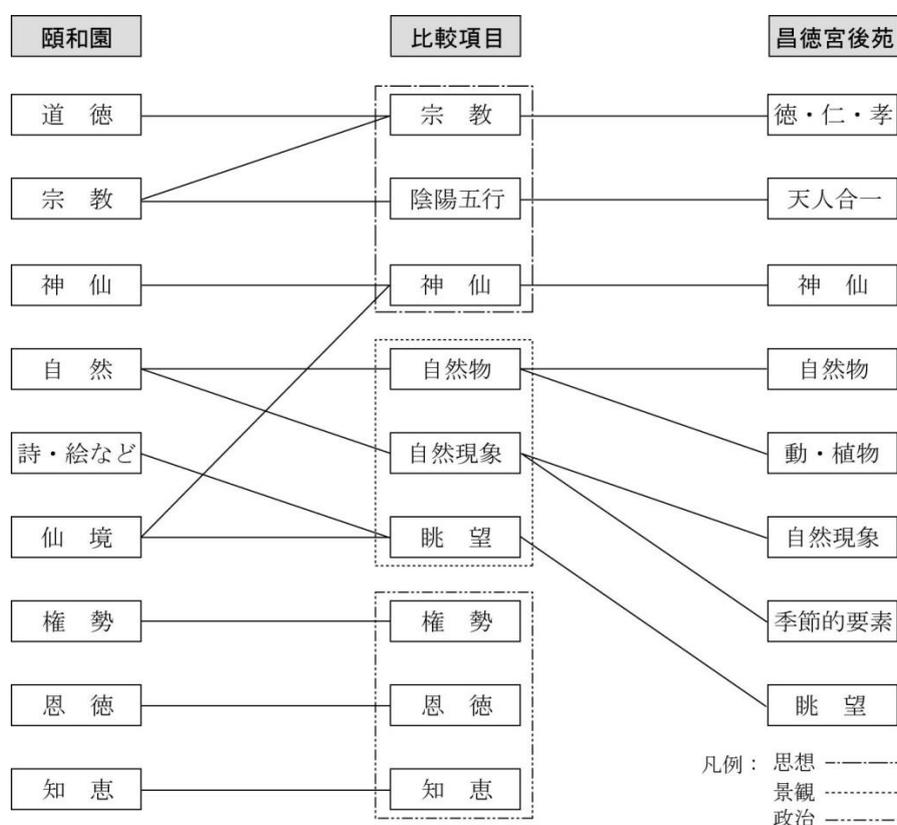


〈図5-3〉 第5章の構造

2.3. 扁額の解釈および分類

研究対象は両宮殿庭園に存在する扁額で、文献資料に記録されているが、復元されていない扁額(頤和園：14 箇所、昌徳宮後苑：4 箇所)を含むすべての扁額(頤和園：157 箇所、昌徳宮後苑：36 箇所⁷⁾)である。頤和園の扁額解釈は、漢字の直訳と意識、沿革がよく説明されている「頤和園匾額楹联解读」⁸⁾を主資料とし、頤和園の扁額と空間の特徴を考察した章(1999)⁹⁾の研究を参照する。昌徳宮後苑の扁額については、原典と意味が具体的に説明されている「宮闕の懸板と柱連 2」¹⁰⁾を主資料とし、「奎章閣韓国学研究院」¹¹⁾、「韓国古典総合 DB」¹²⁾を参照し、解釈する。

両園における扁額の比較カテゴリーは、頤和園の扁額の内容を思想的(3 つ)、芸術的(3 つ)、政治的(3 つ)背景で分類し、庭園空間の特徴を考察した章(1999)の研究を参照し、昌徳宮後苑の扁額カテゴリーで、政治的背景を加えて 3 つのカテゴリーに再構成する。さらに、類似するカテゴリーを統合及び整理し、思想(I)は儒教(I1)、陰陽五行(I2)、神仙(I3)の 3 つ、政治(P)は権勢(P1)、恩徳(P2)、知恵(P3)の 3 つ、景観(L)は自然物(L1)、自然現象(L2)、眺望(L3)の 3 つ、合わせて 9 つのサブカテゴリーに細分する(図 5-4 参照)。



〈図 5-4〉 両園の比較項目

3. 扁額の象徴的意味の抽出および割合

3.1. 扁額の象徴的意味の抽出

両園の扁額に込められている象徴的意味を思想(I1・I2・I3)、政治(P1・P2・P3)、景観(L1・L2・L3)で分類を行う(表 5-3・4 参照)。扁額に該当する各カテゴリーは<表 5-2>のように扁額の意味、時代的背景、立地および周辺空間の特徴に基づき抽出する。例えば、中国頤和園の扁額「雲郁河清」からは、‘多くの雲が集まり、黄河の水が清い’の意味が読みとれる。雲が集まる姿を描写する自然現象(L2)と黄河の水という自然物(L1)を抽出し、さらに意識から統治者により社会の安定が成り立つ恩徳(P2)が抽出できる。また、韓国昌徳宮後苑の扁額「凌虚亭」の意味は‘虚空に上がる’であり、後苑で一番高い所(標高 90m)に位置する立地的特徴が抽出できるとともに、全景を鑑賞しながら書いた詩が伝わっていることから、眺望(L3)も抽出できる。以上のように両宮園に現れる象徴的要素は<表 5-5>のように整理される。

<表 5-2> 扁額における象徴的意味の抽出方法の例

	扁額名	意味
中国 頤和園	雲郁河清	<p>多くの雲が集まり、黄河の水が清い (国は平和であり、民は幸せになることを表す。)</p> <p>L2 L1 黄河の水 P2</p> <p>雲が動く自然現象を描写 土砂のためぼやけている黄河が王の恩徳により清くなり、社会の繁栄と安定がもたらされる。</p>
	五方閣	<p>五方五智五仏の閣</p> <p>I1 「五方」は仏教の五方仏である (僧侶が心身を修行する場所である。)</p>
韓国 昌徳宮後苑	聚奎亭	<p>星が奎星で集まって来る (人才が集まって穏やかになることを表す。)</p> <p>L2 P3 P2</p> <p>優秀な人材たちの知恵発揮 星が動く自然現象を描写 乱の以後混乱した時期、人才の知恵により正しい政治の実現とともに社会安寧がもたらされる</p>
	凌虚亭	<p>虚空に上がる。</p> <p>L3 後苑で一番高い所(標高 90m)に位置し、扁額の意味と関連付けられており、宮の全景を鑑賞することができる。</p>

注：1) 扁額の解釈は引用文献 2), 12) を中心に参照。() は意識、沿革の内容を整理する。

2) I1 宗教, I2 陰陽五行, I3 神仙, P1 権勢, P2 恩徳, P3 知恵, L1 自然物, L2 自然現象, L3 眺望

〈表 5-3〉 頤和園における扁額の象徴的意味と分類

No.	扁額名	意味	建築	I1	I2	I3	P1	P2	P3	L1	L2	L3
1	仁壽殿	仁者の長寿を祈願する	殿	○		○		○				
2	大圓寶鏡	天同様全てを知り抜いている統治者	殿	○					○			
3	壽協仁符	君主は仁と寿を両方もつこと（“仁と寿”は儒教社会が目指す徳目である）	殿	○								
4	壽愷禔康	長寿、幸福、平穏安楽	殿			○		○				
5	無暑清涼	暑気がなく、涼しい	殿						○			
6	碧岫晴煙	群山の周りに雲煙が浮いている	殿								○	○
7	景星朗耀	縁起が良い星と思われる。景星が現れることは帝王の仁徳と言われる	殿				○					
8	春暉承暄	子供や廷臣は皇太后の温かい優しさを感じる	殿					○				
9	泰符協氣	天地は平和な雰囲気を表している	殿		○							
10	徳風惠霧	道徳や政治は風のように、恩徳は雨のように恵を与える	殿				○	○			○	
11	減澤旁敷	皇帝の恩徳は広がっていく	殿					○				
12	海涵春育	海はたくさんの川の水を受け入れるよう、春はすべてのものを育成できるよう願う	殿					○	○	○	○	
13	霞芬室	湖岸の蓮は霞のように咲いている	殿	○						○	○	
14	和風春穆	暖かい風が新鮮である（殿堂東側の松や竹が揺れる有様から、風の変化を感じられ、静かで洗練された環境を表す）	殿			○			○		○	
15	藕香榭	蓮の花を觀賞するところ（“借景”という造園手法を表現した最も良いところである。“玉泉山”や“西山”の借景です）	殿	○						○		○
16	日月澄輝	日月の輝き	殿								○	
17	頤樂殿	頤樂殿	殿			○						
18	戴日勝愉	全ての人々が太陽の下、くつろぐ：太陽の光に当たった場所は全て皇太后の誕生日を祝福する	殿					○			○	
19	榮鏡登閎	明るく、非常に高い（君主は聖なることを隠喩する）	殿				○					
20	穰福申猷	福祉を祈り、王道を施す	殿						○			
21	煥焯珍符	縁起が良いことを表す	殿						○			
22	春陶嘉月	春の季節折、遊びにいくこと	殿			○					○	
23	郁繞祥氣	庭園内は吉祥の雰囲気であふれる	殿				○					
24	雲錦殿	雲錦のような華やかな殿堂	殿				○					
25	祥映昌基	瑞光は隆盛な事業を照らす：「昌基」隆盛な事業	殿				○	○				
26	聖膺嘉佑	皇帝が神様に加護される聖：帝王 膺：もらう 「嘉佑」天の加護	殿				○					
27	玉華殿	美しい玉で作る仙境のような殿堂（「玉華」最も精緻で美しい玉。食べたら神仙になって長生できる玉屑）	殿			○	○					
28	珠緯聯輝	水、金、火、木、土星の5つが同時に一方向に現れる吉祥の前ぶれ	殿		○		○					
29	四海承平	争いの起こらない平和な世の中	殿				○					
30	大圓宝鏡	君主は大圓明鏡のような聖賢明徳、一切を洞察できる	殿	○					○			
31	恩降百祥	皇家が恩恵を施して、天は様々な祥瑞を与える	殿				○	○				
32	蕃厘經緯	皇太后は合理的に国を治めて、御蔭がついている	殿						○			
33	万方静謐	世界は平和である	殿					○	○			
34	永固鴻基	王朝の事業は永遠に強固だ	殿				○					
35	天楽人和	皆融和している天上界	殿	○								
36	鳳藻騰文	立派な文藻、才能に溢れた文章	殿						○			
37	芳輝殿	美しく輝く殿：「芳輝」常に月や仙界の光を指す、ここは天宮仙境であると暗示する	殿				○				○	

38	光綯春華	文辞が春の花のように絢爛である、「光綯」帝王の昭令または書道が輝かしい、「春華」春の花	殿				○					○
39	齊榮敷芬	草花が一斉に咲き、繁栄する	殿					○				○
40	懐遠以德	辺境に仁徳で落ち着かせ慰める	殿	○						○		
41	登祥薦祉	吉祥を献ずる、福瑞が降り注ぐ、「登祥」吉祥を献ずる、「薦祉」福瑞を降る	殿						○	○		
42	仁沾動植	仁徳を動物と植物に施す	殿							○		
43	徳暉殿	徳政が輝く殿：「徳暉」仁徳の輝き	殿				○					
44	敷光榮慶	聖恩があまねく照らす：「敷光」あまねく照らす：「榮慶」光栄で幸せ	殿					○	○			
45	春和元氣	天地の元気が春の暖かみを生み出す。「元氣」帝王の恩徳は天下の福祉の源であると喩える	殿					○	○			○
46	邵窩殿	邵という哲学者の安楽窩	殿				○					
47	貴寿無極	万寿無疆：富貴と寿は限りがない：ここは慈禧が劇を見る時休憩、更衣と食事の場所である	殿				○					
48	臨河殿	河に臨む殿	殿									○
49	臨河殿内	河に臨む殿の内	殿				○	○				○
50	玉蘭堂	波を觀賞する堂（玉瀾”は近い場所で、低視点から大きな水面を見る感覚である）	堂									○
51	複殿留景	太陽の下に立ち並んでいる殿堂の影を映す	堂				○	○				○
52	樂壽堂	仁者が楽しく、長生きする堂	堂				○					
53	淵芳馥風	良い評判が風のように広がっていく：帝王の恩徳をたどる	堂						○			○
54	舒華布實	開花と結実（花木の青々とした有様は皇朝の繁栄をたどる）	堂					○	○			○
55	潤壁懷山	山に美しい玉を埋蔵するかげで輝きになる	堂									○
56	仁以山悅	山を楽しむ仁者	堂									○
57	景福來並	降臨する大いなる福	堂						○			
58	水木自親	目や心を楽しませる山水樹木	堂				○					○
59	雲和慶嬉	お祝いの曲を奏でる	堂						○			
60	慈暉懿祉	太后の輝きと福を受ける	堂						○			
61	寄瀾堂	水を見て、波に気持ちを寄せる	堂				○					○
62	晴川藻景	絵のような晴天の美しい水面	堂									○
63	詞林春麗	全ての言葉はこの春のような日を賛美している	堂									○
64	德音惟馨	仁君の声誉（名声）が美しくて芳しい	堂					○		○		
65	經道緯徳	道徳は社会状況を管理する規律	堂									
66	輝音峻舉	帝王が下した命令は湖の水面を通った風のように、広々として、遠くまで至る	堂					○		○		○
67	拱辰握景	北極星が群星に取り囲まれ、神様に権力を与えられたように、君主は神聖で開明である	堂				○					○
68	軒図瑞雋	空に彩雲と祥瑞の現象を見せる	堂									○
69	絢霞綺月	霞は華やかで、月光は美しい	堂									○
70	松春齋	長寿の齋	堂				○					
71	知春堂	春の息吹きを感じる堂	堂									○
72	涵遠堂	四海と天を含める堂	堂						○			
73	履徳之基	礼は徳の基である	堂	○								
74	仏香閣	仏陀が理想とする第一の閣	閣	○								
75	式揚風教	風俗と教化をもって宣揚する	閣	○								
76	氣象昭回	広大無辺な世界が鮮やかに輝く。「氣象」人世を予知している雲気天象。「昭回」星の光は天にとともに回る	閣							○		○

122	鞞可征	湖水が透明で、鏡のように映し出すことは、人が自覚できることをたとえる	亭							○	○		
123	芳風詠時	風が吹いていることは美しい季節をたとえる	亭						○				○
124	斧藻群言	皆が言ったことを集める	亭							○			
125	雲郁河清	たくさんの雲が集まり、黄河の水が清い（平和と繁栄、縁起が良いことを起きるよう）	亭						○		○	○	
126	俯鏡清流	鏡のように清らかな湖の水を見下ろす	亭								○		○
127	凌雲抗勢	雲に乗って高く飛ぶ様子：庭の太湖石の高く険しい有様を示す	亭					○				○	○
128	敷華就実	花が咲き、実をつける	亭								○		
129	花雪表年	瑞雪は豊年の兆し。「花雪」霰も呼ばされ、形は六角。古人は吉兆だと思ふ	亭						○	○			
130	化動八風	儒家の徳の音楽は人の心を感動させ、風俗を教化する	亭	○									
131	咏仁蹈徳	歌舞によって徳政を発揚する	亭	○									
132	重翠亭	重なる山と緑の亭	亭								○		
133	尋雲亭	雲霧の景色を觀賞する亭	亭									○	○
134	觀生意	万物の生氣を觀賞する	亭										○
135	敷華	花はすくすく伸びている	亭								○		
136	攏秀	きれいな景色を全部取る	亭			○					○		
137	緑畦亭	緑の田んぼが見える亭	亭								○		○
138	小有天	道家の神仙の洞府の名前	亭			○							
139	知春亭	春の息吹きを感じる亭	亭									○	
140	知春亭	春の息吹きを感じる亭	亭									○	
141	飲緑	碧水の美しさを楽しむ	亭								○		○
142	蘭亭	中国の有名な亭	亭							○			
143	頤和園	健康の維持、晩年を楽しめる庭園	門			○		○					
144	徳和園	儒家は音楽を通して良い道徳を影響する庭園である	門	○									
145	万象光昭	天下の万物は明かり限りない	門					○	○				
146	多祉攸集	多様な祥瑞をここに集める	門					○	○				
147	万寿無疆	長寿無窮	門			○							
148	導養正性	生来公平正直な本性を療養する	門	○									
149	澄瑩心神	精神を清浄潔白にする	門	○									
150	浮嵐暖翠	雲気が青々とした山と川になびいている。「浮嵐」なびいている雲気、「暖翠」晴れの時山の青色	門								○	○	○
151	貝闕	龍宮のように華やかである	門					○					
152	靈岩霞蔚	古刹（古い寺）の気象は壯観で、湖の島の間に雲を巻いて、霞が湧き出る	門								○	○	○
153	澤普如春	雨と露（恵み）が天下に降る、春雨のように時宜にかなった様	門							○		○	
154	蘭馨秀菊	皇太后は蘭と菊のように芳しくて麗しい	門								○		
155	鳳策揚輝	光り輝く皇太后の決策	門							○			
156	益寿堂	寿命を延びる堂	門			○							
157	諧趣園宮門	淡泊の志向に合う庭園	門										○

注： I1 宗教、I2 陰陽五行、I3 神仙、P1 権勢、P2 恩徳、P3 知恵、L1 自然物、L2 自然現象、L3 眺望

〈表 5-4〉 昌徳宮後苑における扁額の象徴的意味と分類

No.	扁額名	意味	建築	I1	I2	I3	P1	P2	P3	L1	L2	L3
1	映花堂	花と調和される、周辺に花がたくさん咲いて景色が美しいという意味、上林十景中の一つ：映花試士	堂							○		
2	演慶堂	喜び事が大きく広がる（祝いを行う家）	堂				○	○				
3	書香閣	本の香りがある家（本を乾かした所で、本から出る特有のにおいを香りで美化）	閣	○					○			
4	親鸞勸民	王妃が直接蚕を飼って民たちに勸奨する	閣					○				
5	清水精舎	清い水が曲がっているところで精神を修養する。「精舎」は学問を研究する家、精神を修養する家を意味する	閣	○						○		
6	善香齋	良い香りがある家、本を保管する所だったため、良い香りは本の香りを示す	齋	○								
7	寄傲軒	寛大な心を施す	軒					○				
8	宙合樓	天地が一つになって自然の理により、政治をする、「宙合」は「六合」、上下と四方を示し、天地を意味する	樓	○						○		
9	逍遙亭	自由にゆったり遊ぶ、上林十景中の一つ：逍遙流鶻（水にさかずきを浮かべ飲みながら詩を作る楽しさを示す）	亭			○				○		
10	太極亭	太初の混沌とした元気	亭		○							
11	清漪亭	清い波（水が清い）、四角形態の基壇と丸い屋根をしている亭の姿は天圓地方の思想に根拠	亭		○					○		
12	聚奎亭	星が奎星で集まって来る（星が集まって来るということは人才が集まって来て穏やかになるということを意味）	亭					○	○		○	
13	尊徳亭	徳を高める	亭	○								
14	清心亭	心をきれいにする。煩雑なことが嫌でたおやかなことを求める朝鮮土の心が表現されている	亭	○								
15	喜雨亭	干ばつが終わって甘雨が降って喜ぶ	亭					○			○	
16	凌虚亭	虚空に上がる、精神世界が世俗を超越するという意味、上林十景中の一つ：凌虚慕雪（日の暮れの雪が降る風景）	亭			○						○
17	愛蓮亭	蓮華を愛する、蓮華は汚い所にありながらも変わることなく、清くてきれいな君子の徳を持つ	亭	○						○		
18	翠寒亭	青くて冷ややかだ（青い森に囲まれて冷ややかだ）、松が多くて夏にも寒さを感じるほどであった	亭			○				○		
19	芙蓉亭	蓮華、亭の前に「連池」という池があり、蓮華が茂ったため名前を変えた（澤水齋、1707 → 芙蓉亭、1792）	亭	○						○		
20	砭愚榭	愚かさを正す徳を高めなさい、「砭」は「鍼」を意味し、鍼を打って病気を治療するという意味を含んでいる	亭	○								
21	濃繡亭	美しい景色を成す	亭									○
22	霽月光風觀	雨晴れた後の明るい月明りと清い風、明快できれいな人柄を比喻し、世の中がよく穏やかになった状態を比喻	亭	○							○	
23	魚水門	王様と臣下が水と魚のように心が一つになる、王と臣下の関係を水と魚に比喻し、親しい間を現わしている	門						○	○		
24	金馬門	鉄で作った馬（中国の漢時代の宮門の名前。また、国家で本を管理した所の名前である）	門	○								
25	不老門	老けない（この門を通過する人が老けなく、長い間暮しなさいという念願が盛られている）	門			○						
26	長楽門	長い間楽しむ（王様が賢明な政治をして長い間幸せを享受しなさいという念願が盛られている）	門			○			○			
27	長陽門	長い間日が入る（男性の空間と繋がる門で、「陽」は男性、空など陽気を意味する）	門	○		○						
28	修仁門	仁を磨く（女性の空間と繋がる門で、女性は輦軒に乗らないので、門の高さが長楽門に比べて小さい）	門	○								
29	佑申門	天が国を継続して助ける	門	○					○			
30	通碧門	青い所を通じる、「壁」の意味は青い山や神仙が住む城を示す	門			○				○		
31	太一門	「太一」は道家的用語として宇宙万物の本源を意味し、悟ることの境地に至って万物が一つになることを言う	門	○								
32	正秋門	盛んに熟した秋	門								○	
33	韶陽門	明るくて美しい春光	門								○	○
34	允正門	心が正直で正しい、方位では西の方を現わして‘兌’は秋を表現している	門	○							○	
35	紹休門	聖人の立派な業績を受け継ぐ	門	○								
36	建武門	武を崇める、「武」は五行で北の玄武を示すので北門の名前に用いた	門		○							

注：I1 宗教、I2 陰陽五行、I3 神仙、P1 権勢、P2 恩徳、P3 知恵、L1 自然物、L2 自然現象、L3 眺望

〈表 5-5〉 扁額の象徴要素

	カテゴリー	象徴要素
中国 頤和園	宗教 (I1)	五方五智五仏, 五経, 仏寺, 仏陀, 儒家, 仁徳
	陰陽五行 (I2)	金・水・木・火・土の五行
	神仙 (I3)	長寿, 寿命が延びる, 太平, 安寧
	権勢 (P1)	太陽, 玉, 非常に高い, 天下, 龍宮, 帝王の命令, 光る
	恩徳 (P2)	幸福, 平穏, 安楽, 平和, 恩徳, 光に当たる, 繁栄, 良い評判, 水が清い
	知恵 (P3)	縁起が良い, 賢明な, 合理的, 意見を集める, 吉兆が集まる
	自然物 (L1)	川, 水, 波, 蓮, 山, 草木, 湖, 花, 蘭, 桂
	自然現象 (L2)	雲, 風, 雨, 雪, 煙, 光, 影, 夕日, 夕方, 月光, 春, 秋, 音, 露, 霞
	眺望 (L3)	ある対象や自然風景を描写 - 浮いている, 観賞する, 見る, 雲に覆われる, 見下ろす
韓国 昌徳宮後苑	宗教 (I1)	徳, 仁, 修身, 聖人, 正直, 君子, 蓮華, 男尊女卑
	陰陽五行 (I2)	太初の元気, 五行
	神仙 (I3)	ゆっくり遊ぶ, 老けない, 虚空に上がる, 長い間楽しむ, 長時間光が入ってくる
	権勢 (P1)	喜び事が広がる
	恩徳 (P2)	穏やかになる, 雨が降る, 天が国を助ける
	知恵 (P3)	人才が集まる, 本の香り, 王と臣下の心が一つになる
	自然物 (L1)	花, 水, 波, 蓮華, 松, 池, 森
	自然現象 (L2)	星, 雨, 風, 春光, 秋
眺望 (L3)	ある対象や自然風景を描写 - 雪が降る風景, 美しい景色を成す	

3.2. 扁額の象徴的意味の割合

このような方法で扁額の象徴的意味を抽出し、割合を表したものが〈表 5-6〉である。母数においては、1 つの扁額に複数の象徴的意味を含む場合もあるため、その数を合算(頤和園：n=276、昌徳宮後苑：n=56)し、算出を行った。

頤和園の扁額では、思想(I)が 20.6%、政治(P)が 35.9%、景観(L)が 43.5%に達し、景観と政治の背景が反映されている扁額が多く現れる。具体的に景観の中では、雲、風、光、秋などの自然現象(L2)と、湖、山、花などの自然物(L1)、風景を描写する眺望(L3)がそれぞれ 17.0%、15.6%、10.9%と、自然現象(L2)と自然物(L1)が高い割合を占める。政治の中では、天神や統治者による民生の安定と繁栄をのぞむ恩徳(P2)が 13.8%で高く現れ、権勢(P1)11.6%、知恵(P3)10.5%も同程度で現れる。思想の中では、延命・長寿を示す神仙(I3)が 10.5%、宗教(I1)が 9.4%に達する。

昌徳宮後苑では、思想(I)が 48.3%、政治(P)が 19.6%、景観(L)が 32.2%であり、思想と景観の内容が反映されている扁額が多く現れる。具体的に思想の中では、徳、仁、修身な

〈表 5-6〉 カテゴリー別の扁額の分布

対象	項目	思想 (I)			政治 (P)			景観 (L)		
		I1	I2	I3	I1	I2	I3	I1	I2	I3
中国 頤和園	カ	57(20.6)			99(35.9)			120(43.5)		
	サ	26(9.4)	2(0.7)	29(10.5)	32(11.6)	38(13.8)	29(10.5)	43(15.6)	47(17.0)	30(10.9)
韓国 昌徳宮後苑	カ	27(48.3)			11(19.6)			18(32.2)		
	サ	17(30.4)	3(5.4)	7(12.5)	1(1.8)	6(10.7)	4(7.1)	10(17.9)	6(10.7)	2(3.6)

注：1) 単位：点(%)，頤和園 (n=276)、昌徳宮後苑 (n=56)

2) カ：カテゴリー、サ：サブカテゴリー

3) I1: 宗教, I2: 陰陽五行, I3: 神仙、P1: 権勢、P2: 恩徳、P3: 知恵、L1: 自然物、L2: 自然現象、L3: 眺望

どの儒教の理念を志向する宗教(I1)が 30.4%で、神仙(I3)12.5%と陰陽五行(I2)5.4%に比べ、特に高い割合を表している。景観の中では、花、松、池などの自然物(L1)が 17.9%、星、雨、風などの自然現象(L2)が 10.7%、眺望(I3)が 3.6%で、自然物(L1)と係わる扁額の意味が多く現れる。政治の中では、恩徳(P2)が 10.7%、知恵(P3)が 7.1%に達する一方、権勢(P1)1.8%で、多少低い割合を占める。

4. 各建築における扁額の分布

中韓の宮殿庭園においては、多くの建築が存在し、その機能と目的により形態と名称が異なっている。本節では扁額が掛けられている建築の種類を分類し(頤和園：13、昌徳宮後苑：7)、それに属する扁額のカテゴリー別の頻度を集計し、その分布を確認する。

建築は両宮殿庭園に共通で存在する「堂」、「閣」、「齋」、「軒」、「楼」、「亭」、「門」と、頤和園に存在する「殿」を含む 8 種に限ることとする。中国の伝統建築における「殿」は壮大な廊邸、宮殿、仏殿、神殿などを指し、皇家庭園の屋宇には、最も多く使われている。また、頤和園においても「殿」の箇所が多く、扁額と庭園空間の特徴を明らかにするのに重要な要因になると判断したため「殿」を研究対象に含むことにした。一方、昌徳宮は外朝(臣下たちが執務する空間)、治朝(王と臣下が政治を行う空間)、燕朝(王と王妃及び王室家族の生活空間)、後苑(宮の庭園)の 4 つのエリアに分けられて使われており、殿は治朝エリアに分布しているため、後苑では現れない。

頤和園において扁額が掛けられている建築は、殿(31.2%)、亭(19.7%)、堂(15.3%)で高く現れ、閣、齋、軒、楼、門では相対的に低い割合を表す。殿に掛けられている扁額の象徴的意味をみると、政治の権勢(P1)が 18 点、恩徳(P2)16 点、知恵(P3)12 点で高い頻度を占めており、景観の自然現象(L2)が 11 点と、高く現れる。閣の扁額には、宗教(I1)的意味が反映されている扁額が 5 点であり、堂、齋、軒、楼、亭、門においては、景観と係わっている扁額が多く現れる。とくに亭で、景観の自然物(L1)が 14 点、政治の知恵(P3)が 8 点ときわめて多いことが指摘される(表 5-7 参照)。

一方、昌徳宮後苑において扁額が掛けられている建築は、亭と門が同率で 38.9%と高く現れ、堂、閣、齋、軒、楼では相対的に低い割合を示す。亭に掛けられている扁額の象徴的意味をみると、思想 11 点と景観 10 点で高い頻度を占めており、そのうち、宗教(I1)6 点、自然物(L1)5 点と多く現れることが特徴である。門の扁額には、思想(12 点)がきわめて高く現れ、そのうち、宗教(I1)7 点、神仙(I3)4 点と多くの頻度を占めている。また、閣と齋では思想、堂と軒では政治的な意味が反映されている扁額が現れる(表 5-7 参照)。

以上をまとめると、頤和園における扁額が掛けられている建築は殿、堂、亭で多く、殿には統治者の権勢、恩徳、知恵の政治的背景が主に反映されている。堂、齋、軒、楼、亭には景観的特徴と関連付けられている扁額が多く、政治的背景と重なって現れることが特徴である。昌徳宮後苑においては、亭と門に掛けられている扁額が多く、閣、齋、楼、亭、門を中心に思想的背景が反映されている扁額が見られる。そのうち、閣、齋、門は政治的背景と、楼と亭は景観的特徴と重なって現れることが特徴といえる。

〈表 5-7〉 各建築における扁額の象徴的意味の頻度

対象	No.	建築物 / 軒 (%)	項目	思想 (I)			政治 (P)			景観 (L)		
				I1	I2	I3	P1	P2	P3	L1	L2	L3
中国 頤和園	1	殿 /49 (31.2%)	カ	18			46			19		
			サ	8	2	8	18	16	12	6	11	2
	2	堂 /24 (15.3%)	カ	9			11			23		
			サ	3	-	6	4	5	2	8	8	7
	3	閣 /10 (6.4%)	カ	6			4			4		
			サ	5	-	1	-	3	1	1	3	-
	4	齋 /6 (3.8%)	カ	1			2			7		
			サ	-	-	1	-	2	-	2	3	2
5	軒 /15 (9.6%)	カ	3			4			15			
		サ	1	-	2	1	-	3	5	6	4	
6	楼 /7 (4.5%)	カ	3			1			9			
		サ	1	-	2	1	-	-	4	2	3	
7	亭 /31 (19.7%)	カ	5			17			31			
		サ	3	-	2	5	4	8	14	8	9	
8	門 /15 (9.6%)	カ	6			8			9			
		サ	3	-	3	2	3	3	3	4	2	
韓国 昌徳宮後苑	1	殿 / -	カ	-			-			-		
			サ	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	2	堂 /2 (5.6%)	カ	-			2			1		
			サ	-	-	-	1	1	-	1	-	-
	3	閣 /3 (8.3%)	カ	2			2			1		
			サ	2	-	-	-	1	1	1	-	-
	4	齋 /1 (2.8%)	カ	1			-			-		
			サ	1	-	-	-	-	-	-	-	-
5	軒 /1 (2.8%)	カ	-			1			-			
		サ	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
6	楼 /1 (2.8%)	カ	1			-			1			
		サ	1	-	-	-	-	-	1	-	-	
7	亭 /14 (38.9%)	カ	11			3			10			
		サ	6	2	3	-	2	1	5	3	2	
8	門 /14 (38.9%)	カ	12			7			5			
		サ	7	1	4	-	1	2	2	3	-	

注：1) カ：カテゴリー，サ：サブカテゴリー

2) I1 宗教, I2 陰陽五行, I3 神仙, P1 権勢, P2 恩徳, P3 知恵, L1 自然物, L2 自然現象, L3 眺望

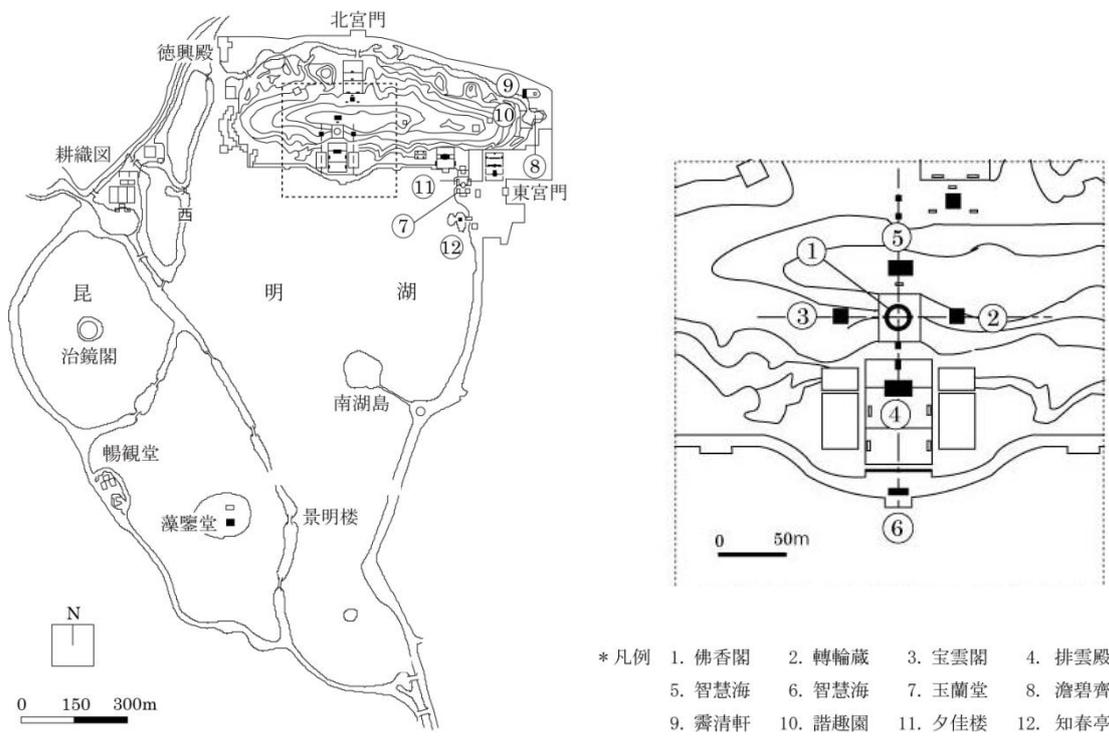
5. 扁額からみた頤和園・昌徳宮後苑空間の特徴と比較

扁額が持つ象徴的意味と扁額が掛けられている建築の機能や立地および空間特徴を結びつけ、両宮殿庭園空間の特徴を比較する。考察は扁額に反映されている象徴的意味と建築特性を考慮し、下記のように3つに分けて行う。

5.1. 殿・堂・閣における庭園空間

中韓の伝統建築において、殿と堂は壮大で比較的高層で構成されており、政治的行事を行うなど、公的な性格が強い建築である(表 5-8 参照)。頤和園の排雲殿に掛けられている扁額「雲錦殿」の意味は「雲錦のような華やかな殿」である。排雲殿は豪華な意匠と金色の屋根で構成され、強い王の権勢(P1)が感じられ、扁額の意味と連関性が高いと考えられる。また、堂、閣、軒、門の中心部に位置し、殿の荘厳な雰囲気が一層色濃い(図 5-5 参照)。堂には、景観的特徴と関連付けられている扁額が多く(23点)現れる(表 5-7 参照)。扁額「玉蘭堂」は「波を觀賞する堂」を意味し、波(L1)に注目して自然風景を眺望(L3)することを意図している。地理的には昆明湖の東岸に接し、湖を鑑賞するに相応しい場所であり、建築が立地する場所と密接な関係があると考えられる(図 5-5 参照)。閣には、思想的背景と関連付けられている扁額が多く(6点)現れる(表 5-7 参照)。扁額「佛香閣」は「佛陀が理想とする第一の閣」を意味し、仏教思想(I1)と佛閣の重要性が扁額の意味から伝わる。佛香閣は雲錦殿の北側山頂(60m)に聳えており、高さ38mの八角三層四重の建築である(図 5-6 参照)。東西には轉輪藏(閣)、宝雲閣、南北には排雲殿、智慧海(殿)が配置され、佛香閣を中心に対称的空間構図を形成している(図 5-5 参照)。扁額の内包する意味が、第一の閣と対称構図により強調された佛香閣の空間的特徴によく現れている。

昌徳宮後苑における堂には、政治的背景が反映されている扁額が(2点)現れる(表 5-7 参照)。扁額「演慶堂」は「喜び事が広がる」を意味し、王の恩徳(P2)が広がって民生が安定する意味も内包している。この堂は祝い事を祝うために立てた120間の民家形式の家で、前面に水が流れて後方には山が存在する朝鮮時代の明堂の条件を取り揃えている。演慶堂が造成された当時は、寵臣たちの強い権勢により王の権勢が弱化された時期で、格が高い建物を建て、王の権勢回復(P1)を間接的に表現したと考えられる。即ち、演慶堂は王の政治的意志が反映された空間といえる。閣には、思想・政治的背景が反映されている扁額が各々2点現れる(表 5-7 参照)。扁額「書香閣」は「本の香りがする閣」を意味し、王が執筆した書籍や肖像画を乾かす所である。立地的には講学を行う宙合楼の東側に建てられており、地上から約7m上のため、風通りが良い(図 5-10 参照)。本を乾かす際に出る特有のにおいを香りという表現で美化して建築の機能を間接的に示し、本から知恵(P3)を得て正しい政治実現を目指す儒教思想(I1)の特徴が見られる。



〈図 5-5〉 頤和園・佛香閣エリアの細部平面図

以上、頤和園において殿は、最も多く存在する建築であり、壮大な規模と華麗な意匠の建築様式が、王の政治的理想が反映された扁額と結び付けられ、謹厳な空間をつくり出している。また、堂は湖岸や山林が豊かな所に立地し、波、湖などの自然物と、光、影、月光などの自然現象を鑑賞する場所として、扁額の名称を積極的に反映した特徴が現われている。一方、昌徳宮後苑において堂では、王の権勢が弱体化された時代的背景により、王の権勢回復や民生の安定・繁栄を望む政治的理想が建築と周辺空間の特徴と関連付けられていることがわかる。両宮殿庭園で閣は、主に殿と堂の周辺に位置し、建築の機能を支えることにおいては、類似しているといえる。さらに、頤和園では対称的空間配置を通じて仏教思想の尊厳性を強調させ、昌徳宮後苑では学問と礼儀を重視した儒教思想の特色が見られたことが相違点といえる。

〈表 5-8〉 両国における伝統建築の機能および特徴

	建築	内 容
中国	殿	壮大な廊邸、宮殿、仏殿、神殿などを指し、皇家庭園の屋宇には、最も多く使われている。
	堂	前向きにしておく、という意味でこれを“堂”と呼んだ。又“当たる”ということの意味し、正面の陽の当たる家屋で、正々堂々、高々と表て向きに建てる意味にもとられる。
	閣	四方に阿をしきり、窓が開いている建築である。柱が 4 本で戸や窓が四方に開くと解説し、中国では元々棧閣とって、階段をつけて登る高段のことである。
	齋	堂に比べると奥まって気分を引き締める意味をもつ、“齋”と呼ぶことで人に肅然と襟を正しめさせるものがある。いわば修養読書所とし、その地を選んで建てるため、その建て方も、けばけばしくしてはいけない。
	軒	軒の図式は、車の軒軾に似て、軒として挙がっていく意味である。高く明けはなされた所に設けて、目立たせるように注意してある。現代では簡単な建築或は小室の意味に解され、廳や堂に比べて副次的な建築で、それらより小さく開放的なものになっている。
	樓	説文では屋を重ねることが、“樓”であると解く。窓が開いており、いくつもの通光孔が綴られているように見えるからである。その建て方は層一層、高々と望まれるようにすることと説かれている。樓は月を見るため、軒の短いものを樓と呼ぶ。
	亭	遊びに出て憩い停るところを指す。亭の形はさまざまで、簡単な構造である。
韓国	殿	建物の中、柄が一番高い建物、王と王妃、王の母が使うことで、行事等の功績な活動を行う建築である。
	堂	殿より柄が一段階低い建物、日常的な活動空間で使用する。
	閣	殿と堂の付属建物である。
	齋	王の家族や宮殿で活動する人々が主に使う建物、読書や思索をする用途で使われ、日常的な活動より功績な活動をする場合が多い。
	軒	意匠技術や飾りが多くない素朴な形態をしており、静かに読書や修養をする。
	樓	大きい亭子の形態をし、樓の底が地面から一人高さぐらい差がある。
	亭	池の周囲や小の周囲、また景観が良い所に休息や宴会空間で使う小さな建築である。

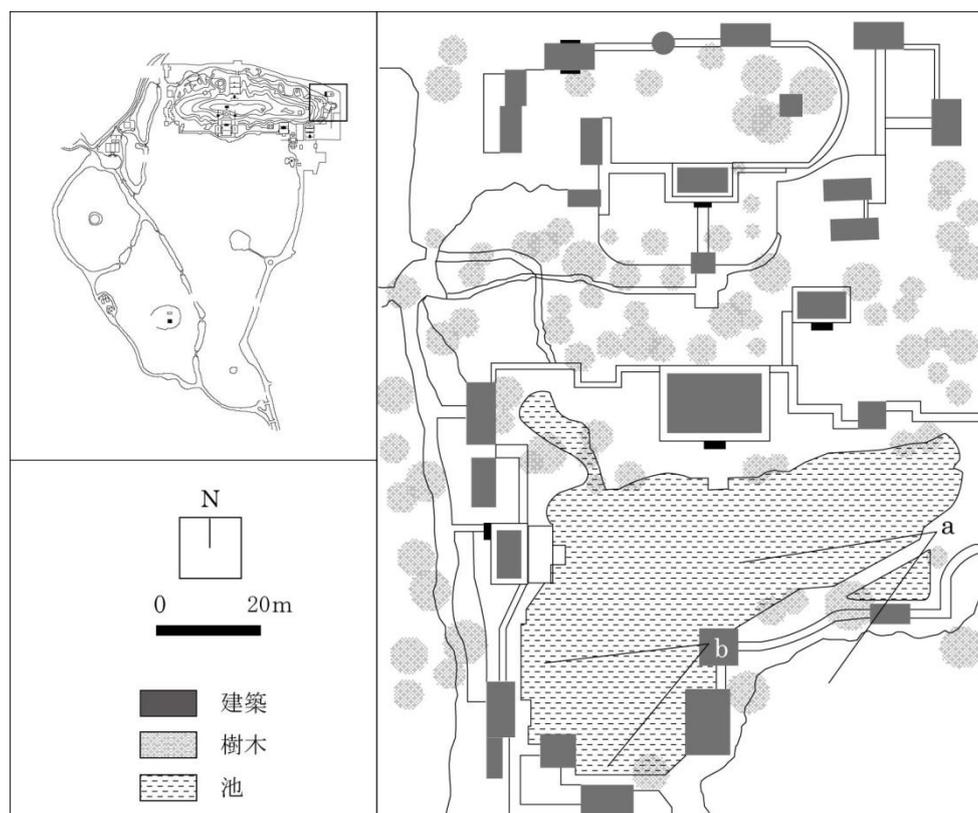
資料：章(2000)¹³⁾、洪(1999)¹⁴⁾を参照

	中国の頤和園	韓国の昌徳宮後苑
殿	 排雲殿 (Paiyundian)	 仁政殿 (Injeongjeon)
堂	 玉蘭堂 (Yulantang)	 暎花堂 (Yeonghwadang)
閣	 佛香閣 (Foxiangge)	 書香閣 (Seohyanggak)
齋	 澹碧齋 (Danbizhai)	 善香齋 (Seonhyangje)
軒	 霽清軒 (Jiqingxuan)	 寄傲軒 (Kioheon)
樓	 夕佳樓 (Xijialou)	 宙合樓 (Juhapru)
亭	 知春亭 (Zhichunting)	 逍遙亭 (Soyojeong)

〈図 5-6〉 中韓の伝統建築の写真

5.2. 齊・軒・門における庭園空間

中韓の伝統建築で、齊と軒は意匠技術や飾りが多くない素朴な形態をしており、静かに読書や修養をする場所として、両国伝統建築においてその性格が似ている(表 5-8 参照)。頤和園における齊・軒・門は景観的特徴と関連付けられている扁額が各々7点、15点、9点と多く現れる(表 5-7 参照)。澹碧齊の扁額「澹碧」は「静かな緑の境界」を意味する。人間の世界と自然の境界に立って自然山水(L1)を鑑賞し(L3)、それに対する解釈を詩的表現で扁額の意味に反映したと考えられる。澹碧齊は園中の園と呼ばれている「諧趣園」に位置する。この諧趣園には軒、楼、亭、橋、廊など庭園要素が豊富であり、城壁に囲まれた絶景を演出している(図 5-7 参照)。人工美と自然美が調和する庭園空間が、人間の美的対象となり、建築と扁額の意味が加えられ、芸術的美に昇格する水準の高い庭園の特徴が見られる。扁額「霽清軒」は「雨雪後、すがすがしく晴れわたった景色の軒」を意味する。雨雪(L2)を比喻して時間変化による自然風景を詩的表現で描写し、空間から感じた観察者の心象を扁額の意味に介入させたことが分かる。「諧趣園」に位置する霽清軒は堂、亭、門、廊と一つの



〈図 5-7〉 諧趣園の平面図



〈図 5-8〉 諧趣園に通ずる知魚橋の全景(a)



〈図 5-9〉 緑に囲まれた諧趣園の全景(b)

南北軸を形成して庭園空間の安定感を付与する。排雲殿の一門「萬象昭光」は‘光明尽きぬ世の万象’を意味する。賢明な知恵(P3)を発揮した政治実現を目指し、世の中すべての人に王の恩徳(P2)が到達することを願う、統治者の政治的意志が扁額の意味に込められている。排雲殿の一門前面には多様な文様で飾った石橋が配置されており、欄干の柱には雲形象が刻まれている。高くて強いイメージの橋を過ぎて政治的意志が反映された門を通過すると、王の空間である排雲殿が見えてくる。すなわち、門の空間は進入部の庭園様式と新しい空間の境界に位置し、空間の性格を転移させる特徴が見られる。

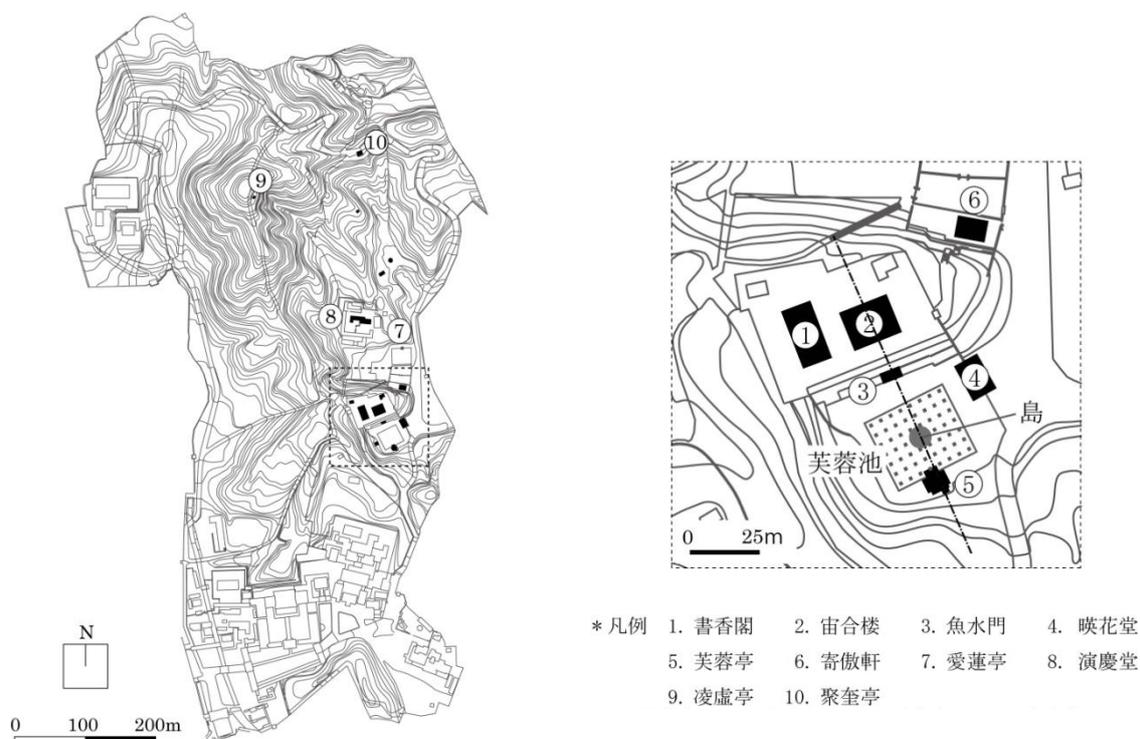
昌徳宮後苑における齊は思想的背景と関連付けられている扁額のみ(1点)である(表 5-5 参照)。扁額「善香齋」は‘良い香りがする家’を意味する。書籍を読んで保管する所だったため、良い香りは本の香りと考えられ、建築に庇が設けられているのが特徴である。扁額の意味は建築の機能と深く関係しており、学問を重視した当時代の儒教(I1)的特徴が見られる。軒は政治的背景と関連付けられている扁額のみ(1点)である(表 5-7 参照)。扁額「寄傲軒」は‘寛大な心を施す’を意味する。寄傲軒は装飾の多い建築と異なり、小さくて素朴な形態であり、北向きで採光が少ない。当時代は勢力家により左右された勢道政治のため、国政が不安定な時期であった。俗世から脱して贅沢でないつつましい所で学問を研いて徳を積む意志が扁額と建築の特徴から感じられる。門には、思想的背景と関連付けられている扁額が多く(12点)現れる(表 5-7 参照)。宙合楼の南門「魚水門」は‘王と臣下の心が水と魚のようにお互いに通じ合う’を意味する。王と臣下が一つになり正しい政治を広く行うという統治者の政治的理想が扁額の意味に反映されたと考えられる。魚水門は王が利用する大きい門と左右の臣下が利用する小さな門が一つの建築になっている(図 5-11 参照)。王と臣下が宙合楼へ入る前、和合を成そうとする意志が扁額と門の特徴から伝わる。

以上、頤和園において齊と軒には、景観的特徴が反映されている扁額が多く、周辺の自然山水を庭園に引き入れて審美的に庭園を観賞し、文学的な表現方法で扁額の意味に直・間接的に反映する特徴が見られる。一方、昌徳宮後苑の齊と軒には、思想的背景が反映されている扁額が多く、道徳と精神修養などの儒教理念を強調する特徴が見られる。両宮殿庭園で門は、空間の入口や性格が異なる空間間の境界部に位置し、その空間に合う扁額を掛け、空間変化に暗示を与え、特色を強くしている。加えて、頤和園の扁額には景観的特徴が多く反映され、昌徳宮後苑の扁額には思想的背景が多く反映されていることがわかる。

5.3. 楼・亭における庭園空間

中韓の伝統建築で、楼と亭は主に四方が開放されて可視距離が長く、池や小川など景色が良い所に位置し、休息や宴会空間としてよく使われた(表 5-8 参照)。頤和園における楼・亭には、景観的特徴と関連付けられている扁額が各々9点、31点と極めて多く現れる(表 5-7 参照)。扁額「夕佳楼」は‘夕日を見るところ’を意味する。夕日(L2)の美しい自然美と良い眺望(L3)が可能である場所の重要性を感じさせる。夕佳楼は昆明湖の東側に位置する玉蘭堂と宜藝館の間に建てられ、2階で構成されており、王が休息をする建築である。夕日に赤く染まった昆明湖と遠くに見える万寿山が見られる。扁額が楼の立地的特徴と機能、周辺空間の特徴と係わっていることが分かる(図 5-5 参照)。扁額「知春亭」は‘春の息吹きを感じる亭’を意味し、春(L2)の季節的要素が扁額の意味にこめられている。知春亭は昆明湖の東側にある小さな島の中央に位置し、橋を渡って進入する。橋を通ると2本のヤナギが植えられ、知春亭空間の雰囲気をつくり出す(図 5-6 参照)。ヤナギは4月に花が咲く生育特性を持ち、春の訪れを知らせる建築の名称と関連付けられ、扁額と空間的特徴を連結する重要な庭園要素と言える。

昌徳宮後苑における楼には、思想・景観的特徴と関連付けられている扁額が各1点ずつ



〈図 5-10〉 昌徳宮後苑、宙合楼エリアの細部平面図



愛蓮亭



魚水門

〈図 5-11〉 愛蓮亭と魚水門の全景

現れ、亭においては各々11点、10点と極めて多く現れる(表 5-7 参照)。扁額「宙合楼」は‘天地が一つになって自然の理により政治をする’を意味し、天地調和、天人合一を望む儒教的観念(I1)が扁額の意味に反映されている。宙合楼は政治空間である「治朝」に近接して位置し、地上から約7m上に建てられ、後苑で最大の建築規模である。講学と書籍を保管する場所であり、殿に上って下を眺めると、四角い形態の池‘芙蓉池’とその中に丸い形態の島が見られる(図 5-10 参照)。これは‘丸は天、四角は地’を象徴し、扁額の意味と符合することが分かる。扁額「愛蓮亭」は‘蓮華を愛する’を意味する。亭の名称は‘王が君子の徳(I1)を象徴する蓮華を愛する’から名付けられたと言われている¹⁶⁾。愛蓮亭は‘愛蓮池’という池にかけて建てられ、亭から外を見ると、池の水面上に浮かんでいる蓮華(L1)が見られる(図 5-11 参照)。扁額の意味と植物が内包する意味から儒教を理想とする空間的特徴が見られる。

以上、両宮殿庭園における楼と亭には、風景を鑑賞するのに相応しい建築構造、景観要素が豊かな立地、遊楽空間としての活用という特徴が多く見られた。その上、頤和園では、社会の安定と繁栄に関する念願が景観特徴に多く比喻されており、一方、昌徳宮後苑では、儒教社会が追い求める徳目と理想郷が景観特徴に比喻されて現れることが多かった。

6. 小結

本研究では、中国・頤和園と韓国・昌徳宮後苑における扁額の意味解釈とともに建築及び庭園の特性を分析し、両宮殿庭園の特徴を明らかにした。その結果、次の 3 点が明らかとなった。①頤和園には、湖の自然物や夕日、雲の自然現象、景観の描写などの周辺の自然風景を反映した扁額が多く、一方、昌徳宮後苑には、徳、仁、修身などの儒教理念と長寿や神仙世界への憧れといった思想的背景が扁額の意味に多く反映されている。②頤和園は殿、堂、亭を中心に扁額が掛けられており、扁額の内包する意味が建築の立地的特徴と関連付けられる特徴が見られる一方、昌徳宮後苑は亭と門を中心に扁額が掛けられており、道理と教育を重視した当時代の儒教思想と密接に関連付けられている特徴が見られる。③頤和園は、周辺の自然山水に対する感想を詩的な表現方法で扁額に引き入れ、庭園の価値を文学・芸術分野に広げ、より一層発展させる一方、昌徳宮後苑は、理想世界の実現に対する意志を扁額の意味にこめ、建築の特色や庭園の構成要素に相応しい空間をつくり出していることが理解される。

補注及び引用・参考文献

- 1) 鈞成・成鋼(1985) 頤和園楹聯鐫刻淺釋, 北京, 北京日報出版社
【鈞成・成鋼(1985) 頤和園の柱聯と鐫刻の解釈, 北京, 北京日報出版社】
- 2) 章 俊華(1999) 中国皇家庭園頤和園における「扁額」からみた庭園空間の特徴について
日本造園学会誌 62(5), pp.761~764
- 3) 谷 光燦・田代 順孝(2008) 拙政園の扁額と対聯による意境と空間に関する研究, 環境
情報科学論文集 22, p.430
- 4) 강철기(1998) 이화원(頤和園)의 조성연혁과 공간구성에 관한 기초연구, 한국전통조경
학회지, Vol.16(4), pp.1~11
【Kang, Cheol-Gi(1998) 頤和園の造営沿革と空間構成に関する基礎研究, 韓国伝統造景
学会誌, Vol.16(4), pp.1~11】
- 5) 章 俊華(1999), 前掲書
- 6) 咸 光珉・孫 鏞勳・三谷 徹・章 俊華(2012) 扁額からみた韓国の昌徳宮後園空間の
特徴について, 環境情報学会論文集 26, pp.393~398
- 7) 昌徳宮後園の扁額における第3章では、石に刻まれている6点も含んだ(全42点)が、本
章では頤和園との比較を行うため、扁額と認められる36点を対象にした。
- 8) 夏成鋼(2008) 頤和園匾額楹聯解讀, 北京, 中国建筑出版社
【夏成鋼(2008) 頤和園の扁額と柱聯の解讀, 北京, 中国建筑出版社】
- 9) 章 俊華(1999), 前掲書
- 10) 문화재청(2006) 궁궐의 현판과 주련 2, 서울, 수류산방
【文化財廳(2006) 宮闕の懸板と柱聯 2, ソウル, 樹流山房】
- 11) 奎章閣韓國額研究院, <<http://e-kyujanggak.sun.ac.kr>>, 2012. 7. 5 参照
- 12) 韓国古典総合DB, <<http://db.itkc.or.kr>>, 2012. 7. 1 参照
- 13) 章 俊華(2000) 中国皇家庭園と私家庭園の「屋宇」による空間構成の特徴とその比較
について, 日本造園学会誌 63(5), pp.399~402
- 14) 홍순민(1999) 우리 궁궐 이야기, 파주, 청년사, p.121
【洪淳民(1999) 我々の宮闕の話, 坡州, 青年社, p.121】
- 15) 최종덕(2006) 조선의 참 궁궐 창덕궁, 서울, 놀와, pp.177
【Choe, Jong-Deok(2006) 朝鮮の宮闕「昌徳宮」, ソウル, 訥窩, pp.177】

第 6 章

結論

1. 論文のまとめ

日中韓の東洋芸術は物理的な形の美しさより、その中に込められている精神的な意味に本質がある。現在の韓国伝統空間は、あまりにも目に見えるものに集中し、空間構成要素の形態や構造、意匠など、外観の物理的な面に中心が置かれる傾向があり、本研究における根本的な問題意識はこのような様相が正しいのかという疑問から始まった。

本研究の時間的な範囲は、韓国伝統庭園が発展した朝鮮時代(1392~1910)に限定し、空間的な範囲は国家の最高の統治者が利用し、当時代の造園文化の特色がもっともよく現れている宮園「昌徳宮後苑」を対象とした。

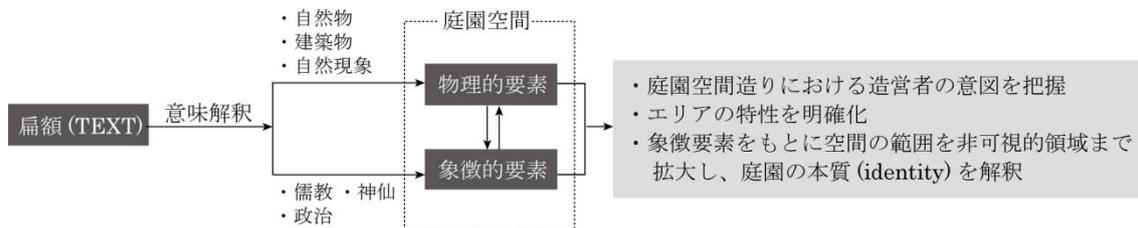
伝統庭園に表現された文化の内在的本質を理解するためには、庭園を結果よりは過程として認識する必要がある。過程の理解は庭園の造営意図、享受方法、自然観、象徴性などの理解をうながし、空間にアイデンティティ(identity)を与える。本研究は文字(text)から庭園に関する過程を理解し、可視的な特性以上のことを明らかにしようとした。その上で、文字表象である「扁額」と「詩文」を取り上げ、その意味と庭園の空間及びイメージの関係を分析し、昌徳宮後苑を解釈することを目的とした。全体の研究目的を達成するために、各章におけるそれぞれの視点から分析した結果は以下の通りである。

1.1. 「扁額」からみた昌徳宮後苑の空間特徴

第3章では、昌徳宮後苑に存在するすべての扁額を取り上げ、その意味に反映されている「思想」と「景観」の要素を抽出し、庭園空間との関係及び宮の全体における扁額の分布を確認した上で、昌徳宮後苑の特徴を明らかにした。その結果を<図6-1>にまとめる。

昌徳宮後苑の扁額には、儒教的徳目、正しい政治実現に対する王の意志、神仙世界に対する憧れなどの象徴的意味(思想)が反映されており、その意味は庭園を構成する小川、池、樹木、怪石、門、建築などの物理的要素(景観)と関連付けられていることが分かった。

さらに、扁額に込められている象徴的意味の属性から類似する領域が得られ、その領域が社会的脈絡とつながり、それぞれの特徴を作り出していた。まず、「宙合樓エリア」は、党の対立が解決され、社会・政治が安定された朝鮮後期に造営されたエリアで、中央の方池を中心に規模の大きい建築と花階、島、オープンスペースなど人工的な要素が多く分布する。扁額の意味には自然物(景観)と天圓地方(思想)が多く反映されており、空間の構造は建築、門、方池、地形の高低による強い軸線が作られている。エリア造営に主導的役割をした正祖(22代)の学問政治に対する意志が、扁額の意味と空間の構造と組み合わせられる



＜図 6-1＞ 扁額と庭園空間の関係

政治的イメージが強い空間の特徴がみられた。

次に「演慶堂エリア」は、朝鮮後期の時代に党間の均衡が崩れ、少数の勢力家の権力が強くなり、王の権威が弱体化された時期に造営されたエリアである。後苑の中でも比較的平地に位置し、意匠が少ない素朴な建築が分布する。扁額には、儒教思想が目指す「徳」、「仁」、「礼」と神仙思想が目指す「不老不死」が、樹木、怪石、日、光などに比喻された表現が多い。その扁額は建築の門に掛けられていることが多い。政権奪還を願う王の強い意志が扁額の意味に込められ、庭園を構成する自然物や自然現象になぞらえられた思想的イメージが強い空間の特徴がみられた。

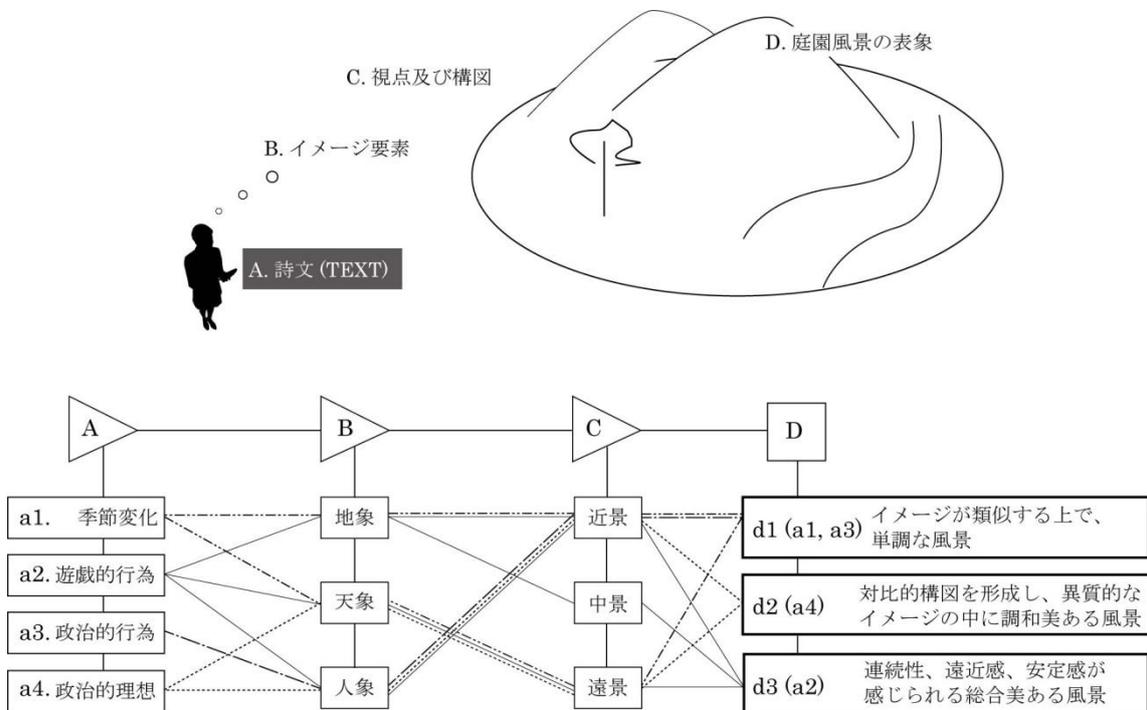
「尊徳亭エリア」は、外敵の侵略や全面的な党派の交代及び政策変化など、国政が混乱した朝鮮中期に造営されたエリアで、東西に形成された二つの尾根と谷がある所に位置し、樹林が豊かで静かな雰囲気演出されている。扁額の意味には徳・仁・孝(思想)が多く反映されており、扁額の意味が周辺景観の直接的な関連よりは、当時の儒教精神と深く関わっている。国政が混乱された時期に徳を高め、思索し、心身の安定をはかる場所として利用する修養的イメージが強い空間の特徴がみられた。

「玉流川エリア」は、反乱を起こし、統治者になった仁祖(16代)により造営されたエリアで、後苑のもっとも奥に位置する。時期的には、内乱と中国の清の侵略など、内外的な問題により国政が混乱した朝鮮中期に造営されたエリアである。神仙世界に対する志向と清い精神を強調する扁額の意味が、小川と滝などの自然物とつなげられている。また、政治的な理想が込められている扁額の意味は、「天圓地方」思想を象徴する方形の田とその眺望をよくとらえられる亭の立地的特徴とによく表れている。国政が不安定な時期において、私的には、国王の表面的な権力行為と休息空間の目的で利用された一方、公的には、社会の安定と繁栄を望む国王の意志が反映された二元的イメージが強い空間の特徴がみられた。

1.2. 「詩文」からみた昌徳宮後苑の風景表象の特徴

4章では、昌徳宮後苑の美しい風景を描写した詩文『上林十景』を取り上げ、被験者に思い浮かべる庭園風景のイメージをきく調査し、昌徳宮後苑の風景表象の特徴を明らかにした。その結果を<図 6-2>にまとめる。

「上林十景」から連想された風景イメージは詩文に表現され、風景を描写する語句に直接的・間接的に影響を受けていることが読められた。また、風景イメージは描かれた景観要素、視点(近・中・遠景)、演出技法の相互関係から昌徳宮後苑の風景表象が作られていることも分析された。まず、春と夏の季節変化(a1)と政治的行為(a3)が表現されている詩文では、それぞれ地象的・天象的要素と人象的要素が多く描かれ、近景に配置される風景イメージが多かった。樹木と鳥、池が春の季節感を表現しており、亭で雨が降る様子を鑑賞することが夏の風景、椅子に座っている王と、その前に伏せて試験を受ける群衆の姿が政治的行為に関する風景で認識された。また、以上の風景イメージは類似しており、描かれたイメージ要素が近景に密集する単調な風景表象が作られた(d1)。



<図 6-2> 詩文『上林十景』と庭園風景表象との関係

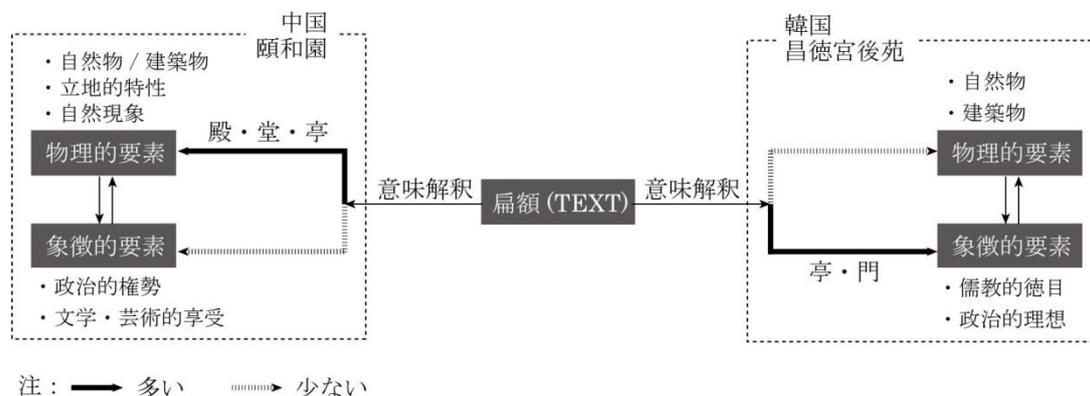
社会の安定と繁栄に対する政治的理想(a4)が込められている詩文では、天・人象的要素が多く描かれ、近景と遠景に配置される風景イメージが多かった。イメージ要素としては、近景に建築が、遠景に山や月が人々の印象に強く残ることが分かった。その要素はそれぞれ現実と理想世界を比喻したと考えられ、対比的構図を形成し、異質なイメージの中に調和美ある風景表象が作られていた(d2)。

舟遊びをする行為、お酒を飲みながら滝を鑑賞する姿、雪の降る風景を鑑賞する姿など、遊戯的行為(a2)が表現されている詩文では、地・天・人象的要素が、近・中・遠景の視点に複合的に配置された風景イメージが多かった。近景には亭、船、人が、中景には川や溪流が、遠景には山と日が人々の印象に強く残ることが分かった。多様な視点構成により遠近感が感じられ、中景の水理的要素により連続性が、遠景の地理・天体的要素により安定感が付与され、総合美ある風景表象が作られていた(d3)。

1.3. 「扁額」からみた中国の頤和園と韓国の昌徳宮後苑の比較分析

5章では、比較分析の観点で中国の宮園「頤和園」と韓国の「昌徳宮後苑」を取り上げ、扁額が掛けられている建築および周辺空間の特性、扁額の意味解釈を両庭園において分析し、両園の相違点を明らかにした。その結果を<図 6-3>にまとめる。

まず、頤和園は殿、堂、亭を中心に扁額が掛けられており、扁額に内包された意味が建築の立地的特徴と関連付けられる特徴が見られる一方、昌徳宮後苑は亭と門を中心に掛けられており、道理と教育を重視した当時代の儒教思想と密接に関連付けられている特徴が



<図 6-3> 扁額による頤和園と昌徳宮後苑の比較

見られた。次に、頤和園は湖の自然物や夕日、雲の自然現象、景観の描写など、庭園の特徴を決める物理的要素が扁額の意味に多く反映される一方、昌徳宮後苑は徳、仁、修身などの儒教理念と長寿や神仙世界への憧れといった思想を主流にした象徴的要素が扁額の意味に多く反映されていた。最後に、頤和園は周辺の自然山水に対する感想を詩的な表現方法で扁額に引き入れ、庭園の価値を文学・芸術分野に広げ、より一層発展させる一方、昌徳宮後苑は、理想世界の実現に対する意志を扁額の意味にこめ、建築の特色や庭園の構成要素に相応しい空間をつくり出していることが理解された。

2. 結論

近来、韓国歴史文化空間に対する社会的関心度が高まる上で、庭園の再発見と活用に関する研究及びプロジェクトが多く行われている。社会から注目されなかった伝統庭園が再評価を受けるのは歓迎すべきことであるものの、観光産業資源として扱われ、文化固有の象徴性より、可視的な特性に注目する傾向が現れる。人間が景観を知覚する上で視覚に中心を置き、意識することは当然な現象といえるが、このような様相は韓国庭園文化の理解及び価値向上に否定的な影響を及ぼす。

韓国の先祖は環境を大きく害さない範囲内で自然の地勢を生かして景物(landscape element)を適所に配置し、庭園の物理的基盤を築いた。また、庭園を、目でみて楽しむ遊楽空間であることを超え、自然から受けた芸術的感性を文や絵に表現し、読んで感じる次元まで引上げる象徴的な空間として利用していた。

本論文は文字表象である「扁額」と「詩文」に着目し、庭園を解釈した。文字が、ある現象の内容を伝える意(meaning)的機能と形像を伝える像(image)的機能があるとすれば、前者は「扁額」に、後者は「詩文」によく現れていると考え、分析を進めた。その理由は扁額には政治、思想、景観などの多様な意味が反映されており、詩文はある風景の姿が表現されていることで、新規に有用な知見を出すために対等であると判断したためである。

扁額は社会的・政治的な脈絡と庭園造営者の意識世界が反映された象徴物として理解され、その象徴的意味と空間の関係を解明する過程により、政治的・思想的・修養的・二元的イメージが強いエリアがみられ、庭園空間の特性をより明確にすることができた。また、詩文は風景のイメージを文字で表現したものとして理解され、その文字から風景イメージを再現することにより、風景表象が得られ、庭園を描く一定の基準と特性が判明した。文字(text)の観点から庭園を解釈することは、庭園をただの客観的物像だけではなく、象徴及び想像的対象としてみる視点を与え、庭園空間の範囲を目に見えない非可視的領域まで拡大させる。加えて、韓国庭園美学の奥深さを理解するために欠かせないものであることが理解された。

3. 今後の課題

東アジア庭園文化の本質を理解するためには当代の観念、思想、世界観、社会的・歴史的状況を把握しなければならない。そのような意味で、先祖が残した詩書画は、時代の思想と文化が反映され、過去と現代を繋ぐ重要な媒介体であり、庭園の本質を理解するための重要な資料になる。

本論文では文字に着目したが、象徴的意味が反映された研究資料の種類を増やせば、それによる空間の特色も多様な観点で解釈できる。また、庭園の空間的範囲を日中韓に拡大すると、国間の共通点と相違点の把握が可能であり、東アジアの庭園文化の流れと特徴を明らかにする重要な研究になるだろう。

本研究の成果をもとに、飾り紋様や植物の花ことばなどを通じた庭園空間の多角的な解釈とともに日中韓の庭園を対象にした比較分析を今後の課題としたい。